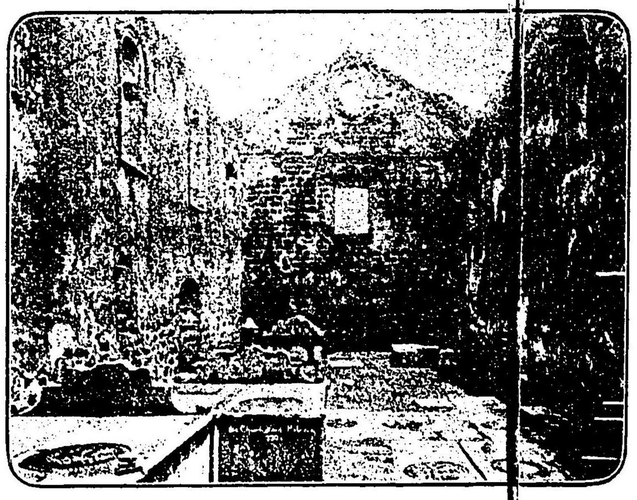
馬來半島の風物

リベリヤ種咖啡採取の圖

新嘉坡ニユーハーバー馬來村落

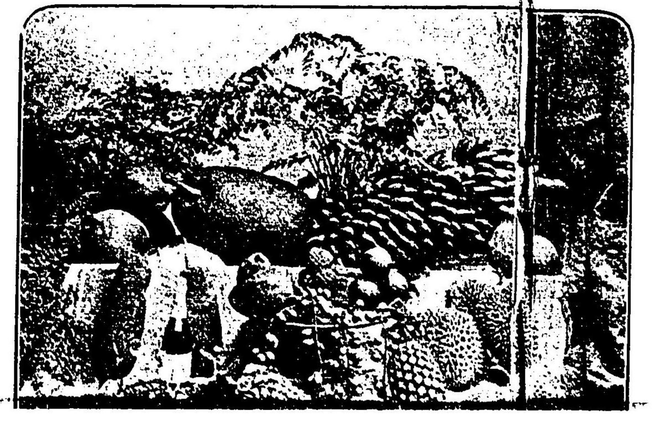
胡椒園



馬六甲古寺院の城跡

ラー國錫鑛の景

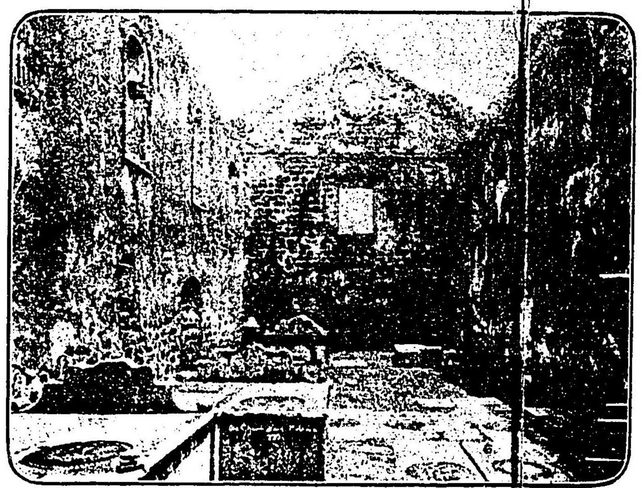
扇形椰樹



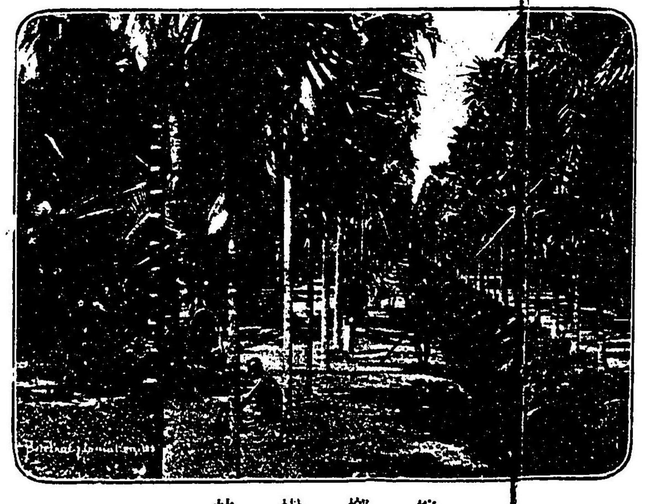
胡椒園

椰子樹林

リベリヤ種咖啡採取の圖



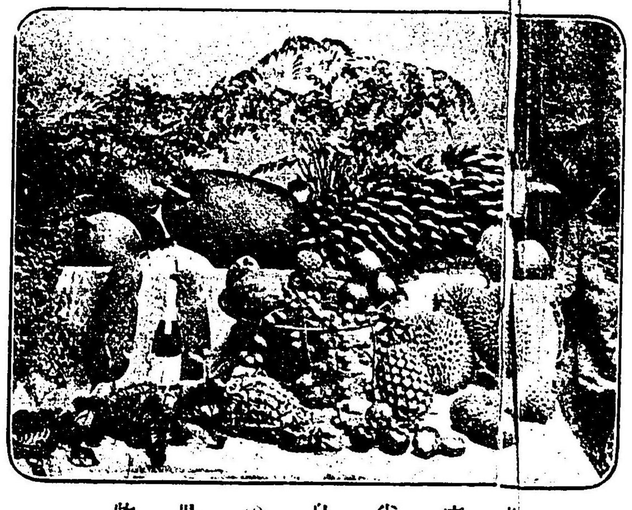
馬六甲古寺院の城跡



椰樹林

新嘉坡ニユーハーバー馬來村落

ラー國錫鑛の景



馬來半島の果物

扇形椰樹

澱粉"西"穀を產する樹

緒言

一本書は余が明治廿七年來書名の地方を漫遊せしの日、見聞の儘を記せしもの及横文を抄譯せしもの等を纏めて之を一册としたるものにして、今馬來半島事情の名を附し之を公にせんとするの意、聊か南隣風土人情の異同を語り、或は彼地企業の人士をして多少の參考に供せしめんが爲のみ。然れども新嘉坡港には帝國領事館の設置あり、其商況の一斑は之を知るに難からざれば、余は海峽市場に於ける日本貿易の配權（シェーア）の如き、之を詳論せずして止みぬ。事情の名或は其實を添はざるものあらんか。

一海峽植民地の章に於て、英領三植民地の一なる檳榔（ピナン）島を省略せり。聞く、檳城の地たる山水明媚、恐く半島第一の勝景あるべしと。余や馬六呷海峽を過ぐると前後六回、遂に此勝區を逸したるを常に憾事となす。

一本書附錄半島植物論の材料は、馬來人ナブデン氏、及該地在留先輩諸氏に負ふもの多し。是れ余の深く感謝する所なり。

明治卅一年孟夏於東京客舍　　星坡生識

目錄

前記　馬來群島を通觀す……一頁

光る王國、マルコポーロ、馬來群島如何、海洋、群島五大別、大陸との關係、海島の奇觀、森林動物、人種、土民と外來移民、群島の將來、大人の小兒、

第一章　馬來半島總說……一三頁

古代東洋の三要津、馬來半島、地形、山、地質、川、常夏國の天地、植物、花及菓、果實、半島の動物、蠻人サカイ、家、食物、部落大會、容貌、蠻人の女性、宗教思想、蠻人進化說、サカイ人の歷史、馬來人植民の起原、其本土何處、馬來語、梵語との關係、古代印度文明の影響、回々教の傳播、馬來文學、語音、馬來語の勢力、文法、記憶法、馬來通とは何、半島馬來人の現狀、家族、衣服、性質、馬來人退步の原因、半國邦國の區別、

第二章　海峽植民地……三七頁

其一　老たる馬六呷　十五世紀の馬六呷、歐洲人の探檢、セクイラ、外人排斥の密謀、其失敗、東洋十字軍、馬六呷の滅亡、當時の富源、馬港の變遷、現今の馬六呷、住民、海內の猿、古寺院、馬六呷夢物語、

其二　東洋の獅子街　「シンガプラ」の意、熱帶の樂土、港內のパノラマ、獅子街の要區、浦頭、人類博覽會、人種と職業、旅住度の社會、賄賂、回々教信徒の所禱、歐洲人の生活、其ポツケットの內幕、再び「シンガプラ」

其三　新嘉坡の貿易　重要商品、貿易線路各國、繁榮の原因、將來の貿易、

其四　海峽植民地の組織　沿革、政治、官吏、法律、行政、面積、人口、財政、

第三章　英國の半嶋保護政略を論ず……七〇頁

(一)商略の時代　英人の馬來貿易、半島に於ける英人の歷史、新嘉坡開拓者の政略、ラッフルの成功、海峽植地民

の獨立、
(二)國政干渉の發端　オード知事の建議、ペラ國干渉の端、クラークと阿房頭耶、バンコル條約成る、
(三)駐在官政治の眞相　其職權如何、國主との衝突、駐在官の暴行、權力の濫用、本國訓令の眞意、ジエポイス知事の位置、其策略、亡國の調印を強ゆ、
(四)パサー、サラの變　非英政府黨の魁、好漢盧耶、駐在官と屠る、愛國者、
(五)吡羅戰爭其後の政略　ペラ戰爭の滑稽、輿論の反抗、大臣の訓令、現政略の二大遺因、
(六)馬來半島保護聯邦組織　新條約の綱目、條約の眞相と評す、半島經營と英國の利害、遞羅問題と半島問題、半島史を讀んで極東の風雲を想起す、……九五頁

第四章　馬來聯邦國勢一斑
(第一)ペラ國　(第二)セランゴール國　(第三)ヂグリ、セミラン聯邦　(第四)パハン國　(第五)半獨立國ジヨホール……一一九頁

第五章　半島支那人論
其一　出稼人　苦力、馬來は支那人國なり、新客、客頭、移民法改良、貧乏氣たる扮裝、老客、節酒婦人、食物案內、食物哲學、衣住、支那人の宗教は何、支那宗の墮落、拜金宗徒の落第、金慾中毒症、賭博と物質、無賴匪徒、
其二　商賈　出稼人の出世、頭家國、商家立志傳の人物、其腦髓、才取根性、商業の習慣、海峽市場に於ける日本人と支那人、支那人日本雜貨商、猶猴的商人の手腕、支那人の永住、
其三　土生支那人　其特質、生活、婦女、教育、非愛國、金は勢力也、半島將來の偉大なる人種、
其四　英政府の半島支那人策、並に馬來半島の將來　半島馬來人の運命、醉世夢死の民、半島經營の自覺方針、支那人統御策の經驗、保護省の必要、支那人同化策如何、華人參事局規條、支那人政治的幼稚國は何國、馬來半島の將來、……一五六頁

第六章　自問及自答　馬來半島策如何、……
(附錄)半島有利植物論
(一)飲食物及香料　(二)護謨樹脂及揮發油　(三)染料　(四)植物生纖維　(五)木材　(六)其他

馬來半島事情

二宮峰男著

前記　馬來群島を通觀す

天地靈妙の氣、ヒマラヤの峻嶺と成り、ゲンジスの長江と成り、ベンゴール灣頭水深くして煙波千里、落落せる亞細亞大陸の土壌、更に其頭角を熱帶圏裡に顯はさんとするの邊、印度大洋の水東に流れ、其間幾群の島嶼を點綴し、天然の富華を鍾めたるもの、之を馬來群島と云ふ。

追想ず、六百年前の昔、學術未た進まず、航海甚た盛ならずして、世界圓球の理道破されさりし時代の此馬來群島は、『印度王國』なる名稱に埋れたりし、『アラビヤン、ナイト』の文壇なりしよ。人は小說の世界にすら有る間敷の妄想を逞くし、金、銀、珠香、象、犀、玳瑁、其他たぐひ馬來の珍怪は、山の如く又海の如しと傳へたりしもの、後の好奇なる商賈を刺激するの野心となり、大膽なる航海者を吸引するの磁石となり、何時しか西方世界の冒險兒等、『光る王國』に珠を拾ふの夢を結ひ始めぬ。

彼の亞米利加及南亞非利加の發見者をして、印度遠征の志望を此間に抱かしめ、世界の他の局面に於ける地理學者は、東方星下に地上の壯麗富華を集めたりとの『日光國』に達すへき、安全確實なる行

路を追窮せんと欲せり。而も馬來群島の風說は、既に千二百五十年の頃、伊太利フエニシヤ人の探檢に因りて全歐洲に傳はりぬ。如何に東洋國民の『カン』『クブライ』『王の王』なる都門の壯麗は、當時の人心をして驚美に堪えざらしめけるよ。續て起れるマルコポーロとなす。彼か一世を驚かせし南方の珍譚に曰く、『深紅の龍蓋、緞子、紅寶石、エメラルド』、碧玉を散らせし剪絨は、日々車千輛『カンバル』の門を出入す。或は『カン』の宮殿に珠玉の寶壺あり王座を輝す。燭火は五色の光彩を放ち、金、銀、絹、香料、寶玉、其他無名の珍怪は彼を圍繞し、到る處の寺院宮殿は黃金を鍍め、到る處の川流金砂耀き、又到る處の森林異香を放ち、全土は凡て美麗煌燿を極む』と云ひしは、是實に印度大陸を形容せしのみならず、又群島を以て地上に於ける現實の天國なりとし、――無數の州島排列し、果實熟し、花卉榮ゑ、金波搖々として其間を流る』と。

然るに是等の奪魂的空想は、百聞一見に若かざる反對の事實と化したれとも、其後續々の發見者が極東を穿鑿し、『光る王國』其富華の本源眞相を窮めたりしに、此土尙は是れ世界に無比の壯麗豐富なる地域にして、其壯麗や而も天荒、人飾を用ゐず、其豐富や而も天放、人の拾ふに任すと、最後の學術的行客をして斷案を下さしめしの馬來群島、地圖を披ひて試に其山水の文章を見よや。

五洲の水、何れの所か州島の群を爲すもの馬來海洋の濶大に若かんや。其範圍は東經九十五度より百卅五度の間、北緯十九度より南緯十一度に跨り、方四百五十万哩の海陸面を抱括す。群島は即ち東半球世界の中央にして、其周圍には亞細亞の最僻國横はり、古來彼等か海上貿易の街道たりき。今夫れ馬來群島中、ニユーギニヤを其範圍に列せざるものとし、重要なる島嶼を擧くれは、ボルネヲ、スマタラを其最大なるものとし、ジヤバ、馬來半島殆と同大にして之に次き、セレブス、ロゾン、ミンダナヲを第三者に列し、以下第四位なるもの十有六島曰く、バレ、ロンボ、スンバヲ、チヤンダナ、フロレス、テモル、セラム、ボウル、キロヽ、パラワン、チグロス、サマヤ、ミンドル、パチー、レーテ、セブ是也。其過半は沃土宏濶、河流縱横し、而も無限の天富を抱藏す。彼等は列星の如く、其大なる者小なる者脈胳相連り、無數の海門水路を開きて散布し、或は水烟濛々、暗礁沙灘を蔽ひるも、風向定まり洋流時を失はされは、舟行の危險少く、時に颶風馬六呻の海峽を襲ひ、怒濤支那海に鳴號するあるも、こは稀有の事として方五百萬哩の群島、其大部は海神の赫怒を知らすと云ふ。

馬來半島の海、又之を地理學的に五水となす。即ち抑乎たるボルネヲ、馬來半島の海、次にボルネヲ、ジヤバの海、或はセレブス、テモルの海、他はセレブス、スル、ミンダナヲ間のセレブス海にして、最後にフヰリピン、パラワン、ボルネヲ諸島の圍める漫々たる海水あり。其周圍には西ベンゴール灣、印度洋を扣え、南濠洲の水、北支那海あり、東は淼々たる太平洋と交る。舟の西南より來るものは、スマタラ、ジヤバの長壁を穿てるサンダの海峽を過き、其南海に沿ひてジヤバ、テモルの間に亘る一千六百哩の斷續せる島線は、幾多の海門を開きて東方の航路愈々廣濶となり、唯た北方の海フヰリピ

ン、パラワン、ボルチヲ附近に險水參差たるは、寧ろボルチヲ、スマタラの通航容易なるに若かず。群島の全体は熱天の下に位し、其中央は赤夜平分線之を横斷し、フヰリピン諸島を除かは、其餘は概して両緯十度以内に横はれり。以是其氣候、生産、民種は自然類似の勢ありと雖も、更に詳細の觀察を下さば、個々の特質を發見すへく、地學者之を五大別す。而して其島人は生殖種及近年移住の種族を除けは、均しく印度支那種に屬すと雖とも、彼等か歴史上の變遷、地理、外人交通の互に均しからさる影響は、其間殊特の習慣、風俗、言語、文物、制度を化成せすんはあらす。

其第一群島を馬來半島、スマタラ、ジャバ、バレ、ロンボ及ボルチヲ三分二の地域、即ち東經百十六度に至る間とす。土地肥沃、物産精良、人智開け、文字を解し、技藝に通し、米を食す。米は豊饒にして供給餘裕あり。

次はセレブスを中心とし、東經百十六度より百廿四度の蠻島及其邊に跨る、ボルチヲの一帶北緯三度間の部分にして、土地肥沃と云ふを得す。人民は多少の技術に通し、一種の言語風俗を有し、米の不足は往々食を西穀に仰く。

第三群は其區分一層顯明にして、東經百廿四度より百卅度、北緯二度より十度の間に亘り、此邊貿易風其方向を變し、西方ベンガラ灣に向ふ區域の乾燥なる候、此地は濕潤にして肉豆蔻、丁香繁茂し、人民西穀を常食とす。

第四群は東經百十六度より百廿八度、北緯四度乃至十度の間に亘り、ボルチヲの東北角ミンダナ、スルの諸島を抱括す。此地域劣等の肉豆蔻、丁香、少量の米、多額の西穀を産し、民性概して慓悍なり。

第五群はフヰリピン群島是也、或は之を馬來群島より除く。沿岸颶風起り、地味膏腴にして烟艸、砂糖を産し、米は良質を賞すれとも胡椒、香料の植物に乏しく、又スマタラに熟する果實の類を見ず。

轉して群島其亞細亞大陸との關係を考るに、寧ろ討尋すへからさる地層變遷史の問題に屬す。左れと亞細亞の一大土臺に在りしは疑ひなきか如し。馬來半島は地理學的に幾點の州島を以て、晩霞島と連續し、スマタラと密接して、等しく南海に突出す。ボルチヲ、セレブス亦印度支那大半島の片腕たるを示し、支那海其間に漫々たり、是其の沈落せしにあらすとせんや、全島は一大噴火脈中に横はれはなり。炎々たる地下、幾萬斤の火力、非常の勢力を以て彼邊の山海を弄ふ。或は千尋海底の土を負ふて隆起し、或は土地の一片を割き、割き且つ二大分し幾萬分して海中に雨散す。而して此天地の混亂は、人間史前幾千歳なるを知らすと雖とも、今尚其餘炎は之を噴火の代理店に徴すへく、群島行く處として鎮、活、火山の存在なきはなく、爪哇の全土、火鎔石層縱横し、火石年を經て雨露を吸入し、水中の酸相交りて破碎し、溶解し、草木繁茂す。司馬太來の地、温泉林間に沸き、スンバワの火山、旅人の耳を劈きて遠地に鳴動す。而して其鹽井、鑛泉、温湯、又は灰、火石、破碎せし岩石、朽ち果てし森の片々、是豈に人をして往年の變動を想像せしむるに足らすとせんや。

好し其變遷は如何なりしにもせよ、群島の形勢位置たる最も原世に屬すべきは爭ふ可くも非す。夫れ造化の靈妙は、ヒマラヤの万嶂と成り、ベンゴールの沃野となり、漫々たる東海の面、此美なる島嶼を撒布す。大空の陽、大水の陰と交りて妙々活動し、恆風を送り、甘霖を降し、草木榛々、花咲きて綠深し。若しも東方の世界に山河の雄偉なるを擧くれは、山の快絕は印度の如きあり、水の壯絕は支那の如きあり、中にも其秀麗典雅なるは日東を推して第一とすへきも、海島の奇觀は馬來之を擅にす。ボルネヲ島は其中央に横はりて宏大雄麗、半面の地人跡到らす、水土迷亂して其周圍を廻る。又見る森嚴優美なる司馬太來（スマタラ）、爪哇（ジャヤ）の陸土、或は富華奇景の香料島綿々として連り、大洋の水之を洗ひ、波は陸の港灣に眠り、流れては無數の海門を通して際涯を知らざるの晴海に入る。凡て是れ水土の妖術的奇跡なるよ。州島の多きは萬を以て數へん。暮色蒼然として遠き者雲の如く、島の如く、又舟の如く、空曠有無の彼方に隱見す。舟あり印度洋を踏へ、疊嶂千里の海門サンダ峽を過くれは、光景忽ち一轉し、雲輕く風靜に波又平にして蓄黛窈渟し、眼を極ひれは翠堤ならさるはなく、州島の缺、舟程開け他の青巒を望み、島は舟の進むに從ひ多きを加ふ。千狀万態、動心駭目、或は大島を周航して旬日の間海よりも陸を見、水面稍々廣濶にして左舷陸を失ふの時、右岸の珍木美箭一々之を數ふへし。群島の特に艶麗を賞するは、新綠の色變せさるにあり。黑泥の沿岸は朝暮海水の洗ふあるも、綠陰鬱紆として黛を引けるか如く、珊瑚の岩礁、辛ふして其尖頭を波上に形はすものは、恰も花籠の浮ふに類し、

島の扁平なるは青氈を布けるか如く、無數の小島、巨島を圍みて大環を描くあり。花崗石の峰嶺、圓錐の火山、高さも低さも翠色變せす、未た紅葉を知らす、常て落葉を見す。

左れは其常葉なる森林の美は、ブラジルの宏壯に孰れぞ。爪哇の山、隴畝陂陁として果穀丘陵と昇降するを散見すれとも、半島、ボルネヲ、司馬太來（スマタラ）の全土は密林千里に蔓延す。其樹木の大、或は百圍千尺、喬々として天空に參し、其葉厭くまで繁り、千百の蘿之を繞ひ、蘭芷寄植し、花香り、翠滴る。

鳥あり又其間に飛鳴す、其聲或は長く深く銳く、而して又喧しき者ありと雖も、囀々喇々の美音を奏する稀なるを思へは、其音樂の妙は羽毛の人目を眩するに若かす。蛇あり樹間に蟠る、其赤きもの、青きもの、茶褐色のもの、人魂を奪ふ大のもの、弛然として落ち幽叢の裡に眠る。昆蟲又限りなく、セレブス、ボルネヲの山野に生し、青銅の甲蟲異香を放ち、銀翼の胡蝶舞ひ、螽斯常に鳴くあり。

大島に猛獸捿み、小島に飛禽多し。乃ち象、虎、犀、豹、貓、『ミナスパヽン』、樹獺、水牛の類藪林に遨遊し、是等の猛動物を知らさる香料島の如きは、美麗なる『ノリ』日光鳥、千種萬樣を以て數ふる中にも、鳥の女王は『天堂鳥（パラダイスバード）』ならん。怪に曰く、神使を帶ひて天日に向ひ、下界の芳香に耐ねすして此島に降り、竟に人の手に落つと。花に印度『ロトス』、虎百合、菫、隱君子あり、幽谷に香る。

鰐は蔭暗き栲樹の河岸曲江に群生し、蜥蜴の族亦多種なり。魚あり海中に滋滿す、而も珍奇なる人魚の如きあり、捕へて國王の珍味に進むと云ふ。今夫れ吾人の觀察をして、單に動植物の繁衍にのみ專

ならしむるとも、群島は其艶麗と多種なるの點に於て亞細亞に冠たり。或る歐洲の記者は、其眞景を描かんと欲せは焉んそ誇大の筆を揮はさるを得んやと賞し、或は天地美妙の神靈は、世界の他の局面に其美を秘密とするもの此地之を開放し、彼女は天然の艶麗を裝ふとせり。思ふに其農商生産の財源に至りては、蓋し洪大無限ならすんはあらす。其金石珠玉或は高貴なる謎謨良材の世界に見る可らさるものを特産すと雖とも、未た人跡の到らさる地多ければ、是等無限の寶庫は先入開拓者の『モノポリー』に歸せざるを得んや。

群島土着の人種を馬來由（マレユ）と云ふ。其研究は人類學者の好問題にして、彼等は歴史的に久しく世界に知られさりし民種の一なりしが、大陸亞細亞の航海者が此島人と交通を爲せしは、既に二千年の事なりと云ふ。東邦古來有名なる商業の民族ありき、即ち南天笠の吉寧（キリン）人是也。彼等は夙に航海貿易の業に進歩し、古來南部亞細亞の賈權を握りけるが、漸次に馬來群島を往來し、其産業、風俗、習慣、宗教を島人に傳ふるに至りぬ。其後印度王國爪哇に興り、民人を分ちて佛教徒、婆羅門教徒となし、馬來人勃興して各地に植民を始め王國を建て、生蠻逃れて内地に入り、亞剌比亞人法を傳へて印度教に代り、年を經ると殆と五百年。歐洲文明の東漸は、群島土着の民人の運命心性に偉大なる影響を及ぼせしも、歐洲人は猶亞剌比亞人の如く、半開土人の眞性を腐敗せしめしの形跡あるは、例へは和蘭人の爪哇に於ける、西班牙人の呂宋に於けるか如し。而して彼等か續々の移住、植民、征服、變遷の結果は、各種の民族、言語を化成し、其習慣、風俗、制度を錯雜ならしめたりき。然れとも生蠻種族にして、個々別離の部落を成し來りし者は、却て此等外來の勢力に遠かるの傾向を生せり。是れ高等なる人種は、往々其長所を濫用して劣者を虐待せしかは、劣等者は文明人を厭ひて、深く林野に潜匿せしに由らすんはあらす。其地味は豊饒なり、然れとも蒔くことを知らす、耕すことを爲さす、蠻人天然の寶庫を抱ひて一生を殺伐に終ふ。司馬太來に蠻人あり、黄金乳香の産地に住し、ボルチヲの山民、金剛石樟樹の價なきに馴れ、或はモロカス島の民、豆蔻花咲き亂れ、丁子香高き邊に起臥し、身邊背て寸衣を纏はさりき。

思ふに今日の社會學者をして、是等錯雜せる社會民族の中に在らしめは、彼は群島を以て人間史の野蠻より文明に赴く三千年間の經歴、其進歩の狀態を研究するの好材料と爲すものならん。林間に人あり、腰邊木皮を纏ひ、木實を食ひ、野獸を追ひ、或は竹筒毒矢を吹きて巧に飛鳥を捕ふ。殘忍なるは司馬太來の『人喰ひ人種』。其存在は明白にして早世冒險家の記事に存するものは、今日の行客か均しく認むる所なり。或は蔭欝なる海峽に出沒する水民族あり。獨木舟は其搖籃たり、家たり、己か屍を葬むるの棺たる、恰も亞剌比亞人の駱駝に於ける、韃靼人の馬に於けるか如きも、彼等の漂泊するは牧野ならす沙漠ならすして、海、時に捕魚を試むへく、時に海賊を働くへし。進んて稍々耕作の業を營む種族は沿岸の平地に三五の蝸廬を作り、果樹を栽し、黍穀を植ゑ、糸を紡き、布を織り、或は物

々交換の事を爲す。外來移住の人種は、荒蕪の地を開きて胡椒、珈琲、檳榔、烟艸を植え、森林に籐、木材、香木、護謨、樹脂、象牙、獸皮、羽毛を採り、海に海參、海菜、眞珠を拾ひ、山に錫、金、金剛石を掘り、或は商船を浮へて河流を上下し、海を横切りてシンガプラ、バテビヤ、マニラ、マカサの間を往來す。而して眞に蓄積の精神を抱ひて勞働を爲すは、殆と此等外來移住の民種に限られ、群島土着の人民等、恰も天然を樂む世外漢の如きも、外來者の希望は、人生の後半期に榮華の夢を結はんことを期す。此點より之を觀れは、馬來人、ブキス人の如きは、此化外の頑民と同一視せざるを得ざるの憐む可きものあり、何となれは彼等は群島の各地に植民地を興し、古のシンガプラ、バテビヤ、アンボンを開きたる有爲の民族なれはなり。然れとも不幸にして其社會の暗黑なる局面には、猛惡なる風習を生し、其植民地の發達、民人の運命に尠からさる害毒を及はせしもの、即『馬來海賊』の横行せし事にして、更に悲む可きは、現時の所謂文明を唱道する歐洲人の最初此地に來りしもの、其行爲の往々海賊的たりしにありとす。

曰く支那人、印度人、亞剌比亞人、和蘭人、英吉利人、佛蘭人、獨乙人、若くは彼等の混種は此『モノポリー』場裏の競爭者として、海の東西南北に交通す。蓋し追年群島開拓の進ひに從ひ、其來往は今日に倍せん。何となれは、物質的文明の材料に至りては群島實に其資に乏しからされはなり。則天候の和順、地味の肥沃、天產の富華、航海の便益。――然るに是等のもの擧て之を外人の占有に歸せしめ、其國人は彼等の壓制に服從せさるを得ず。且つ彼等か人類として天地間に享有する幸福の分量は。之を往古亞細亞的君權の行はれし日に比し、減殺されしも寧ろ增進の實を見ず。馬來群島史は其由來を語る一篇の悲劇也。噫馬來王國は亡ひ、馬六甲（マラカ）メナンカボ國民の全盛は、東洋譚中に葬られたるや久し。而して現今僅に命脈を繫くものは、北部司馬太來の殘壘を死守する慓悍のアチン人、形骸的獨立の名ある半島（ジョホル）柔佛國、若くは王侯の尊なきブルネーの蘇丹（サルタン）、半は海賊の如く半は奴隸の如き類を存するに過きず。

夫然り、馬來群島の王國は疲滅し了れり。然れとも其民人の今日に存するものは、之を導くに良政を以てし、之を化するに文敎を以てせは、彼等をして文明の恩澤に浴せしひるを敢て難しとせんや。民人多くは天眞愛すへき氣風を有す。固より半開土人の惡性たる怨恨厭く迄深き、或は生命の重きを知らさるか如き、或は虛榮執迷の念盛なるも、他方には又幾多の善德、即眞理を愛し、公平を好み、同情感恩の心あり。勇士として又治者として彼等は往々過酷なりき。然れ共特に殘虐の評を下す勿れ。其資性は壯快なり、親切なり、人に接するに禮あり、飲食に節あり、唯た憾ひらくは天豐溫暖の國土に生れ、衣食の勞働を必要とせさるより、懶惰の風行はるれとも、爪哇人の如きは夙に農民として聞ゆ、馬來ブキス亦航海の技を好み、稍々冒險の風を見る。下つて蠻人の山野に棲み猿猴の食を探るに等しき生活を爲すものすら、其性惰觀念の寧ろ愛すへきを知らは、焉んそ之を人類社會外に排斥す

可けんや。彼等はカーライルの所謂『大人の小兒』にして、日常活潑なる遊戯を事とし、鄙歌を吟し、音樂を好み、怪譚を語る。半島にジャクーン人あり、腰邊木皮を纏ひて跣足、黑面にして細目、厚唇にして仰鼻、左右に吹筒毒矢を横ふ。集りて宴を椰樹亂生の下に開くを見は、村醪溢れ、謠歌起り、舞踏始まる。若者は草葉を布きて兀座し、竹筒を傾け飲み且つ食ひ、未來の情人を目送しつゝ談笑するの社會、焉んぞ同情を表するに足らすとせんや。願くは文明の光をして彼等の人情を和け、其頑冥を啓にし是等天荒の兒を虐待せしむる勿れ。

第一章　馬來半島総說

昔者歐洲の雄王イマニユエル四方の志あり、王か當時の地圖を披きて世界の形勢を論せし頃は、紅海のアデン、波斯のオルムス、馬來半島のマラカは、實に東洋の三大要港なりき。而して半島は啻に天産の富を以て群島に冠たるのみならず、其名は群島蠶食史の開卷に在り。新嘉坡は我臺灣を距つる僅に一千六百海里にして、印度航路の中央に横はれるも、其本陸は未た邦人の間に傳はらさるもの多し。星坡生曾遊の故を以て、我觀の小景を描かんとするに際し、乞ふ第一章をして、馬來半島の小『ミユージャム』たらしめよ。

馬來半島一に之を馬六呷（マラカ）半島と稱し、國人之を『タナ、マラユ』（馬來由人の國）と云ふ。印度支那大半島の南極部に位し、クラの地峽を以て亞細亞大陸に連接し、パツシヤン河を界として英領バーマの南端に起り、蜿蜒六百哩餘、司馬太來島の北部と平行して南ルーマニヤ岬に終る。地形大蛇の半身を形作り、其幅員最も狹きを地峽四十哩の邊とし、下つて二百哩に膨脹し、再び南部に縮小す。面積七萬方哩、人口百五十萬餘。東に支那海あり、暹羅灣を横切りてカンボヂヤ半島に對し、西にベンゴール灣あり、馬六呷海峽を距てゝ司馬太來に隣し、南は幾多の群島を以て遙に濠洲大陸に連る。

彼の嵯峨せる印度の大地脈、一方は西廊（トーロン）に終り、他の一方はアラガンペグの高原に登へ、暹羅、バー

マ國界の大山脈を爲すもの、馬來半島の脊髓となり、クラ以南山勢廉崖として再ひ半島の本部に隆起し、國の中央を馳せて東西兩岸の分水界を作り、ペラ、パタニ諸流の源頭となり、分れて東西二大脈を爲し、其東部に綿亘たるものは、クランタン、ツリンガヌ兩國の西境を走りて蛇半島の頂骨となり、西脈ケダの中央より馬六呷の後背に起伏し、竟に海に沒するものは、其山嶺を萬里洞（ヒリトン）、晩霞島（バンカ）に顯す。半島東西の兩岸は、現今人戸滋殖し、農業の行はるゝ地方にして、地質學上近代の構造に係り、地質は花崗石層より成り、錫を含む硅石の脈横切り、砂岩石、粘土、「ラテライト」其上層を被ひ、北方往々石灰石の岡邱を見る。又地質學上の著るしき現象は、錫の豊饒なるにありとす。其他金、硫化鉛の如きも、所々に存在すと雖とも、錫は半島を通して、到る處に發見せらるへく、北緯十四度タボイ以南、赤道直下カリモンスよりリンガ島に連り、尚ほ南緯三度晩霞島附近に其鑛脈を見る。

半島河流の長大なるを見す、是其地形東西に狹く南北に長くして、全土を貫く山脈は自ら水路を東西に通すれはなり。思ふに河道は、初め人間か天荒を打破すへき唯一の舟程にして、馬來半島か多年拓植の進歩を爲さゝるは、此理に由らすんはあらす。稍々大流と稱すへきは、東岸を流るゝパハン、クランタン、パタニ及馬六呷の海峽に注くペラ、バーナム、カラン、モアの諸流にして、內地に散在せる新植民地は、凡て是等河道の便に賴らさるはなし。其他の川流に至りては、幅員大なるものも河口塞り、大船巨舶を容る可らす。稀に底淺き獨木舟、栲樹の影を縫ふて上流に溯る。

氣候は炎熱にして濕潤なり。半島の南端をルーマニヤ岬と云ふ、北緯一度廿三分にあり。半島語を換ゆれは常夏國、世界の熱帶圈裡に横はり、三百六十餘日を通し四季の變化あらす。天に風あり、『モンスーン』と云ふ。則ち亞刺比亞語『ムシム』（時季）の轉訛にして、其吹き來るや時あり、概して五月より十月の頃に吹くを、西南『モンスーン』風とし、十一月より翌年四月の間に征來するを、東北『モンスーン』風とす。此風常に雨を送りて絶ゑす、風の方向變するときは必す霖雨伴ふ。故に其時期を以て氣候を乾濕に區別すれとも、半島の南部司馬太來の庇蔭たる箇所は、其變化を感すること少く、軟風徐々として年中天候の平穩を保つも、時としては陣風雲を呼んて起り、白鷗の夢を驚かす司馬太來風あり。此風西南司馬太來の方向より起り、馬六呷海峽を過くるの强風にして大雨盆を傾け、雷聲殷々、天地に鳴動す。瞬時にして雨霽れ、快晴蓐の如し。又風の五月より九月の頃、正南或は東南より來る者を瓜哇風と云ふ。瓜哇風初めは清冷を感し、後ち火爐上に座するか如き、一種不快の熱氣、身體を襲ふを覺ゆ。

英領檳榔（ピナン）港は北緯五度十五分に位し、平均一年の溫度八十。新嘉坡は北緯一度十七分にして、六十八度より九十二度の間を昇降し、年中降雨最も多しとす。左れは半島は其位置の赤道直下たるに拘はらす、其風土溫熱は決して吾人の健康に適せすと云ふ可らず。炎熱地を焦し、万物將に枯死せんとするとき、疾風驟雨を注き、人は永久の溫暖と樹木の常葉なるを誇る。

太陽は東天六時に上り、西山六時に傾く、其間十二時、年中著るしき日の長短を知らず。晷は正午より二時の頃に烈しきも、四時半に至れは散策を試むへく、夕陽西に沒すれは陰暗直に迫り、黎明の心地は春の如く、黄昏は秋の如し。晴夜草は深く露を帶ひ、水澤池沼白霧曚々、仰て蒼穹を眺むれは、銀河淡々天に漲り、北極星水平に光を沒して、南天の列星爛々頭上に近く、かの椰子樹間に懸る鋭の如き月は、常に吾人の賞する中秋の明月なり。

次に此天候地氣か醇化せる植物の温帶地方に異なるものを記さんに、山河の景は四時蓊鬱として翠濃かに、其山嶽丘陵溪谷の豊なる外套は、夏天常に光澤を減せす、終歲時季の變化を知らさる上に、温暖なる射光、濕潤なる大氣は、間斷なく植物の成長を促せは、彼等の大部分は常綠性の喬木灌木にして、稀に其然らさるものを見るも、脫葉數日の後には紅なる新芽を發し、菁々繁茂す。殊に其奇なるは、一樹にして新綠萌芽し、落葉し、蕾を結ひ、花咲き、果實を熟す等、温帶四季の變遷を同時に見るあり。沿岸の地栲樹茂生す。其多きと猶我國の松の如く、割りて薪材と爲すものを『カユ、アピ〜』と云ふ。其樹皮は熟皮用に供す。潮滿れは枝は水中に沒し、葉は波と共に漂ひ、干涸せは根骨高く、其色は葉卷煙艸の如し。或は雨を呼ふ椰樹、亭々として水堤數里の長林を爲す。而も其類最も多く莖の圓なるあり、葉の粗大なるあり、刺を有するあり、幹の細長なるあり、以て弓筒を作り、梁柱を作り、屋を葺き、繩を編み、油を搾り、酒を釀し、砂糖を製し、其用最も多しとす。或は笠中大扇を擴る如きものを、『旅人木』と云ふ。行人喉涸れ、飲を欲するとき、其莖を刺さば清水滴る。或は枝垂れて雨の如く、其大なるはホソビキを下せる如く、地に接して新根を生し、枝又枝、根又根、無限大に生長する者あり。其他森に籐、竹、『ニプン』、『ニパ』、烏木、蘇木、『セラヤ』、『メランテ』、『ダンマラウ』、『カムニヤン』、『ビンタンゴル』あり。以て船を作り、家を建て器具を製し、或は高價なる紅乳、白乳、樹脂を產する嘉樹、珍木は、半島森林の特產にして、其植物界の如何に豊富なるかを示すと雖も、花の美麗は寧ろ之を欠けるか如し。是其花形多くは細小にして、繁葉の裡に沒し、或は開蕾に一定の期なく、或は甚烈の射光に長生せさるなるか。庭園遊圃の地、一も吾人梅櫻洲人の賞花す可きものあらさるを思へは、天地美妙の神は、熱國の植物に花を與へす、然れとも葉、其色や丹碧黃白、風を帶ひて紛紅駭綠す。其彩色の華美にして其形狀の奇異なるは、吾人か決して温帶の植物界に見る能はさる處なり。

轉して斧鉞鎌鋤の來襲せし地域には、米、西穀、蕃薯樹、烟艸、檳榔等盛に發育し、高原丘陵には、胡椒、甘蜜、咖啡、肉豆蔻、丁香皆能く候土に適す。野菜の食卓に上る者は、大根、茄子、葱、大蒜、胡瓜、白瓜、南瓜、絲瓜、角豆、蓮根を日常行用し、果實は、甘焦、椰子實、鳳梨を始め、柘榴、『チンポタ』、『ランポタン』、『ジャンブアヤ』、『ジャンブキリン』、『マンゴ』、『パパヤ』等果期に從ひ、成熟し、其種類多き中にも、味淡甘にして異邦人の嗜好に適するは、紫檀の光澤を帶ふる林檎大の『マン

ゴスチン」なり。或は外貌魁偉にして面胞凹凸し、重量十封乃至四十封、形狀袋の如き尨然の大物を南果（ナンクワ）と云ふ。割きて甘人の食と成り、一樹能く百個を生す。又南洋果實の王を以て目する「ドリヤン」の如きあり。大さ椰子の如くして、楕圓なり。外皮尖針を蒙り、內胞五室に分れ、裡に甘味なる牛酪樣の粘肉を藏す。「ドリヤン」臭氣甚しく、容易に食ふ可らすと雖とも、漸くにして鼻を摘み之を嘗め、竟に舌打して之を賞味す。國人之を以て地上の美味となし、成熟の期に至れは老幼爭て之を食ひ、彼等は往々人事を忘却す。吾人はぞてらを典當し、初松魚を購ふ事を聞くも、計らさりき、南洋、「ドリヤン」に耽りて產を傾くるの馬來人あらんとは。

植物界の區域廣濶なるか如く、動物界に在りても半島は其强最も大なり。蒼蔚たる七万方哩の國土、三面海を寰らし、両岸百里を去らざる地勢なりと雖も、未た天荒人跡の到らさる地多けれは、其密林碧潭は、禽獸蟲魚の遨遊する自然の動物園なり。山に栗鼠あり、羽鼠あり、樹獺あり、河に水獺あり、「ムサン」あり。猿猴亦多種、水堤の喬木、栽園に喃々群居す。中にも其奇なるは十歲童兒の体量を有し最も人類に近き「オラン、ウタン」の如きあり。蝙蝠の著大なるは、狐鳥の綽名ある「カルン」にして、其群を爲して曉天に飛鳴するを見れは、人をして萬群の鴉たるを疑はしむ。蝙蝠の此類に屬するもの二種。其昆蟲を常食とするもの十有五種あり。山野に虎あり、豹あり、猫の獰なるあり、狗の猛なるあり。掌行獸には熊、「ブルアンアンジン」。厚皮族には象、犀（ラノ）、野猪、犀、反芻獸には水牛、山羊。牛に三種あり。鹿に四種あり。水性哺乳動物には海豚、及海牛。魚に鋸沙魚、有電性鯆魚、「イカンラヤ」あり。鳥に孔雀、鸚鵡、蜂雀、京燕、雉、野鷄、赤脚の鷸鴿あり。鶉の美麗にして犀鳥の奇形なるあり。海燕の懸岸に巢ふあり。禽を「アラン」と呼ひ、鷹を「アラパラ」と稱し、鳥族に亦「ブロン、ヘント」と名くる鳥あり。「ブロン」は鳥の意にして、「ヘント」は怪なりと。知らす、幽林月明に悲鳴する怪禽を聽きて、亡國の土民、何等の感慨を抱くものなるかを。

其他爬蟲類には、鰐、蜥蜴あり。鰐は栲樹の曲江に長眠を貪り、蜥蜴の巨大なるは長六尺を下らず。蛇は棲木、穴居、水性―其有害、無害、大小、長短を區分せは其種四十を超ゆ。更に昆蟲、細鱗の群を窮めんか、吾人は殆と枚擧に遑あらさらん。奇なる哉、天候地氣の相違よ。自然は世界を劃して生物の配在を妙にす。常葉の國、雨多くして雷高く、雨後に蝦蟆吠ゑ、池塘に螢飛ひ、蜻蛉は木葉の黃なるを知らす。家に蟻あり、又鼠ありて其大尺餘、猫豕恐れて近かす。或は壁虎（ヤモリ）天井に住みて、杜鵑の假聲を奏するあり。蟻は炎天に食を貯へ、嚴冬の來るを待つとは、決して馬來學童の作文に上らさるべく、彼は冬なき國に終歲庖人の仇敵を以て目せらる。俗に白蟻と稱する一種昆蟲の惡戲に到りては其害最も恐るへく、彼は良材を毀ち、典籍を破り、衣樫に入り、屢々華裾艶裝の佳人をして、轉々人世の無情を歎せしむるあり。

面白からすや常夏國の自然界。其研究は吾等溫帶人種に取りて、幾分の興味を與ふるものとせは、此

奇異なる陸土に生息する高等動物の研究も、亦豈に快ならずとせんや。

然り、記して人種、考古の學者に資す可きものあり。半島中央部の地は、海岸を去る事遠く、半開馬來土人の到るもの稀なれは、『ヲラン、ブキ』、又は『ヲラン、ビヌア』なる蠻人の巣窟なりとす。『ヲラン、ブキ』とは山人の義にして、其リゴル地方の北部に住するものを『カリヤン』とし、クダ、ペラ、セランゴール諸國に住するを『サマン』とし、馬六呷の東部に在るものを『ヲラン、サカイ』とし、或は『ジャクーン』人とし、地方に從ひて名稱一ならす。又人類學上、彼等と馬來由人との關係は未た定說あらすと雖も、兩人種間の區別は、其血族、言語の異なれりとするよりも、寧ろ宗教、習慣の同しからさる點にあるか如し。

疑もなく、彼等は馬來由植民前、半島土着の人種なりき。新嘉坡島は、嘗て『ヲラン、サカイ』の一種『ブマス』蠻民の住地なりしと傳へり。然るに優勢なる馬來人種は、此蠻人を驅りて本陸の內部に隱遁せしめしかは、彼等は竟に世界に忘られ、其日常の用具兵器の類は、今や新嘉坡博物館の一隅に陳列せられ、僅に『サカイ』人の名殘を遺すに過ぎさるも、彼等は全然亡滅せしに非す。其遺子の今日に存するもの、猶各地に散在し、其人口は年々減少すれとも、其減少の度割合に著るしからさる所以は、熱帶生の密樹全土に瀰漫し、拓植の業を阻むこと尠からさるに因れりとせは、此密林こそ、彼等か天年を終ふ屈强の隱れ家とは知られたれ。

家を建つるに四本の木を起し、竹を編みて牆となし、籐之を結ひ、草之を葺き、牀の地面を去ること一尺より七八尺、或は大木の上に棲むと恰も鳥の巣ふか如く、其高數丈、虎豹近かす、疫癘襲はす、昇降には梯子を用ゐ、老幼能く馴れて轉倒せす。屋の頂上には一の氣笛を揭け、陣風起りて妙音四方に傳はる。

食物の不足は、彼等か終歲意に介せさる所ならん。樹に果實あり、草に甘根あり、四時鬱紆として冬なき國の深林は、彼等か無限の倉庫にして、中にも『ドリヤン』、『マンゴスチン』の果樹は、各自の世襲財產なれは、隣人敢て侵さす。又彼等は何所に如何なる果樹の存する乎を暗記すれは、成熟の期來は、老幼家を空ふして遠征に上り、遠近の部落期せすして相會するもの五十或は百人、茲に部落大會を形作りぬ。而して結婚の儀式は、此機を以て之を擧ると。然るに其式や最も簡單、朝に相見た る婦女は、夕に偕老の妻となり、申込は男子よりし、婦の父母諾否の全權を有す。或は河流に近き部落にては、新婦扁舟に乘りて流れ、新郎急舸を飛はして之を追ひ、彼若し彼女の舟に達するを得は、彼女は彼れの妻たるを諾せしにして、一對の獨木舟は鴛鴦を乘せて歸る。又一の習慣にして山地に行はるゝ風は、多數集りて人寨を作り、新婦其內を廻ると三回、不幸にして新夫彼女の前に出てすんは彼女は終世の空閨を守らさる可らすと。果實の期既に過き、木實を喰ひ盡せは、部落大會は解散し、或は他の森林に入り、或は其舊巣に歸る。肉食には野猪、鹿、鳥、鼠、蛇、蜥蜴あり。彼等か手棘の投け

槍は、百發百中の妙あれとも、更に便なるを係蹄とす。其法、獸の通路を臭き分け、穽を設け之を陷る。魚を捕ふるに鉤餌を用ゐず、樹枝を交差し之を曲け、四端を糸に結ひ、網を張ること恰も我國の四つ手の如くし、靜に水底に之を沈め、魚の過くるを待て之を上ぐ。鳥を覘ふに吹管あり、長六七尺、節を去り口管を裝置すること又我國のもの、如く、烈氣一陣、「カボン」の毒矢飛ひ、其力能く鹿を倒すに足る。

蠻人『サカイ』の容貌は、一見人類下等の相たるを示す。彼等の衣服とては、木皮を腰邊に纏ふに過ぎす、或は全然裸躰なるあり。彼等は身幹大ならす、頭顱小に、前額縮み、細目にして鰐口、唇厚く、鼻低く、其色は煤の如く、毛髮は黑鵰の如し。左れは其資性は獰惡なる乎と問はゝ、決して然らざる也。固より一定の性を其錯雜せる社會より抽象し來るは容易ならざれとも、彼等は概して臆病なり、恐直なり、單純なり、精細なる恩愛に感し易く、仇讐の怨を忍ひ易し。若しも爭鬪の起ることありとも、猥りに打擊を試みす、被害者は靜に其家族を率ひて他の山野に匿れ、下手人の謝し來るを待つ。然れとも食物を追て移轉し、漂浪限なき『ビヌア』蠻人の如き、此一時の避難は永遠の離別となり、終世和睦の機を失することありと云ふ。左れは彼等は蠻中の女性なる哉、天荒の幼童なる哉。彼等は唯た能く食ひ、能く遊ひ、其生涯は飢を免るゝ外、此世に野心もなく、進歩もなきの人、左れと其腦裡には靈妙愛す可き觀察を有す。

宙て羅馬教のアフーザ、ーローリーなる人、馬六呷東北の蠻民『サカイ』の信仰を記して曰く、『人此世に死果れは大風雨あり、洪水あり、光なき世界は枯葉の如く、其中より天神出て、衆生の靈魂を集めて之を燒き、燒き且之を淸ひ。罪なき者の灰は麻布に包まれ、罪ある者は燒かるゝと再三、淸められさるの靈、即殺人姦淫の者は、地獄の火に投入らる。地獄は百鬼の焰窟にして、毒蛇身を繞ひ、猛虎肉を割く。最後に神は地獄の火を取りて万物を燒盡すべし』と。其暗黑なる思想界に上帝の光あり、彼等は來世を信し、天は善人を幸し惡人を罰するを信す。是れ宗教心を抱くもの。敢て其迷想を怪ひ勿れ。吾人は彼等を愛するも、焉んそ之を惡むことを得んや。

蠻人又天地の開闢を如何に想像するか。曰く『陸土未た成らさるの時、世界は土の薄皮なりき、昔神あり、此薄皮を除去しけれは、水溢れて海の世界と成りぬ。次に神リムン、チモンダンの諸山を起し、世界を堅めぬ』。又或部落には人間の祖先を猿なりとす。其說に曰く、「初め世界に白猿（ウンカガ）二匹あり、子を生ひと夥しけれは、之を野に放ちて人間に化せしひ。然るに其化せざりしものは、再ひ山に歸れり」と。聞く「サカイ」蠻人中、往々臀肉垂れて尾の如き者ありと。是れ怪譚に過ぎさるも、猿尾人種存在の事は、啻に英人の記錄に存するのみならず、亦今日の馬來人か信認するぞ奇怪なる。（一八八五年）（ジョンカメロン）(Our Tropical Possession in Malayan India P. 120.)

稍歷史的事實に近き他の傳說に云ふ、昔神あり、一艘の大船を作り、祖先を乘せて之を下界に降しけ

るに、其船の早さは矢の如く、世界の島々到る處に子孫擴かり、バチン、アラムの君あり、限なきの永壽を保ち、民を治むる幾百歳なるを知らす。此君死せし後はバタツクと名つくる徒、海を超ゑて來り、良民を殺害す。時に勇將メラガランジあり、武勇絶倫斬れとも傷かす、捕へんとするも其術なし、進んてバタツク人中に呼て曰く、汝等の劒を解き之を一束となし、我劒と共に之を空中に投けよ、汝等の劒能く大空に飛行するの力あらは我は汝等の麾たらん、反之汝等の劒地に落ち、我劒獨り飛はし、汝等我に從ふ可しと。人々斯くしけるに、不思議やメラガランジの劒は颯々として大空に飛鳴し、近傍の大木を斬倒せし後、彼等の頭上に落ち來り、難なく之を從へたり。然るに此勇將死して後はバタツク再來し、遂に吾等の祖先は、海濱の地を去らさる可からさるに至れりと云ふ。

半は神話の如く、半は小説の如き口碑も、一概に之を『サカイ』蠻人の寢言となす勿れ。彼等は初め海の人民なりき。神の作りし舟、其早さは光陰を意味せん。歳月を重ね元々繁殖し、堯舜の如き君あり、太平を破る賊、之と戰ふ英雄メラガランジ、彼等は欽望の念禁する能はす、其武勇を形容するの怪力は、蠻人山野に飛禽を射るの技より推す。曰く英雄死して其民亦亡ふと。――抑も何の意か、小説か、寓言か、否々、所謂バタツクとは必すや馬六呷海峽を超えて渡來せし馬來人種の別名ならん。左らは活ける事實、乃ち半島土着の蠻人が、優勢人種の爲めに、流離顚沛の悲運に逢遇せしを嘆せしものにして、恰もスカンチナビヤ偶像教の末路、北神ドルの最後をカーライルか論せし如く、

"There is vabished, the whole Norse World has vanished and will not return ever again, there is something pathetic, tragic for me in this last voice of paganism."

の感なくんはあらす。メラガランジ沒して半島『サカイ』亡ひ、其殘民は、此悲ひ可き一片告別の英雄譚を遺して、海の蠻人より山の蠻人と退歩したりき。

思ふ是西暦千百六十年の頃にして、馬六呷半島に於ける、馬來由植民の起原ならん乎。『セラジヤ、マラユ』と名くる馬來由の舊記は、司馬太來の首長初めて新嘉坡へ征來し國を開くことを記せり。馬來の海、波平にして極めて操舟に便なれは、古代の勇敢なる馬來人、は一葉の舟を艤し、司馬太來の西南より渡來したりけん。葡萄牙の史家デバロス曰く、最初シンガプラは印度洋の西遮羅、支那、カンボチヤ及絶東諸島に於ける航客の集會地なりしと。其後百五十年即第十三世紀の末葉、有名なるマルコポーロか古海峽(半島の南端と新嘉坡島間)を過きし頃は、シンガプラは既に衰微せしと見え、彼は其地名をさへ其航海記に錄せさりき。

眞に半島馬來人の歴史と名稱を附すへきは、瓜哇人新嘉坡島に來り後逃れて本陸に入り、馬六呷王國を建設せるの時を其起原となす。是れ葡萄牙人の渡來二百五十年前なりとす。而して元來馬來人種、其存在は現今司馬太來の北端より、南ニユーギニヤに繁殖せる一大人種の本土は何所。

從來の想像は之を司馬太來メナンカボ地方と爲せしが、尚未決の問題に屬す。或は曰く、馬來人種を

以て印度支那人種の一部とせは、彼等は始め半島を超ゑて移動せしなるへく、而して學者の爭點たる群島各地移動の先後は、彼等か半開の文明に進みたる後代の出來事ならんと。未開土人遷徙の事、多くは茫乎として鑒ふ可らす。寧ろ之を親切なる人類學者の撿覈に任せよ。人初は蠢爾たる動物、相食ひ、相擊ち、紛々擾々、類を以て集り、部落を爲し、大部落を爲し、元々螺集し、稠密し、優者あり、劣者あり、智者あり、愚者あり、漸く治者被治者の分を生して、政治的社會を形成す。而して其發達を知らんと欲せは、之を言語の發達に徵するに若かす。言語は國人を知るの明鏡。乞ふ吾人をして少しく馬來語を說かしめよ。

決して完全なる言葉にあらさるも、其通用の範圍は極めて廣く、半島リヲ群島は勿論音調語勢に多少の相違あれとも、司馬太來、爪哇、サンダ、ボルチヲ、セレブス、フロレス、テモル、モラカス諸島通せさる隈なく、離れては遐羅、安南、臺灣、マダカスカル、喜望峰附近にすら其遺音を存すと。蓋し疑ひなきを得んや、蠻境と去る遠からさる劣等馬來の如き人種にして、言語上斯くも偉大なる膨脹を爲せしの。——此疑問に向て光明を與へしは、「サー」ウイリヤム、ジョンス。彼か馬來語中より十數の梵語を拔摘せしを始とし、研究に研究を加へ、一の發見は他の發見を促し、所謂馬來語とは雜種の言葉にして、回教傳播前既に多くの梵語を混し、特に形而上の言語に至りては、アラビヤ語たらすんは殆と梵語たらさるはなきことを證明したり。如何に古代馬來群島と、南部印度間の交通頻繁なりしことを想像せよ。

古代の印度人か、馬來人に及ほせし影響は、之を言語に徵して明白なりと雖も、年代を溯ると極めて遼遠にして、爾來群島の交通は、印度の變遷に伴ひて中絶せしや久し。今の馬來人種か形骸的丼に精神的半開の文化は、之を亞刺比亞人に負ふや大也。天竺文明の英華漸次に傾き、亞刺比亞教勃興し、旭日昇天の勢を以て、馬來群島を征服し了りぬ。史に傳ふ千二百五十年の頃、蘇丹マームード、シャー馬六呷王國を統御しけるが、彼は回教第一の信奉者として、五十七年の長位を保ち、其名聲盛なりけれは、回教は此頃よりして半島の西部に傳はり、十六世紀の初頭に葡萄牙人の來りし頃は、群島東南の馬來人は、未た蠻教を脫せさりしも、海峽附近は總て其改宗者なりしと。「アラー、アカバー」、神は偉也、一也、力也、我を造り、我を殺し、亦我を活かしむと、荒日野に叫びし英雄豫言者の聲は、彼等か思想海を輝すの燈明。人世は如何、死は如何、天地万有は如何、其解釋を聽けは蠻人馬來自らが嘗て心に抱き來りしものよりも、更に明白となり、確實となり、有形的と成り、己か行爲を支配するの信仰と成り、人を動かすの勢力と成り、左に「コーラン」右に劍、新月旗の飜る所、天下に敵はあらさりし也。

回教東漸の結果は、亞刺比亞思想言語の傳播と成り、又其國字を輸入したりき。是れ馬來文明史中に特筆すへきもの。天然の健兒等亞刺比亞の文字を見、初めて世界に人意を有形的ならしむる發明ある

を知れり。文字は心の秘密を語る第二の言語、其神妙なるは決して第一者に譲らず。而して馬來爰に有文の民たらは、次に文學なきを得んや。自然は彼女を產むの母、常盤の國山水明媚、嶋海の奇觀を以て五洲に冠たり。旭日山の端に出て、波を染めて沒し銀河、淡々碧空千里なり。芭蕉の雨、椰子の月、身邊一として詩題ならざるはなし。即ち馬來文明の先覺者か、蟹行左進のアラビヤ假名を借りて、其國音を綴りたる、恰も我國の万葉假名文に於けるか如く、其著には歷史、宗教、物語、歌謠の類あり。文學として之を評さは、其の大半は獨創的ならすして摸倣的たり、豊富ならすして單調なり、幼稚なり、不進歩なりしは深く怪むに足らす。是れ彼等は、國民的自由の發達を爲す能はさりし不幸の民なれはなり。然れとも英雄談中には、往々古馬天眞の風を存し、諧謔は奇才に富み、短歌は愛情の掬す可きもの少しとせす。

彼等亦た好んて謠歌す。其聲や耳之を快とするに止らす、心又之を樂み、其言葉には母音多くして子音輕けれは、自然に音樂的なりとす。歐洲人は馬來語を東洋の伊太利語と云ふ。寧ろ第二の日本語と稱すへきか。其音調は純朴古雅なり。

太陽を「マタハリ」(日の眼)と云ひ、溪流を「スングーアナ」(小兒の川)と云ひ、月蝕を「サケブラン」(月の病)と云ひ、氷を「アイベト」(水の石)と云ひ、眼鏡を用ゆる人を「アンバタ」(四つ目)と云ふ。即ち彼等は自然を直覺して之を身邊の事物に對比すると、尙幼童の如く、其日常の談話にすら、想像力に乏しき人の口より、往々詩的快味の文句を洩らすあり。

回々教徒は波斯又は印度より亞剌比亞の文字を傳へ、多年半島を風靡せしかど、今や熱心に英人は之を英語の領地たらしめんとし、其勢力偉大なれとも、通俗用には依然馬來語たらさる可らす。而して馬來語とは、曾に馬來由人種間に行はるゝのみならすして、廣く印度人、支那人、歐亞混種の間にも行はれ、馬來群島に智識と金力を有する土生支那人は、彼等か父祖傳來の本國語よりも、寧ろ馬來語を使用し、今や殆と彼等の家族語たらんとす。

是れ其言語の特質は、簡便學ひ易さに因らすんは非ず。或和蘭の記者、馬語を以て野卑なる言語と冷評せり。然れとも其少數なる言語は、一個の簡單なる文章と成り、自在に彼我の心意を交通し得へしとせは、我は其野卑なるを嫌はす。特に植民地の如き、異人種雜居の商業地、人口の多數を占むる印度人、支那人等互に國音異なり、同國人すら一場の談話に通辯を要する場合には、此簡單なる言語が彼等の本國語よりも丁法せらるへし。凡そ何れの外國語にもせよ、日常の談話に差支へなさは、少くも二年の注意せる練習を要すへきものなるも、馬來語は其半期にして足れりとせは、以て世界的言語の性質を有すと稱すへく、群島に於ける外國人は、實に非常なる便利を享するもの也。

文法は平易にして難澁ならす、使用に貴賤の別なく、高等語に煩雜なる働詞の變化なく、單複兩性の面倒なく、一意を顯はすに多樣の言葉に乏しけれは、「お早」、「今日は」、「今晩は」、「さ樣なら」も、「タ

ゞ』の一語之を包括し、日本語を學ふ外國人をして閉口せしむる、『難有ふ』『――存します』『――御座ります』の多端なる用法も、『テレマカセ』にて事足り、若し更に一辭を前置せは、『大に難有』『どうも難有』『誠に――』等の枚擧に遑なきをも、『バニヤ、テレマカセ』の意味深長なるに若かざる也。

語音は恰も我國音の如く、平聲多くして抑揚少く、大約二綴三綴音より成り、『アバ』(何)、『シャバ』(誰)、『ポテ』(白)、『イタム』(黑)、『カシ』(與)、『ベク』(往)、一々我音を以て自由に之を表はすへく、記臆の法も敢て難からす。

一二三四五、(サト、ドフ、デガ、ナンバ、リマ)之を源平盛衰記に求めば、『佐藤殿は手柄あつばれ者』

六七八九、(アナム、トジヨ、ラバン、スミラン)サイゴン駐在の兵士に聯想せば、『安南登城、喇叭濟みなん』、最早我夫も喇叭の稽古を終へ歸るならんの意たるべし。犬は家を守れは安心、鐵は金屬の武士、馬來國の花は皆無雅、熱帶の魚は無味、雨は雨潤、山は地の勃起せるもの、虎は烈猛の獸、手紙をすら〳〵書く、牛乳をすゝる、けた〳〵笑ふ、飲は水飲の略、食はまゝ食はんの略、馬來人の返事『ヤー』は、柔術の掛聲と知るべし。

問ふ馬來通とは何そや。馬來由熟を病みて体格試驗を丁し、『ドリヤン』、南果、『カレー』汁を賞味して口頭試驗に入り、馬來由語を以て卒業せさる可らす。而して馬來通たるは現今又は未來の日本と貿易植民政治的に、馬來半島よりも重大の關係を有する馬來群島のあるを知れは、吾人の馬來通たるは即ち群島通たるの豫備門たることを決して忘却す可らす。

說去り、說來り、我は筆の餘りに枝葉に馳せたるを知る。我將に本章を終へんとするに臨み、今此一大民族たる馬來人種、其配在は左の如き中に就き、

(一) 馬來由種……馬來半島、ボルネヲ、ターチート、司馬太來、メナンカボ、バレンバン、ラムポン人
(二) 司馬太來種……アチン、レジヤン、パスマウ人
(三) 爪哇種……爪哇本部、サンダ、マドウ、バレ島人
(四) セレブス種……ブキス、マカサー人
(五) 比律賓種……タガラス、ビサヤン、ビコル、スーロ等
(六) 群島外馬來由種……マダカスカルのホバス、臺灣島人

吾人の觀察は之を半嶋にのみ限れるものとし、彼等の現狀を一瞥せんに、馬來人は蠻人『サカイ』と異り、印度亞刺比亞の影響を蒙りし丈け、幾分國民的生活、低度の文化を會得し、半嶋各地に多少の勢力ある組織的團体を形作りて、族長制又は選擧君主制の政府を戴けり。獨立國には蘇丹統治の全權を掌り、地方の豪族より指名されし『ダトウ』官、蘇丹を補佐して分管し、『ペンガロー』なる官人其部下

に屬して土民を支配すること、猶我近古の庄屋制度の如く、多數の人民は概ね農事に服せり。國民として馬來由は平和の民なり、家族として其生活は愉快なり。又彼等は市街の民ならずして田舍の民なり。其江海に瀕して連る村落を望見すれは、宛然一幅の活畫にして、家屋の構造は恰も我國神社の古風なるに類し、竹、「ニプン」樹を以て作り、板を張りて圍み、屋を被ふに茅草を以てす。臥床は地面を去ること四五尺、梯子を戸の前面に安置す。家屋に次ぐの財産を椰子樹とす。亭々家を覆ふて繁り人頭大の實を結ひ、檳榔樹は鋒を立てたる如く道の兩側に並み、各種の果實庭前に熟し、鷄犬肥ゆ、兒童戯れ、村落の民は擧つて隣人の生誕婚姻埋葬に與り、互の歡樂悲哀を分つ。

同教は蓄妾の風を禁せすと雖、一夫にして多婦を娶るもの少きは、彼等の富裕ならさるに原因し、其家庭は却て幸福なり。女子一旦嫁すれは婦道を守り、兒を擧くれは、凡ての快樂を擲つて養育を怠らす。名にし負ふ半嶋は「小兒の天堂」にして比較的生誕の數多ければ、一婦人の近郊を行くにも乳兒は之を抱き、他は布に卷きて肩に懸け、幾多跣足の兒枝列を作りて彼女に從ふを見るあり。又男子は酒を蒙むるを禁し、女子を憐みて慘酷ならす、小兒を罰するに鞭撻せさる等は、半開人の社會に存する美風なりとす。衣服は男女殆と一樣にして、其腰邊に纏ふ者を「サロン」と云ふ。大幅にして丈け五尺なる布の兩端を縫合し、下半身を其裡に沒す。襠を設けされとも之を纏ふの際前部を交差すれは濶歩自在にして、風向脚を現はさす。女子は上部に筒袖の長胴衣を着し、男子のシャツは短くして寛なり。外出に女子は又他の「サロン」を被り、後頭を覆ひ、男子は無邊の剪絨帽を頂く。其洋服を着するものすら、半「サロン」を穿てるは、國風を忘れさるの意なるべし。

銅色を帶ひたる馬來人の身長は、平均英尺五尺二寸。四肢小なりと雖も、釣合能くして胸格前に張り容貌醜ならす。其性質は從順なり、內氣なり。彼等は支那人吉寧人の如く盜ます、恐らく回教國人中の最も正直なる者にして、馬來人と云はゝ一概に之を海賊視したる、前世紀に於ける歐人の記錄に存する事實は、今や正反對の現象を呈し、彼等の恐直なるは回教の信仰あるにあらすして、其無氣力なる所以。其特殊の精神元氣は蟬の脫殼の如く、天成の植民的一大人種馬來人は、今や因循退歩の人類と化せり。英人ホーム、ポーハム之を論しく曰く、

「英人が馬來貿易の盛代に在りては、馬來人種が海國民たる天受の性質は變化せさりき。然るに英人の利益は大陸印度にのみ傾き、蘭人專ら政權を掌るに及ひ、其苛政は國人の能力を抑制し、漸次に行はれ來りし奴隷政治の恐る可き結果は、竟に馬來人をして魯鈍ならしめたり。然れとも彼等は全然其眞性を失墜せしにあらされは、必すや反對なる政治教育は之を回復す可けん。現に彼等にして英人と交際を爲せし者は、生產の事業に從ふに至れり」と。

馬來人墮落の原因或は如此けん。然れともポーハムが後段の希望は、將に水泡に歸し去らんとし、吾人は馬來人の進歩として、特に注目するに足るへきものなきを奈何せん。今日の馬來人は不生產的な

り、無能力なり、無慾なり、彼等は營利の術に拙く、蓄積の精神に乏し。勞働者としての彼等は、農夫、漁夫、巡査、官省の小使、園丁、水夫、馬丁の類に過ぎず。到底外來移住の新人種と生產社會に競爭して、半島經營者たる能はざるや明白なり。

現今の馬來人をして第二の「サカイ」人たらしめん者は誰。英人にあらず、蘭人にあらず、支那人、印度人にあらずして、馬來森林を開發せんとする經濟的一大勢力是也。讀者卷を終りて我が半島馬來衰亡論を判せよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

曰く蠻人ビヌア、曰く馬來由、其他暹羅サム〳〵（馬來人と暹羅人との混種）を半島土着の四人種と爲し、之に近代移住の歐亞各色人種を合すれは、半島の總人口は百廿万乃至百五十万、雜然七万方哩の各部に割據す。其地方を政治的に區別すれは、

(一) 獨立國の体裁を存するもの　(二) 暹羅國領

(三) 英國領　(四) 暹羅若くは英國の保護國

是也。暹羅の勢力は半島東岸北緯四度卅五分ペハン國の北境より、西岸五度四十分即ケダ國以北に及ひ、其南部は英國勢力の伏する地方にして、

(一) 英國の領地を合稱して海峽植民地と云ひ、

(二) 英政府行政の下に管轄さるゝ諸國を合して馬來保護聯邦と稱し、

(三) 英政府の干涉直接ならさるものを半獨立國と稱す。

面積は北方部大略四万方哩、南方部三万五千方哩、人口は前者は後者の三分一に過きすして、半島貿易の配權を有すると微々たり。今南北兩部の地名を列擧せは左の如し。

一北方（暹羅）部

クラ、レーン、ジャンクセイロン島、レゴル、センゴラ、ケダ國、ペタニ國、ケランタン國、ツリンガヌ國

一南方（英國）部

(一) 英領海峽植民地

新嘉坡島、馬六呷（マラカ）、檳榔島（ピナン）、ウエルスレー州、ヂンヂン、コヽス及クリスマス島

(二) 英國保護馬來聯邦

ペラ國、セランゴール國、ヂギリセミラン聯邦、ペハン國

(三) 半獨立國……ジョホール

以上の諸國中本書の要點は、南方部にあり。以下順次其地理、歷史、政治、產業、風俗の一斑を詳論せんとす。固より片々の冊子、讀者の滿足に價ひせさらん。然れとも馬來半島は戰勝後の我國民か、

以心傳心の冥約間に存する一大雄圖を達するの貿易及植民の手段上、有望なる地域内に横はれりとすれは、半島の研究は亦た無益の業にあらざるを信す。

第二章　海峽植民地

○其一　老たる馬六呷

我前章に於て、爪哇人新嘉坡島より本陸に入り、馬六呷王國を建つることを述へたりき。半島其後の歴史は、回々教の傳播、亞剌比亞人の通商、馬來王國の膨脹等にして、第十五世紀に於ける馬六呷、即半島西岸今の英領地たる箇所は、東洋の一大王國にして、對岸司馬太來の各部に屬地を有し、アチン、爪哇、巡羅、カンボチヤ、南方支那地方と盛に交通し、其王都は人口十九万を抱有したりき。是將に歐洲新國民の興らんとするの時にして、ゼノア航海者は西大陸を發見して、西班牙の新領地を開き、バスコダガマ喜望峰を回航し、葡萄牙人は、古來東洋の買權を握りたりし伊太利ベニス人と東洋競爭者の位置に立てり。印度の地何所。彼等は世界を畫して三部分となしぬ。然るに新部分を加へぬ。濛大陸は尚暗黑の裡に埋れたりき。時の地學者トレミーか、世界の新地圖を描かんとし、强て未識の地を想像的に案出したるは可笑。人は多くを知りしもより多くを知らさりき。不明は恐怖の元なり。世界の大部分を占むる海洋を横切るとの、豈に容易ならんや。航海者羅針を案し、神明を祈りて船を進めしも、故山の沒せんとするを望みては、無限の大海を覺束なしとせさらんや。新地探撿の業は、冒險剛膽ならすんは能はす。雄王あり、イマニユエルとす。彼が東洋の榮華を聞き、其臣セキユー

ラをして、四艘の戰艦を以て遠征に向はしめしもの、群島蠶食史の發端。乞ふ吾人をして、馬六甲亡滅の當時を語らしめよ。

セキユーラの船は、印度ゲンジス河口に入り、其よりベンゴール灣を後にして、司馬太來に進み、パケル港を經て、アチン王國を一覽し、海峽を渡りて馬六甲に入れり。然るに西人渡來の風說は夙に馬六甲國人の間に傳はりければ、國王マホメツトは親しく之を迎へり。葡萄牙の國使をダザリヤと云ふ。大象に打乘り揚々王城に入り、國書を献し、厚賂を齎らし、通商の約を結はんとを乞へり。馬六甲王大に之を喜ひ、款待到らざるなく、兩國の和親將に成らんとせり。然れども此和親は、旬日ならずして亞剌比亞商人の爲めに破られぬ。亞剌比亞人は自ら東海の商王を以て任し、亞細亞歐洲間の賈權を掌握しければ、彼等は葡萄牙人を深く惡み、王に說くに基督敎の害毒を以てし、竊かに西艦沈滅の密謀を計畫せしめたり。國王之を可とし、事を變應に托し、セキユーラ以下を塵殺せんと欲せしかど、彼は容易に船を離れざりき。王又第二法を案し、葡萄牙人に告くるに、國法は商船入港の順に從ひ貨物の積込を定む、然れども特に葡萄牙人は其法に依るを要せずと。於是、葡人盛に交易を行へり。國王マホメツト、事を擧けんと欲し、國中に令して密に戰備を整へしめ、港内には數百の船舶を浮へ、瓜哇の一豪族を撰みて、艦長剌殺のことを命し、烽火を以て其信號と定む。豪族珍客を慰問すと稱し、甲者十數人を率ゐ、葡萄牙の戰艦に至れば、偶々セキユーラ象棋を鬪はすあり。セキユーラ瓜哇の佳賓を見出て、彼を迎ふ。哇人謙讓して其戲を續けしめ、自ら之を傍觀せり。若し彼をして、靜に約を守らしめは、此擧或は成就したりしならん。然れども彼等は、秘密を守るの器にあらざりき。談笑數刻に渉るも、丘上烽火の遲きを見ては、心平ならず、眼亦た靈ならず、座屢々動き、劒は鞘中に鳴れり。セキユーラ直に異情を察し、警戒を命せし時、甲板は既に修羅場なりき。艦長劒を按して部下を勵し、悉く瓜哇人を斃し、續て來らんとするものを乘艦せしめず。暫時にして陸上烽烟揚れは、無數の馬來船隊艤集し來れるも、葡艦の砲大にして用ゆ可らず。忽ち錨を斷ち、船を港外に廻らし、遂に彼等を砲擊したりき。セキユーラは大膽にも再び灣内に入り、國王に報するに此暴擧の首魁は、直に嚴罰すべきものなることを以てし、陸上の殘兵を收め順風歐洲に歸れり。

國王マホメツトは、葡人逃れてリスボンに歸れは、必然復仇軍の來る可きことを後悔したりき。彼は歐洲を知れり、恐く彼は當時の歐洲人か東洋を知りしよりも其事情に詳なりき。然れは千五百十一年葡の總督アルブカキーが馬六甲に入りし時、彼は彼の豫想に的中せしことを決して慾ろかさりき。アルブカキーは當時ゴアを領し、其勢力の全盛に達せしかは、セキユーラの敗報を聞きて、自ら東洋十字軍を名とし、馬來群島の富源の香料、黃金の產地を掠奪せんとて、戰艦十九艘、兵勇一千四百を乘せて馬六甲灣に進めり。民心恟々、商賈家を空ふす。將軍令して曰く、我行は只平和を旨とす、前年の我國人の俘虜を返還すれは足れりと。

翌朝マホメット王は、使を總督に遣はし、無邪氣に問ひけるは、貴艦如何なる奇貨を齎らし、又如何なる國產を購入せんとする乎。アルブカキーは斷乎として答へぬ、我は貿易の目的にして來らず、王先つ葡の囚人を放還せよ、然る後交易の事を議す可き也と。王思へらく、敵艦を灣內に打擊せんには速に海陸の軍備を整へさる可らす、軍備を整ふるには可成談判を遲延せしむるに若かすと。則答て曰く、囚人獄を破りて逃亡せり、然れとも再ひ之を捕ふるは、敢て難事にあらすと。總督は惑へり、彼はマホメットを征伐せんと焦心すれとも、又其國人を救助せさる可らす。然りと雖とも、若し王の口實に惑ひ、逡巡時を徒さは、竟に事を誤らんを恐れ、彼は劍と火とを以て、直に其航海の目的を遂けんとを決斷したりき。

二百の兵士は飄然上陸し、遠近の民家に放火す。偶々陣風起り、火勢熾々、黑烟天に漲り、商民財を失ふと巨萬。彼等相會して王宮に迫り、速に葡人の請を容れ、囚人を放還せしめぬ。總督勢に乘し、王に强ゆるに三事を以てす。(一)市街の一部を割き、西商保護の要塞を築かしむると、(二)前暴舉の損害を葡政府に辨償すると、(三)今回の遠征費を支辨すると是也。難問は國王の評議會に附せられ、憤怒と恐怖の念は議論を二派に分ちしか、擁夷派の隊長バチー、ジョホルの王族は、頻に開戰を主張せしかは、東天の將に白まんとする頃、滿都の砲聲は豆を熬るか如くなりき。馬來人は砲術を解せしも、葡萄牙人の如く精ならさりき。國王の作戰計畫は總督の神速なるに若かさりき。基督敎徒は一致したりき。回敎徒には裏切者ありき。一方は進擊せされは水に溺れざるを得さりき。他方は逃るへき多くの場所を有したりき。戰爭は無論十字軍の勝利と成り、東洋三百年の王都一朝灰燼に歸し、葡萄牙の國旗は丘上に飜りぬ。是れ我朝後柏原天皇永正八年にして、天下麻の如く亂れ、北條早雲、威を關東に振ふの時なりし也。

葡萄牙人馬六甲を占領すると百三十年。其間要塞を築き、商館を建て、道路を開き、都府を改修せしかは、馬六甲は再ひ盛運に向ひ、東洋に於ける歐洲人最初の植民地として、各地富の探撿者を吸集したりき。而して當時の富源は何物なりしか、事明瞭ならさるものありと雖とも、千八百六十五年英人甲比丹ブレヤーが、土中に埋沒せし多量の水銀瓶を發見せしより推測せは、往古此土は黃金の產地なりしと云ふ。國の南方に位しグノンレタンの高山あり、歐人之をマウントオフヒヤと稱す。蓋し馬六甲王國を生み、又之を亡したる金山ならん。然るに後世の產額は著しく減少し、且つ和蘭人は葡萄牙人と東洋に戰ひ、代りて地方を領するに及び、蘭人は馬來群島併呑の本據を爪哇に定め、バテビヤ府集權の餘勢は、馬六甲の壓制の政略となりしかば、民人離散し、國運次第に傾けり。然るに千七百九十五年英人は蘭人に勝ちて此地を奪ひ、後七年、一旦之を蘭人の手に返還し、再び千八百廿五年和蘭條約の結果に由り、永く之を英領に歸せしより、海峽植民政府は自由政治を行ひ、銳意拓殖の發達を計りければ、現今は米、蕃薯樹(カンピヤカ)、甘密(ガンビヤ)(染料)、胡椒の產地として、英領姉妹植民地中、最も廣大なる

ものなりと雖、都門の繁榮は新嘉坡に及はす、港灣の形勢は檳榔島に若かす、今や馬六甲は東洋商業地の班を下りて、半島農業國の列に入れり。

住民は馬來、歐亞混種、支那、吉寧（キリン）及少數なる英人在官者にして、馬來人は郊外の蝸廬に出入し、祖先の舊土に戀着するを、無上の光榮と爲すが如く、葡人種の遺種なる歐亞混種（ユラカス）は、肉瘦せ、色黑く、全く無氣力なる遊民にして、多少の教育ある輩は、政廳商社の書記に滿足し、植民地中一として獨立の商業を營むものを見ず。最後に國の生産的人種たる支那人、印度人すら、其商業は內地に散在せる蕃薯、甘蔗の勞役者に供給する物品を販賣し、或は國産の輸出を代理するに止まり、其景況は新嘉坡の活潑に比す可らず。故に現今の馬六甲は、風流閑雅を樂む支那豪商の隱遁地たるに過ぎざれば、其征客の多くは、通商營利の人にあらずして、好奇なる懷古的巡廻者、若くはアイパナスの温泉に靜養を試むる徒ならんのみ。

老たる馬六甲、風景の愛す可きは、碇泊場より市街を眺望するに在り。灣內水深かゝらざれば、大船巨舶は陸を離るゝ二哩の波間に投錨し、東西十二哩に亘る活畫は、歷々兩眼に映ず。前面に方りて聖ポール丘上、累々として一大荒城の如きものは、葡萄牙人が民の膏血を絞りて建築したる、羅馬教古寺院の殘壁にして、燈臺高く旗杆聳ゆ。丘の半腹には葡政府の古官舍あり。翳然たる樹木之を覆ひ、白壁點々、風と共に動く。丘の麓には マラカ河流れ、市街を東西二部に橫斷す。東部は現今駐在官

廳の在る處にして、其景最も愛す可く、青苔の遊圃海に沿ふて連り、紅花其裡に燃えんとす。西部の地は民家駢列し、千門万戸、遙に椰子樹亂生の彼方に隱見す。市の後背は地勢次第に隆起すれども、瞑烟漠々として、遂に行く處を失し、只東境に發ゆるオフイヤ山、萬嶺を歷して靑空黛を浮べたるが如きを見る。

星坡生嘗て馬六甲に遊び、聖ポール丘上の古寺院を見る。寺院今や頹廢して、微かに其四壁を存するのみ。壁厚二尺之を壘むに鐵石を以てす。雨露日月に食み、翠苔其面に生じ、屋蓋は移去して燕雀巢ひ、院內遠く天空を仰く可し。堂の敷石は凡て故人の墓碑にして、刻字年と共に磨滅し、追究す可らざるもの多し。中に「ジエスイスト」教師ザビールの紀念碑と稱するものあり。ザビールの名は國史の傳ふる所。彼は三百年前、西は印度より東は日本を荒廻りたる、東洋基督教の虎法師なりしよ。荒墳蟲鳴き、草芋々たり。傍邊又橫文を以て左の如く刻むものあり。

此碑下「ジエスイスト」教派日本第二の法官ピートルを葬る。師は千五百九十八年二月新嘉坡の海峽に於て逝く。

日本第二の法官果して何者なりしか、天涯の異鄉古史の繙く可きなければ、其詳細を知るに由なしと雖ども、年代を按ずれば、彼亦最初葡萄牙交通の我國史に、因緣を有せし者ならん乎。歐を眺して之を吊ふ。

今さらに忍はれにけりむす苔の下に埋れし人の昔を

忽にして天地暝く、雨降り、神鳴り、遠近の景色も分かぬ烟の中に、現はれ見ゐける一人の老人、おもては武士、姿は船人、雲衝く計りの男なり。「あゝら不思議や、此とつ國の山中に我國人と見ゐ給ふは、如何なる人に候や、御名を聞かせ候へ」老「我こそは九州船本彌平次の船子彌助と云ふものなれ。今は此世になき屍、苦路の下に埋もれて、訪ひくる人もあら波の音をのみ聞く淋しさよ。昔天正十九年、ザビール僧正我國に來り」「あれなるは實に其碑なるや」老「さやう候」「口はひじりの道を說き、腹に亡國の劒を藏めし惡つくさザビールが屍、得てしあれば、鍬りて、放りて、耻みせましを」老「暫く我物語を聞かれ候へ、ザビール信長公の御前に「キリシタン」を唱へ退きて、ゴアの本領へ歸りし後は、是なる第二法官ピートル師南蠻寺へ住職の筈なりしかど、間もなく秀吉公の禁令下り、慶長元年しも月に、此者共日本に來り、御免をも蒙らず國内に留り、「キリシタン」宗門を傳へたるにより、長崎にて磔刑に處すべしと聞き、ピートル辛くも落ちにけり」「如何なれば之を知り給ひしや」老「彼を乘せたるは我船なれば」「御身「キリシタン」を信したりしにや」老「我は太閤の御朱印狀を賜はりし船子、知らざる國の導きにと、師を賴みて唐糸の金襴、緞子、白絲、黃金を得はやと、平戸の港を船出して、三十日餘りも常夏の輝る波、帆かけて進みしが、船はジョホールの海門を過くる頃師に分れ、我身は馬六甲の露と消えぬ」「實にいたはしの御物語かな、其頃我か國たみの雄々しささま、思ひ起すも壯んなり」老「さりとて太閤が御軍を、海南に向はせ玉はさりしは、返す〳〵も口惜しき次第に候」「御歎きは御無用に候、今我れ支那に勝ち、威東洋に振ふ御世の榮を御覽候へ」老「御世の榮は、つはものならす、通商貿易の道進ますば、戰のはまれも水の泡に等し。今の雄々しき我か國人は、尋ぬるものさへ、たぐひ馬來の島々かな」。

言畢りて、其人は消ぬ。眼を擧くれは、栁樹梢頭、月輪高し。噫夢。

○其二　東洋の獅子街

新嘉坡（シンガポール）は英領海峽姉妹植民地中、最も繁盛なるものにして、其首府たり、半島政治機關の本部たり、東亞貿易の廣區たり、馬來群島航路の要津たるもの也。

『シンガポール』正しき地名は『シンガプラ』なり。說に曰く、『シンガ』は寄港若くは輻湊の義にして、『プラ』とは『プロ』市街又は島なりと。或は曰く、『シンガ』は馬來語の獅子なれば、『シンガプラ』は獅子の都(Lion city)也と。前說は之を地理上より說明せる者にして、後說は歐人の間に傳れり。說の當否は暫く之を論せず、余は『獅子街』の興味を知る、群島元と獅子を產せすと雖とも、今日のシンガプラは、東洋商業界の獅子的競爭場裏に相違なけれは也。シンガプラとは、半島の南端に横はる一小島にして、面積二百廿三方哩、周回六十七哩、地勢雄偉の姿を有し、地理學的には熱帶樂土の名あり。

火脈呂宋群島より連なる者は、西方に迂回して爪哇司馬太來を過ぎ、東支那海に征來する大風は、半島南部の庇隠となり、西印度洋を遮りて司馬太來のあるあり。左れは本島は古來未だ天災を知らず。大氣濕潤にして年中霖雨を降し、其の位置の赤道直下たるに拘はらす、氣候は概して温和なりとす。港は島の南岸にあり。蒼波漫々遙に蘭領レヲ諸島を望み、北はジョホールの海峡を距て、半島の南端に接す。舟の東方より來る者は、遐羅灣を横切りて南方ポルスホルグの燈臺を、半島ルーマニヤ岬とビンタン島の間に見る。臺は新嘉坡を去る卅哩餘。ルーマニヤ岬を廻航し了れは、シンガプラの「パノラマ」は遙かに之を望見するを得へし。前面に方りて政廳所在の丘陵、ブキチヤ、フエーブルの青巒は、巍然陸地の標目となり、舟の進むに從ひ眼界の光景漸々明白にして、雲霞靉靆萬緑亂るゝ邊、砲丘カンニングに聯る各色の船旗、聖アンヂユー寺院の尖塔、椰樹外套を被る馬來村落は、甲板觀客の注目を惹き、海面には萬檣林立し、灣内舟を以て埋む。波靜にして舟痕散せす、西に向て行くこと殆と三點鐘、陸上の人影指示すへきに至れは、船はタンジョンパカーなる、東洋の大埠頭に横はる。而して其間の風景は、人をして快哉を呼はしむ。更に變化萬狀、水土の奇觀を呈せるは、西方歐洲航路より馬六呷海峡を超ゑ、ブキチリメン山の美を眺め、叢島伍列の間を入り來るにあり。又自然が天荒の美を發揮するは、島の背部ジョホル海峡を推して第一と爲す。尙に歐洲の航客が、嘖々其美を讃し、古の詩人が想像に寄きし、東洋譚中の島嶼を現實に見るへきものは、新嘉坡島なりと說くも宜也。左れと山水秀靈の邦土に生れし我國の征客が、認めて新嘉坡島の奇觀と爲すは、是等天然の光景にあらすして、寧ろ人事界の異情ならすんはあらす。

獅子街道の要區は、砲丘カンニングより海濱に亘る一帶の地にして、南埠頭タンジョンを去る半哩、北新嘉坡河に至る、コリヤ堤、バタリー路、ラッフル街は市中商業の中央にして、郵便局、銀行、取引所、電信流船狀師役所、其他重なる會社商店を集む。河を横切りキャベンナ橋を渡れは、政廳所屬の官省、法院、或は劇場、『ホテル』、會堂、遊園あり。劇場の前面に青銅象を安置し、遐羅王往年の來遊を記念す。傍邊に印度太守の方尖石碑あり。園の中央に、新嘉坡創立者スタンフォド、ラッフルの銅像あり。埠頭と此間は、支那人雜居地にして、警察、裁判、支那人諸署あり。

タンジョンパカーの埠頭は、毎歲新嘉坡三億萬圓に上る貨物の大部を輸出入する處にして、雜沓を極め、岸に沿ふて延長すると殆と一哩、幾多の大艦巨船を横泊すへし。又灣内に投錨する近海流船及支那船は、其貨物を新嘉坡河の水堤に移すあり。

溯洄れは、キャベンナ橋下を過る無數の三帆『トンカン』は、甘密（ガンビヤ）、藤、米、咖啡、蒂蔕粉（タピチカ）、胡椒の類を滿載して河口を上下す。市内には三大通路海岸線に平行し、幾多の街道其中を縱横す。盡日馬車、辻馬車、牛車、力車、絡繹として、異樣の飲食店は街道の兩側に並み、行人互に喧囂狂奔す。夫れ獅子街の奇觀は、東半球人類の所有見本（サンプル）を集めたるにありとす。人類博覽會としての新嘉坡は、

コンスタンチノープルを除けば、天下其右に出つる所なからん。群集には欧米人種、外に支那人、印度人、安南人、欧亞混種、日本人、亞剌比亞人、猶太人、アーメニヤ土耳其人、亞非利加人、或は稀に朝鮮人あり。馬來人種を細別せは馬來由、呂宋、瓜哇、ブギス、アチン、及混種ジャイペカン等とし、印度人には北ベンゴールのシーク、吉寧（キリン）、マドラス、西廊（セイロン）、シンガリース、孟買人等あり。支那人には福建、廣東、潮州、海南、土生清人等とし、邦人多くは島原、天草の産也。彼等の容貌、体格、服装、言語、風俗、職業は千差萬別、觀客をして無限の興味を感せしむ。雜踏は僅に一二街道の裡に之を集め、顏色は欧洲婦人の紅白なる者より、黄疸色なる欧亞雜種を經て、マドラス人の漆の如くなる、其間幾多の染分けを爲せり。彼等の中には頭上帽を被むるあり、白布を纏ふあり、緋金巾の鉢卷を爲すあり、笠を蒙むるあり、剃髪せるあり、月額（ナカヒタイ）せるあり、辮髪なるあり、婦人の散髪せるあり、男子の櫛せるあり、裸體なるあり、『サロン』を穿てるあり、上半身は洋服にして下半身は馬來風なるあり、角力の如く褌せるあり、跣足なるあり、木履を穿てるあり、鼻緒の靴あり、圓頭黑面、羅漢にて袈裟を被むる高利貸あり、前額に牛糞の燒灰を塗りたる婆羅門人あり、『サロン』を頭上に被むり、牛若丸然たる馬來婦女あり、容貌魁偉、髯毛顎（アゴ）に卷き、身長六尺に餘る佐久間玄馬の如きシーク人あり、黑面樹脂を塗り顏相醜怪、口に檳榔實を咀み、時々深紅の唾を吐き、腰邊の赤褌片々として牛馬を驅る吉寧人を見は、吾人をして地獄の黑鬼を想像せしむ。吾人は牛の鼻繩なるものを知る、然れども人間の鼻輪とは、牛よりも黑き南天竺の女子に於て之を見る。吾人又囚人の脚鎖を知る、然れども足輪、足指輪、足鈴したるは、無辜の兒童なりとす。何ぞ其風俗の甚た奇なる哉。

職業は各々人種的特別の領分を有し、瓜哇人は牛肉の辛燒「サツテ」と云ふ南洋名物の一）を賣行き、馬來人は馬丁水夫と爲り、呂宋人は潛水師多く、シークは兵卒巡査に適し、西廊人は珠玉寶石を鬻き、吉寧人は土木の役夫に從事し、マドラス、ボンベー人は欧洲、印度の雜貨を販賣し、チツテは高利を貸し、半混種（Half caste）は書記番頭に適し、海運、銀行、輸出入商業の大機關は、欧洲人の占有に屬するが如し。支那人中にも亦人力車夫は福建人に多く、「ボーイ」は海南人に限り、船頭及强盗は客籍（ハッカ）に多く、英語は土生支那人の獨占なる等、多少の區域を其中に見ると雖ども、支那人全躰に就て之を云はゝ、其範圍は極めて煩雜、吾人が一層の研究を要すべきものあり。（半島支那人論參看）

然れども街道所見の人種中老人の稀なるは如何。獅子街の住民多くは永住的ならずして、彼等は恰も空飛ぶ鳥の秋の野に下りたる如く、敢て巣を營むとはせず、壯者來り、老年去る。何故に來るや。男子志を立て、鄕關を出づ、白銀積むすんは死すとも歸らじ。故に彼等の耳目は常に營利的にして、其生活は旅仕度ならずんばあらず。旅仕度の社會に行はるゝ交際とは甚た冷淡なり。勢ひ人情浮薄ならざるを得んや。人我を信せず、我亦彼を信せず、『然り』と『否』との表裏は親友と仇敵の境なり。家賃二ヶ月を滯れば家主『ノーチース』を回附し、掛買の商業は、初より公證的ならさる可らす。約束の

期過くれは直に裁判沙汰となり、法庭の召喚狀を書狀の如く心得、訴る者平氣なれは訴へらるゝ者も泰然として、民人衙門を出入するを介意せざるか如し。五十圓以下の小事件は「コンミッショナー」之を裁判し、違警罪は凡て「マジスレート」官之を審理す。果して公平の判決を爲し得へきものなるや否やの問題に至りては、疑はし、噫疑はしと云はざるを得んや。民人多くは英語を解せす、通詞の舌頭は彼等の死活を左右し、賄賂の多寡は往々其判決を前定するあり。罪の刑事に關するものは、馬來、吉寧、若くは歐人の眼々(巡査)之を公證す。而るに此巡査程、吏人のたはいなき者は世界に在らざるべし。巡査時としては泥棒を爲し、食逃けを爲すあり、彼等に二錢三錢の賄賂あり、五十錢一圓又は十圓の賄賂あり。今假りに惡太郎ありとせよ。人力車數哩を傭ひ、呼吸盡き、熱汗背に流るゝの後、車夫に不當の賃錢を與へなば、車夫は喃々怒號せん。惡太郎直に眼々を呼ひ彼に不正の恩を施さは、無殘にも車夫は叱咤鞭撻せられん。若夫れ喧嘩爭鬪の場合の如き、先つ此萬能劑を投せしものこそ、法庭に無二の證人を得たるものならめ。而して賄賂公行の事實は、曾に法庭に存するのみならす、殆と行はれさる所なからん。支那人は之を別名して「厚意」と云ふ。彼等と直接の關係を有する官吏の如きは、其最も甚しきものたらずんは非ず。植民政府下情に通せす、其政治の腐敗を知らざるなる乎。將た默々之を看過するなる乎。寧ろ官紀振肅の評論を試むるを野暮とす。何となれは植民地其れ自身、既に英國の策士が厚賄を以て占領したるものなれは也。

詮し來れは、獅子街の動物、皆財の爲めに醉へり。彼等は貨幣の中に起臥し、金山の岩窟に葬られんことを冀ひ、此目的を達すへき手段としては、如何なる辛苦、吝嗇、敢德、破廉耻も決して辭せさるなるへし。星坡生、一日砲丘カンニングに登る。丘は市街の中央に聳ゑ、眺望佳絶なり。丘の半腹には「イスカンダア」の古墳あり。「イスカンダア」とは、亞歷山大王を呼ふの亞剌比亞語にして、古回教の英雄は此名を冠する多し。墳前終歲燒香絶えす。人皆靈顯新にして萬願成就すと傳へ、金曜日は回教の休日なれは、參詣者の來往織るか如し。我れ墳の後方に隱れ、心に耳して新坡回教徒の默禱を聽きけるに、群集には我國の僧侶然たる者あり。「某に金千圓を十ヶ月利息三百圓月賦拂に貸付たり。嗚呼神よ彼をして約を守らしめよ」。彼は其容貌の佛像たるに似す、心は鬼の如き南洋著名の高利貸なりき。次に吉寧の苦力は祈れり。「雇主我に給金を拂はさる既に月餘、願くは彼をして善心に復歸せしめよ」。或はアチン人とも思しきものは、「我古郷と和蘭の戰爭に際し、彈藥戎器を密輸し、巨利を博するを得せしめよ」。或は亞剌比亞の一商人は周章として、「あゝ神よ我今印度洋中某濠船の破碎を聞けり。某船は我保險を附せさりし貨物を積込みし者なれは、乞ふ此風説をして眞ならしむる勿れ」。最後に支那人の爲めに破産せんとする馬來人は、「此世の願望はメッカ、メヂナの聖跡を一覽すれは足れり」と泣き、其他喧嘩の中裁を依頼するあり、男女の痴情を訴ふるあり、他人を呪詛するあり、千金を搓手せんと欲するあり、千願万望、約して之を云はゝ、俗界の情情ならさるはなし。然

るに未だ憂國濟民の丹心を抱ける一人の回教徒あるを見ず。彼等か東洋の人類博覽會に代表せる各自の母國は、亡國たらすんは大病國ならさるはなく、其の同胞は將に國民的死刑の宣告を受けんとするに拘はらす、彼等は國辱を忘れ、天下の公義を忘れ、猥りに私利の爲めに、財貨を追ふて各地に流轉するは、尙夏日蛺蝶の明燈を繞りて飛集する如く、因習の久しき社會墮落の結果は、彼等をして頑冥無智ならしめぬ。假令英雄イスカンダーを地下に起らしむるとも、彼等を鼓舞する能はさるは、恰も無生の木像を鞭撻するか如けん。

植民地内に於ける回教徒は、精神的に到底半島相續者の資格なしとせは、治者の地位たる歐洲人は果して如何。

植民地は、彼等か勞働者として移住すへきの土地柄ならされは、其在留者は概ね官吏、商人、醫師、代言人、兵士等を合して僅に數千人に過ぎされとも、彼等は地中海を過くれは、皆王孫の如く心得、自ら赤銅色人種外に超然として、歐洲人たるを誇るものゝ如く、其生活は最も贅澤なり。住居は市街を去る二哩の東北タンギリンなる閑靜の地に在り。空氣清冷、綠樹蓊鬱として能く健康に適し、終歲赤帝の專横を知らす。黎明五時の砲聲長眠を破れは臥床を出て、馬車を命して郊外の運動を試み、乘り廻ること一時間の後、牛乳、咖啡、鷄卵は卓上にあり。既に朝飯を了れは、馬車は彼等を各役所に送る。半日の苦熱は印度扇布(パンカー)の下に凌ぎ、繁忙なる赤糸事務(レッドテープ)、若くは商用通信の爲に、夏日の長きを忘れ、炎威稍耐ゆ易き頃は、倶樂部に入り、芝園に集り、『クリツケット』、『ベースボール』の運動に空腹を抱へし紳士を乘せたる馬車は、最も揚々乎として街道を迂回し、再ひ綠樹繁れる閑莊に入る。

夜間の仕事は其日の新聞紙を一覽し、友人と會合しては、歐洲支那『メール』の新話を評するの類に過きす。而して其生活は、少しも不自由なきか如く、又其住居には家族外に『ボーイ』、炊人、馬丁、園丁等少くも三四の傭人あり、自らは家族の國王を氣取るか如し。今の駐在總官スイツテンハム氏が、嘗てペラ保護國に駐劄せし日、其著馬來字典に馬來語入門を添ゆ、歐人の新參者に便ならしむるあり。其中會話に屬する部の問答は大凡左の如き言葉を以て埋めり。如何に歐洲人は、命令的横着なる言語の練習を要すと信するものなる乎を見よ。

『ボーイ』うまき物ありや。此皿は好かぬから換へろ。『ナイフ』はいつも不潔じやぞ。此肉はいかぬ煮直せ。此机掛は小さい、なぜ他のにせぬ。こんな芋を何處から持て來た。此酒は冷くない、もつと氷を入れろ。なぜ再三呼ぶに來ぬか。外の『ボーイ』等は何所に居る、我々の食ひ終る迄番をして居れ。

洗濯屋との同答には、（同書三十頁）

なんで克く洗はぬ、着物が損して糊が薄くて。もう一度洗ひ直して澤山糊を付けろ。勘定はいくら

だ。……へー百枚四圓の割で。我々のは數じやないぞ。一月いくらだ。……五圓頂きます。此「チョッキ」は折目から曲つて居る。上衣は損して居る。手前の煙斗が燒け過ぎるな。勘定から一圓差引くぞ。旦那洗濯屋が參つて居ります。未た月末にならぬ、それ四圓遣れ、一圓は損料じや。

料理人との問答には、（同書十七頁）

今夜は何の菜だ。『スープ』に、燒き魚に、蟹に、燒き芋に、煮鳥に、『カレー』飯に、『チース』に、『プッヂング』で御座ります。昨晩の料理は拙かつた、好くせんと貴樣は斷はらねばならぬ。熱湯の中で鷄の毛をむしるな。旦那珈琲がもう無くなりました。此頃一斤の相場はいくらだ。三十五錢で御座ります、其他色々の買物の代金を。なんで金が澤山いるか知らん、其れ十圓。旦那足りませぬ、足りませぬ。がまんしてやつ付けろ。油も蠟燭も。飾儉をして呉れぬと困る。其れもう五圓。旦那まだ

如此は、歐洲新客の記臆すへき日常の套語なるへきも、スイツテンハム氏が炊人問答の後段に、俄かの節儉說を附加したるは、實に彼等か生活の秘密を洩らせる者に非すや。彼等は其氣位の高き割合に富厚ならさるを常とす。植民府知事一ヶ月の收入は二千八百弗、小數なる高等官吏は、千弗以下六百弗以上とす。是等は例外とし、其の他の歐洲人（重に英人）にして、中等給料三百弗内外の收入ありとせは、少くも三十弗以上の家賃を拂ひ、五十弗の食料を費し、馬を飼ひ、炊人を置き、「ボーイ」を使役し、園丁を雇ひ、其他の雜費を支拂へば、已に二百弗を超過すへく、時に新衣を調へ、友人と酒を酌み、舞踏を演し、圖書を購ひ、且又妻子ありとせは、剩す所幾干そや。其餘の大多數なる小吏は、常に鶴首して月末の來るを待ち、一ヶ年十二度の祝日に、常夏國の光陰矢の如きに驚き、頻りに昇級願を奉るも、萬事意の如くならされは、男子志を立てゝ鄕關を出てたるも、錦を古鄕に飾る能はざるは愚か、立往生を爲さすんは誠に幸なり。寧ろ財囊の豊なるはコリヤ堤街、商館を出入する輩ならんとは、小坡雜貨店の丁稚が、其細君の買物を見夙に判斷を下せし所なり。左れと彼等か代表する會社又は商店こそ或は富裕なれ、彼等が個人的の富は、均しく微弱にして、在坡歐人の給金に寄食する者にして、南洋高利貸の恩顧を蒙らざるは、殆と稀なるを發見せは、吾人は唯呆然たらんのみ。歐人果して半島相續者として、各々白骨を熱地に曝すの覺悟あるか、嗚呼否々々。

然れとも、彼等が新坡島を化して東洋の勝區となし、馬來半島を開拓せし功蹟は之を沒するを得す。初めスタンフォールド、ラッフルが、新坡島を柔佛（ジョホール）より買收し、英國の國旗を飜せし時は、今のニュー、ハーバーなる埠頭の近傍に、僅々百餘の馬來人口ありしのみ、全土森林繁り虎獸群を爲せしと云ふ。ジョンカメロンが、卅五年前の新嘉坡を記する中に曰く、

此小島に住む虎は、柔佛海峽（シンガポール）を渡り來ると覺しく、一日馬來人は、老虎の水に溺れて網にかゝれるを見たり。年々此獸の爲めに生命は害せらるゝも、支那人は農夫を使役するの方便により、其

事實を秘密とせり。政府は一時百圓の懸賞を以て、滅虎の事を謀りしも、此四年間僅に十頭を獲たるのみ。

左れは「シンガプラ」は、「レモプラ」(虎の島)たるに拘らす、何故に無實の獅子島(シンガプラ)と名つけたりし乎。蓋し獅子は獸中の王、其威虎に勝る。則商業界の英、蘭、獨、印度、猶太、支那人の競爭場裡外に、此猛虎は驅除されたれはなり。

○其三　新坡港の貿易

「シンガプラ」なる語の第二義は輻湊也。即ち船舶輻湊し、百貨輻湊し、商賈又輻湊するの地として、シンガプラ實に其名に耻ぢず。何となれば馬來半島の貿易は、海峡植民地の貿易にして、植民地の貿易は、新嘉坡の貿易と云ふ可く、新嘉坡の貿易は、亦之を群島の貿易と稱す可ければ也。電信は世界の各所に通じ、交易の線路は東西南の三洋に跨り、海運の便益實買の旺盛は、東洋多く其比を見す。明治廿九年度に於ける貿易額は、

輸入總額　一三七、二二〇、一八四弗
輸出總額　一一、四、六三一、〇四六弗

合計二億五千万弗以上、其商品を第一飲食香料、第二未製品、第三製造品に區別し、重要品目を擧ぐれは、

第一科には、

米及穀類　亞片　鹹魚　家畜　胡椒　大薯粉(タピオカ)及碩莪粉(セーガ)　咖啡　砂糖　烟草　茶　椰子實　檳榔子　栳栲仁　丁香　魚翅　石參　毛燕　海菜　「カレー」原料　干蝦　生菜及乾菜　葱頭　乳酪　「ギー」　「ビスケ」　「チョコレツ」　花生豆油、食椰油　洋酒　糖菓等あり。

第二未製品の部には、

錫及錫塊　染料甘密(ガンビヤ)　籐　椰子干肉　石炭　樹脂「ガタパチャ」　仝「ダンマー」　柴梗　安息香　印度護謨　ボルネヲ護謨　樹膠　「カツチ」阿仙藥　紅花　藤黃　血蝎　樟腦　染料栲樹皮(マングローブ)　水靛及土靛　白樹油　揮發油各色　石油　綿花　戒琺　象牙　犀角　鹿角　赤牛皮　水牛皮　羊皮　寶石　貝　沉香　隆香　蘇木　檀香木(クランタ)　呀蘭治木　其他良材あり。

第三科には、

木綿物(生晒金巾、色布、花布、更紗、綿縫糸、「サロン」地、「リンヂル」手巾)、印度麻袋(グニー)　蘇棉帆(ケンビル)　絹織物　絹手巾　絹地「サロン」　絹糸　毛織物　毛布　呂宋繩　帽子　傘　金屬製器各種　支那產烟花　陶器　「ランプ」及玻璃器　火柴　蠟燭　洗香及燒淨紙　「セメント」　瓦　漆器　竹木藤柔皮細工　花蓆　紙　石鹼　其他各種の雜貨あり。

（上記貨物中熱帶生産に屬するものは附錄に之を詳說せり）。

又新坡貿易の線路を、(一)馬來半島西岸、(二)仝上東岸、(三)蘭領馬來群島、(四)北部ボルヲヲ及呂宋、(五)極南地方、(六)印度、(七)歐羅巴、(八)極東諸國の八條に區分し、前記物貨出入の一斑を示せば左の如し。

(一)馬來半島西岸にジョホール、スンギーウジョン、セランゴール、ペラ及クダの諸國あり。

ジョホール國は、世界に於ける染料甘密（ガンビヤ）の産地として、毎年新坡に、四百万弗以上を輸出し、又胡椒、檳榔實、椰子干肉、籐、果實あり。新坡よりは米（百五十万弗）、豕、豆油、石油、綿布を輸入し、スンギーウジョンは、錫（百万弗）、甘密、咖啡、胡椒を出し、米（三十万弗）を入れ、セランゴールは、錫（千二百万弗）、咖啡（廿三万弗）、籐、甘密、鮮魚を出し、米（百九十万弗）、亞片（百万弗）、豕、豆油、椰食油、綿布、「セメント」、穀類、石油を入れ、ペラは、錫（千四百万弗）、籐、樹脂、砂糖、「ラミ」酒、「カレー」原料、香水原料を出し、米（百五十万弗）、亞片（百万弗）、其他セランゴールと輸入品目を等ふし、クダに米（二十万弗）、家禽（六万弗）、魚、家畜を産す。

（上記價格を附したるは、著者が明治廿九年度、海峡植民地輸出入表に基き、一々又之を國別して、其品目及價格の大要を別記せしものより之を拔萃す。素より重要品の遺漏及其排列の不順を免れず）。

(二)半島東岸にパハン、ツリンガヌ、クランタン、パタニ、シンゴラの諸國あり。

國土未開にして新嘉坡間の交易盛ならず。パハンは、金塊（廿万）、錫、籐、沉香木、「ガタバチャ」、魚、木材、ツリンガヌは、魚（廿万）、椰子干肉、「ガタバチャ」、クランタンは、魚、椰子干肉、豕、パタニは、鹽豕、シンゴラは、燕窩、魚類を産出す。

(三)蘭領馬來群島とは廖内（リヅ）、司馬太來東岸、仝西岸、アチン地方、瓜哇、蘭領ボルヲヲ、セレブス島、バリ島を云ふ。

本線は、群島貿易の重要なるものとす。廖内諸島よりは、甘蜜（ガンビヤ）（百廿萬）、胡椒、木炭を以て、米、亞片、石油と換へ、司馬太來東岸の輸出は、「バレンバン」種咖啡、冠標石油（クラウンオイル）、煙草を最とし、次に、籐、魚、「サグ」澱粉、綿花、安息香、木材、檳榔實、椰子干肉、「イリピナツト」、各十萬弗以上、其他獸皮、馬、燕窩、印度「ゴム」、血蝎染料あり。輸入は米、亞片、食鹽、家禽、牛、綿布、「サロン」、椰子油なり。仝西岸アチン地方は、黑胡椒（百十萬）、檳榔實、籐、椰子干肉、獸皮、豆蔻花を輸出し、新坡港又檳城港よりの輸入は東岸に似たり。群島第一の開進國たる瓜哇は、砂糖（三百萬）、豆油、國產「サロン」、大薯粉（クルツカ）、咖啡、椰子肉、檳榔實、椰子油、十萬弗以下には、綿花、「チョコレツ」、華澄茄（キユベブス）、籐、家畜、落花生、山姜の類を輸出し、輸入は、魚（三百萬）、米（二百七十萬）、甘密、「カレー」原料、油粕、木綿反物、印度麻袋、燐寸、陶器、麵粉、豆類、十萬以下は、密臘、烟花、果實、漆器、魚胆、傘、「ダマー」樹脂、「ギー」、糟粕等なり。而して其總金額は常に輸出に倍す。

蘭領ボルネヲの名港を、ポンチヤナ、バンジヤマシンとし、籐(百七十萬)の名産に次ぎて、『ガタパチヤ』(百萬)、椰子干肉、椰子油、以下燕窩、『サグ』粉、胡椒、檳榔實、海參あり。新坡港よりは、米、反物、烟艸、石油、家禽を輸入す。セレブス島に、海參、『コーパル』護謨、海菜、『サグ』粉、燕窩、龜甲、丁子、肉豆蔻、白樹油、眞珠貝あり。輸入は蘭領ボルネヲに加るに、亞片、鹽、甘密(カンビヤ)を以てす。バリ島は、『アラビヤ』種咖啡(百四十萬)、椰子肉の名産あり。其他獸皮、海參、眞球貝を輸送す。其他、蘭領幾島の輸出は合計二百萬弗、輸入百六十萬弗、其品目は上述各種を抱有す。

(四)北部ボルネヲ、フイリピン線路には、サラワ、ブルネー、ラブワン、英領北ボルネヲ等の植民地、呂宋、及スーロ諸島あり。

以上の植民地よりは、『サグ』粉、胡椒、椰子、燕窩、護謨類、籐、其他天産物あり。ラブワンに、少量の石炭、呂宋よりは、烟草、麻、椰子、獸皮、スーロ諸島よりは、海參、眞球を輸送す。

(五)極南線を、獨乙領ニユーギニヤ、濠洲諸港とす。

ニユーギニヤよりは、海參、濠太剌利亞地方よりは、石炭、檀香木、馬、牛酪、『チース』を輸入し、新坡港よりは、咖啡、胡椒、『サグ』粉、大薯粉、雜貨を輸出す。

(六)印度諸港を、バーマ、カルカツタ、マドラス、セイロン、ボンベー、佛領印度とす。

バーマ沿岸よりは、米(九百萬)、糟、生皮、豆類、『カレー』原料を出し、魚、生糸、燐寸、陶器、雨傘、檳榔實、咖啡、烟草を入れ、カルカツタは、亞片(九百萬)、麻袋、密臘、『ヒマシ』油、硝石、『ギー』、羊、山羊、家畜、飼馬料、肥料を出し、檳榔實、胡椒、柴梗、甘密(カンビヤ)、『サグ』粉、肉豆蔻、籐を入れ、マドラスは、『サロン』、綿反物、羊皮、油粕、家畜、鹽、土靛、落花生、烟草、『ギー』を出し、檳榔實、柴梗、安息香を入れ、セイロンは、椰食油、寶石、魚を出し、ボンベーは、糸、葱を出し、咖啡、檳榔實、安息香、及籐を入れ、佛領印度は、油粕、肥料、落花生を出し、以西ペルシヤは、果實、エジプトは、葉卷烟草を輸送し、アラビヤは、『ギー』、降香、亞細亞土耳古は、皮革を輸入す。

(七)歐洲諸國。

伊太利は『ミルク』を出し、錫、『ガタ』、椰子肉を入れ、佛蘭西は、『サロン』、『ブランジー』を出し、椰子肉(三百萬)、咖啡、胡椒、護謨を入れ、獨乙の輸出は、『ビール』、火酒類、綿織物、陶器、玻璃器、燐寸、蔗、糖菓、乳酪、牛酪、藥劑、鐵器、刃物、其他の雜貨にして、輸入は籐(百五十萬)、甘密、錫、大薯粉、咖啡、『サグ』粉、角、柴梗、龜甲なり。和蘭の輸出は、『サロン』、『ジン』酒を其大なる者とし、輸入は、錫(二百萬)、其他は獨乙に似、白耳義は、陶器、玻璃器、顔料、亞鉛板、臘燭、魯西亞は、石油(八十萬但し新檳共)を供し、英國よりは、棉織物及糸類(一千萬)、石炭(百六十萬)、以下電信鐵

道用機械、鐵器、刃物、陶器、『サロン』、毛織物、火酒及『ビール』、『セメント』、薬劑、顔料、文房具、書籍、糖菓、鑵詰食料、其他百般の貨物を輸出し、輸入は千三百萬弗の錫を初め、一切の群島産物備はらざる物なし。北米の輸出は、卅五萬弗の石油に止り、輸入額一千萬弗、乃錫(七百萬)、甘蜜(百七十萬)、咖啡(百萬)、胡椒、籐、『コーパル』雖謨、肉豆蔻、『サグ』、大薯粉、其他あり。

(八)極東諸國とは、暹羅、佛領安南地方、支那沿岸、香港、及日本を云ふ。

暹羅は六百六十萬弗の米を初め、十萬弗以上のもの、牡牛、紫梗、牛皮、山姜、木材、又『ゴマ』種子、沈香木、牛角、鹿角、『ダマー』、藤黄、安息香を輸出し、綿織物、『サロン』、毛布、麻袋、亞片、椰子油、石油、檳榔實、鐵器、蜂蜜、豆油、雜貨を輸入し、又其西部沿岸よりは、錫、牛、栲樹皮を出す。佛領沿岸よりは、魚類、米(共に百五十萬以上)、生糸、『サロン』、豕、豕油、椰子肉、柴梗、皮革、豆類を輸出し、麻袋、檳榔實、魚翅を輸入す、支那沿岸よりは、茶(廿四萬)、陶器、沉香、酒、生糸、支那人用食品、果實を輸出し、麻袋(五十六萬)、木材、燕窩、海參、魚、籐、胡椒、栲樹皮を輸入す。香港は、麵粉(百廿萬)、支那烟草、絹織物、食料品、茶、棉物、豚油、豆類、漢薬、紙、烟花、沉香、魚類、靴、陶器、燐寸、傘、樟腦、豆油、果實を輸出し、亞片(百萬弗)、砂糖、錫、海參、綿花、胡椒、檳榔子、檀香木、寶石、燕窩、羊皮、大薯粉、栲樹皮、『カレー』、皮革、木材(凡て十萬弗以上)を輸入す。日本は、石炭(百五十萬弗)を大宗とし、十萬弗以上のものは、燐寸(五十八萬)、漆器、傘、綿織物、車、一萬弗以上は、陶器、魚類、玻璃器、石鹸、絹手巾、玩具、時計、薬品、及各地の雜貨を輸出し、米(十五萬)、錫(十四萬)、或は牛皮、羊皮、鼈甲、甘蜜、土靛、咖啡、其他の輸入を合して、僅に二百四十萬弗に過ぎず。

新坡貿易の巨額は、英國を第一とし、之に次きて一千萬弗以上の取引を爲すものを、暹羅、香港、瓜哇、セランゴール、カルカツタ、及北米合衆國とし、五百萬弗以上は、日本、佛蘭西、バーマ、佛領印度支那、蘭領ボルネヲ、支那沿岸、ペラ等とし、百萬弗以上は、獨乙、ボンベー、セレブス島、バリ島、蘭領諸島、和蘭、サラワ、廈門、スンギーウジョン、墺太利、伊太利、白耳義、英領北ボルネヲ、呂宋諸島、マドラス沿岸、濠州、パハン、アチン地方とし、五十萬弗以上には、魯西亞、ラブアン、佛領印度支那保護國、ツリンガヌ、スーロ諸島、佛領印度等あり。五十萬弗以下には、センゴラ、パタニ、西廊(キイロン)、西岸暹羅、アラビヤ、ペルシヤ等あり、亦盛ならずや。

熟ら新坡貿易の發達を按ずるに、拓地第一年の時期より長足の進歩を爲し、其全盛の極致とは自今幾年の後なるか、吾人の容易に想像し能はざるものあり。而して現今の盛況を來せしは、之を左の二大原因に帰せざるを得ず。

(一)碇泊場として便利なる中央區たること。

(二)自由貿易港たること。

將來は如何。地理上の便益は、未來千年の後と雖とも不變なるべし。又其第二因は、群島に於ける和蘭人が、政府の歳入を貨物の重税に徴し、東印度公班衛すら、其他に於て未た一個の自由港を有せざりし時に於て、新嘉坡が東洋に於ける自由貿易の先鞭を著けし者は、現時の繁榮を促したる主因ならざるを得す。然れとも記臆せよ、植民地元と殖産の地ならす、又未た工藝の區ならざることを。乃歐洲、印度、支那大陸に輸出する各種の熱帶産物は、植民地に産出するものにあらずして、被輸出品に係り、其輸入する英國、日本、及獨乙の製造品は、植民地人民の消費するものよりも、被輸入品に屬す。故に其取引は主として、馬來群島周圍の各植民地間の媒介を爲すものなれは、新坡貿易の進歩は內地の殖産上非常なる開發を爲し、人民消費力の次第に增進せしを示めせるものとせは、百尺竿頭一歩を進めて之を考るに、群島各地の諸港にして、從來新坡港と支那船及內海通航の小氣船を以て來往し、地方の生産物を一旦新嘉坡に集て、其後之を大陸に輸送し、大陸の製造品は、新波港を經て地方に配布し來りしものも、地方人口の繁殖及生産力の增進は、遂に特別に一個の新港を起し、直接に歐洲及支那と輸出入の大洋航路を開くに至らは、是れ新坡繁榮の一部を蠶食するの理ならずや。夫然り、豈夫れ然らんや。馬來群島の人口は夥多なり、好し一個の新港出て、新嘉坡の需要供給を絶つとも、一地方の大進歩は又地方の進歩を促し、此新個の地方は更に新坡港と交通を開くに至らは、新嘉坡と群島間の小航路は、愈々盛大に趣くも、決して衰微の憂なき、尙鐵道の時代に、車馬の需要は社會に絶ゆるとなきか如し。

媒介貿易地たるの利益は、幾多の販路を撰ひとを得べし。乃歐洲に於て瓜哇若くは支那に輸出さるゝ貨物は、一旦新波港に集り、時價支那に低くして瓜哇高けれは、勿論瓜哇に入り、反對の時價は反對の販路に向ふ。而して支那、瓜哇共に不可なるも、尙暹羅、西貢、ボルチヲを試ひる等、販路は最も廣濶なり。販路の廣濶なる市場は、撰賈の市場も從て自由ならん。此種の貿易に至りては、假令新嘉坡島周圍の地方「マーケット」は、大陸と直輸出入の航路を開き、現今の瓜哇、香港、暹羅諸港の如く、繁昌を新坡港と競ふも、互の利益を蠶食せず。苟も植民政府が、厚く迄自由貿易の主義に則り、港税輸出入税を除き、灣內出入の貨物をして、人足賃陸上げ雜費の外、其價格を嵩ひことなからしめば、群島植民地間の大市場たる利益は、永く減するとなからん。是れ海峽植民地が、後進を以て興り、廖內群島に於ける和蘭人をして顔色なからしめ、佛領安南に於ける佛人の膽を奪ふ所以。然れとも一朝從來の自由主義を變更して、眼前の小利に馳するの商略を取るとせんか、彼が東洋に於ける偉大の勢力は、忽ち衰運に傾くものなると、必しも識者を待つて之を知ることを要せず。

○其四　海峡植民地の組織

馬六呷、檳榔島（「ピナン」は馬來語の檳榔樹なり、故に此名あり）、新嘉坡を以て半島著名の三州府

とし、其他馬六呷の海峡に瀕する、英領ウエルスレー州、ヂンチング、パンコル島と、印度洋中のココス、クリスマス諸島とを合稱して海峡植民地と云ふ。植民地の建設及政府組織の大体は左の如し。

一沿革

千七百八十六年。甲比丹フランシス、ライト、東印度公班衛の爲に、檳榔島をケダ國主より買收し、初めて英領植民地を馬來半島に開く。後數年、海賊討伐の便益を名とし、對岸二百五十方哩の地方を同國主より買收す、今のウエルスレー州是なり。

千八百十九年。『サフ』スタンフヌルド、ラッフルは、柔佛(ジョホル)國の一王族と條約を結ひ、新嘉坡島を占領して、之を東岸司馬太來の英領ベンクーレンに併せ、後四年、ベンゴール政府の管轄に移す。

全二十五年。和蘭條約に由り、ベンクーレンを以て蘭領馬六呷と交換す。

全三十七年。各植民地の首府を檳榔島より新嘉坡に移す。

全六十七年。海峡各植民地、東印度公班衛の管轄を離れ、本國直轄の植民地となる。

全七十四年。植民府知事『サー』アンヂュ、クラークは、ペラ國主に迫りて、パンコル條約を訂結せしめ、パンコル島及對岸二百二十五方哩の地方を割取し、ウエルスレー州は、別に新地二十五方哩を加ふ。

全八十六年。コヽス諸島を領し、後三年、クリスマス諸島を之に加ふ。

一政治

英國皇帝の勅撰に係る海峡植民地の知事は、行政會議、立法會議の贊翼する處たり。行政會議は、植民政府の高等官吏八名を以て議員とし、知事其議長たり。

立法會議々員は、行政會議々員八名に加るに、在野員七名を以て成り、内二名は新坡、檳島兩商業會議所の推舉する所にして、其他は凡て知事之を撰定す。

一官衙

新坡には、議政堂、植民地書記官省、高等法院、大審師局、會計局、會計檢査院、工部局、地所局、支那人政務局、警察署、監獄署、警罪裁判所、請願裁判所、檢屍官署、破産役所、登記所、執達吏役所、司港局、郵政局、宗務局、印刷局、醫事局、市役所等あり。檳榔島、馬六呷には、駐在官省以下の諸局を設き、ウエルスレー、ヂンヂング地方は、檳島の支管に屬し、コヽス、クリスマス諸島は、毎歳一回、知事代理員の巡視する處なりとす。

一法律

海峡植民地は、立法會議を通過し皇帝陛下の裁可を經たる地方章程を以て管轄し、且本國々會、印度立法部の決議せし條例にして、此地方章程と抵觸せざる限りは、之を適用す。刑事に關する事件は、印度刑法の修正せしものに則り、民事訴訟法は、英國裁判條例に基きたるものを適用す。

一高等法院

判事長一名、判事三名あり。民事の訴訟は年中之を受理し、廻審院（アンサーズ）としては、新坡檳島に毎二ケ月一回、馬六呷に毎三ケ月一回開廷し、必要の場合には控訴院たり又海事裁判所たり。高等法院は、植民地内に於ける各下等裁判、及在遥羅英國領事裁判上、更に高等の裁判權を有す。

一支那人參事會

在留一般支那人に關する要件を討議し、政府の諮問に應し、或は意見を上申す。議員は各地の貫籍より、知事之を撰拔し、支那人政務局長（又保護官と云へど）を議長と爲す。

一市會

三州府に設置し、議員は各區域の納税者より撰擧せしものと、知事の指名者とにして、市役所は供水の業を擔任し、市の域内に於ける、道路、橋梁の修繕を行ふ。

市會に徴税の權あり。其収入は、家屋及宅地税、水餉費、市附屬建物借税、車馬税、裘犬免許税、不快物幷に危險物營業免許税等なり。

一警察

警視總監一人、警監三人、副警監三人、警部長三人、警部廿一人、印度「シーク」、馬來、吉寧、支那巡査合計二千人、新坡に卅六の警察分署あり。

一兵備

植民地の軍隊は、現時陸軍少將の指揮する處にして、歩兵一大隊、要塞砲兵二中隊、工兵一中隊、其總員一千三百五十二人、之に少數なる印度兵と、新坡在留官民より組織せし義勇兵を加ふ。檳榔島は平常歩兵の分隊を派遣し、新坡は八個の要塞を設け、海峡埠頭を衛戍す。（檳榔島分隊の派遣は、明治三十一年より之を廢す）。常備軍艦は、英國支那海艦隊の馬六呷海峡を防衛するもの常に二隻あり、

一植民地の面積及人口（明治卅年度調査に由る）

	新嘉坡	馬六呷	檳榔島	ウエルスレー	ヂンヂング	合計
面積	二二三方哩	六五九	一〇七	三七〇	二二五	一、四八四方哩
人口	二〇二、九二九人	九五、一三二	一三六、四八六	一一〇、一六五	三、八〇四	五四八、五一六人

一植民地政府の財政（明治廿九年度）

一歳入　四、二六六、〇六三弗

一歳出　三、九五七、二六二弗

第三章　英國の半島保護政略を論ず

抑も英吉利人が、馬來群島と交通を開きしは、第十六世紀の末葉にして、近世の東洋史上に、震天動地の働を爲したる、東印度公班衛（イストインジヤンコンパニー）なるものは、初め馬來群嶋貿易の目的を以て興り、其商船はバンタム、バテビヤ、アチン、ジャンビー、アンボイナ、タアテート及テモルに來往し、胡椒、肉豆蔻、丁香、其他熱帶生產を、本國の市場に輸送し來りけるが、千六百十三年、甲比丹ベスト二隻の軍艦を率ゐて司馬太來アチンに入り、後葡萄牙人を印度に破り、モゴル王國と條約を結ぶに及びて、英人の利益は漸々群島を去りて、大陸印度の一方に傾きぬ。三十一年公班衛（コンパニー）は、貿易の中央部をバンタム島よりスラに移し、後八年、マドラス城堡成り、六十八年、ボンベー島英領に歸し、九十六年、カルカツタを買收し、千七百四十六年、英佛兩國の衝突となり、五十一年、クライブは佛人を破り、續々の戰勝と戰後の經營とは、英人をして殆と馬來群島あるを忘却せしめたりき。公班衛政府は、首會をベンゴールに定め、大に威力を東洋に振ふに際し、呂宋遠征、バダン攻擊、マラカ、モロカス、セレブス、タアテート占領の如き、多少の軍略政治的關係を、馬來群島間に有せざるには非れども、是れ歐洲問題の波動に過ぎずして、群島に於ける英國人は、葡萄牙、西班牙、和蘭人の如く、國民的勢力を、領地膨脹に專ならしむるに暇あらざりき。以是、公班衛『エジエンシー』の地たりし、インドラボウル、ブリアマン、パダン、ジャンビー、ベンクウレンの如きは、早く商業地史に葬られ、現存の植民地は、馬來半島、北方ボルネヲの一部に過ぎずして、蘭人獨り政權商權の獅子的併呑を恣にし了れり。半島に於ける英吉利人の歷史は、之を(一)商略、(二)政略の時代に分つべし。商略の時代とは、千七百八十六年甲比丹ライトが檳榔島を開きしより、千八百六十七年、檳島（ピナン）、馬城（マラカ）、新坡（シンガポウ）の合同植民地は、東印度公班衛の屬轄を脫し本國直轄に移る、其間八十年の時代と云ひ、政略の歷史とは、其後三十年間の出來事を云ふ也。

(一)　商略の時代

第一期間の成功は、和蘭人を馬來半島より驅除し、彼の商權を掠奪し、强固なる半島經營の基礎を定めたるに在りとす。

新嘉坡開拓者をスタンフヲルド、ラツフルと云ふ、資性剛毅、博學多才、梟雄ワーレン、ヘスチングス幕下の有爲なる年少政治家なりき。思ふに今日の英國が半島に偉大なる勢力と、群島貿易界に特異の光彩を發揮するものは、實に彼の政略に負ふや大也。ラツフル千七百八十一年ジャマイカに生れ、十五才にして東印度公班衛の書記となり、千八百〇五年檳島政廳の副官に擧けられ、後六年轉して爪哇に入り、十七年ベンクーレン總督たり。ベンクーレンは、當時司馬太來の西岸に於ける、英國著名の植民

地なりき。ラッフル思へらく、英國の東洋に於ける海上權力を發達せしめんには、群島に一個の安全なる中央植民地なかる可らずと。而るに當時歐洲と支那海間の航路は、喜望峰を迂回し、印度洋を超ゑ、司馬太來、瓜哇の海峽を横切るを常とし、若しも其航路を印度よりするものは、馬六呷海峽を經て、ジョホールの南端を過ぎければ、ラッフルはリヲ群島の一なるビンタン島附近を以て極東印度の要區たるへしと信し、翌年自ら印度に趨き、其抱負を太守に語りぬ。ヘスチング直に其議を贊し、彼をして新地撰定の事を行はしめぬ。ラッフル再ひベンクーレンに歸り、熟ら地圖を披ひて四隣海島の形勢を按するに、バンタム島は既に蘭人の手に落ち、又策の施すへきなければ、彼は馬來半島の南端にして、ジョホール國領に横はれる新坡島を以て其目的地と定めぬ。即ち東洋貿易の「ステーション」を此土にトし、大英國の植民地として耻さるの自由貿易港を開くことを得は、近海歐洲の競爭者に一大打擊を與ふへしと。千八百十八年、彼は馬六呷の駐在官たりしメージャー、フエーカアをして、柔佛（ジョホール）蘇丹、アブヅラ、ラーマンシャーと約せしむるに、英國は自今柔佛と修交親和し、其領域に貿易を目由ならしめ、且新嘉坡島に、一の埠頭を築く權利を得んことを以てしたりき。而してラッフルが、斯かる條約の必要を感したりしは、彼か柔佛の微弱にして賴む可からさるを知れとも、亦た和蘭人の奸策に陷らさらんことを欲し、成る可く法律的有効の權利を取得せんとしたるに因れり。然れとも、是豈に蘭人の快心にして、傍觀すへきものならんや。時恰もビーナ條約成るの後にして、英國は甞て占領したる馬六呷を、再ひ蘭人に還附したりければ、彼等は大兵をリヲ群島に集め、陰然ジョホール併呑の策を講しつゝありき。リヲは新坡島を去ること南數十哩餘、舊柔佛の領地にして、蘇丹アブヅラーマンシャーの住せし地なりとす。蘭人此密約の兩國間に成りしことを探知しければ、直にラーマンシャーを捕へ、彼を强迫して此條約の無効なることを宣言せしめ、且英人を國外へ放逐すへきの約を結はしめたりき。然れともラッフルの智謀は、彼か英國の「ステーション」を新嘉坡に定めたりしとの、蘭人かリヲを撰みしに勝るものありしが如く、彼り對柔佛策も亦蘭人に比して一歩を進めたり。曰く機神速を要すと。直にメージャー、フエカーを從へ、大膽にも新嘉坡に上陸し、英國の國旗を飜せり。

偶々柔佛の總督ツモンゴンなる者來りて彼を見るあり。ラッフルはツモンゴンを其黨與と爲さんと欲し、ツモンゴン亦英人の味方たるを辭せす、且告くるに曩に英人の約せし蘇丹は、柔佛の眞王にあらすして、正統の國君は先君の長子パッサンシャーなることを以てしけれは、ラッフルは蘭人かアブヅラを擁して蘇丹と潛稱し、密に野心を其間に抱藏するものなるを察し、暗夜人をしてパッサンシャーをリヲ島より奪ひ、自ら之を新嘉坡に迎へ、更に此パッサンシャーと、總督ツモンゴン及吧坑（バハン）國主と共に、兩國同盟の條約を締結したりき。

當時の條約に依れは、英國の得たる陸土は、西タンジョン、マランより、東タンジョン、カトンの間、

海上は彈丸の達すへき距離にして、全島の英領に歸せしは、千八百二十四年にあり。而して其間五ケ年、新嘉坡は常に蘭人の怨府となり、彼等は深く其國利を失はんとを恐れ、蘭政府は屢々烈しき談判を申込み、本國政府も自由貿易港の計畫に躊躇し、カルカツタ官人の多數は、其前途の覺束なきを感したりしにも拘はらす、メージャー、フエーカーの幼稚なる植民地は、剛毅なるベンクーレン總督の庇翼に因り、辛くも犬牙の禍を免れたりき。

此時馬六呷に駐在せし蘭の提督は、最後の反抗を試みて曰く、千七百九十五年在馬六呷の英人と、柔佛間に結ひし二十三ケ條の條約は、新嘉坡の馬六呷に屬せし證據を具備しければ、ビーナ條約後の新坡島は、固より馬六呷に附屬せさる可らずと。ラツフルも亦、當時蘭人の手に成りし條約中、蘭政府が歐洲列强の疑惑を避けんか爲め、半島馬來諸國の獨立を證認せし一章を論據として、柔佛の獨立と新盟約の有効を主張したりき。而して此坡島領權の問題は久しく決せす、動もすれは、蘭、英兩植民地紛紜の種子たらんとせしが、千八百廿四年ポーランド條約の訂結は、兩政府の和解となり、蘭人永く馬六呷を領し、東印度公班衙は、新嘉坡の全土を買收し、蘭人竟に半島に勢力を失ふに了りぬ。千八百二十七年、得意なる英人は、半島三植民地合同の必要を感し、其より十ケ年間に於ける新嘉坡の非常なる進歩は、此合同植民地の首府を、檳榔島より新坡島に移し、新に海峽植民地の名を以て起れる自由貿易港は、恰もラツフルか新坡占領の當時、『吾人の目的は領地にあらす貿易にあり、先つ通商咽喉の要區を扼するを得は、吾人は臨機應變に我國威を政治的にも顯彰すへし』と豫期せし如く、印度政府の下に、最も平和なる發達を爲せしこと四十年、歐洲人と云はゝ直に國土亡滅者なりと信したる半開土人の保護者として、半島在留の英人等、其同胞か曾て印度に行ひたる、又歐洲列强が群島に働きたる、暴政非道の罪惡と贖ふかの如く見えしかど、新坡化して南洋第一の都府と成り、植民政府の歲入は歲出を償ひ、再ひ印度政府の保助と、其迂遠なる行政とに滿足せさるに及ひては、蛟龍豈池中の物ならんや。天魏山(プラテンギ)の麓、吡羅の水洋をたるの邊、積年の潛勢力は風雲を叱咤し、所謂『アングロサキソン』民族の本色を顯はし、半島回教國併呑の策を畫するものなると、是れ近三十年來の趨勢にして、其手段を保護政治とは云ふ也。

(二)　國政干涉の發端

海峽植民政府をして、半島回教諸國の內政に干涉せしめ、彼等を英の保護國たらしむへしとは、其知事ジョールジ、オードの建議せし所なれとも、英國は深く海峽の事情に通せさりけれは、シンガプラ、マラカ、ピナンの名は、何人も絕東異鄕の感を抱き、植民地か其後廿年に負へる利害の關係は、未た輿論の認めざりし時にして、本國政府は常に保護政治尙早論を唱へたりき。

千八百七十一年五月吡羅國主沒す。新主を立つるの法、古來選擧を以てせり。國內の酋長相謀りて、

遺志明を推して其位に即かしむ。王族に阿房頭郎、及愈爭夫なる者あり、遺志明の新主たるを見て、心竊かに之を快とせざりき。

此時、支那人亂をラルに起す。ラルは吡羅の東岸に位する著名の錫産地にして、人口二萬を有し、其酋長は馬來人にして、國主蘇丹の支配に屬せり。酋長性貪慾、嘗て採鑛の區を一人に與へ、又た之を他に賣れり。鑛主權を爭ふて相下らず、紛擾の亂兩黨兵器を動かし、勢猖獗を極む。酋長殆と鎮定の術に窮せしかど、敢て之を蘇丹に奏せず、却て急を對岸槟城政府に報し、英政府め應援を乞ひ、謂り曰く、ラル元と吡羅領にあらず、故に我は獨立の國主なりと。オード思へらく、正當なる干渉を試むべき好機會に遭遇せりと。直に軍艦を派して、ラル河畔の暴民を擊退せり。

史家此亂を以て、遺志明と阿房頭郎間に起れる王權爭奪の亂と爲すは誤也。王位相續の失意者阿房頭郎は、自己か王族の故を以て、兵を擧ぐるに足るの名望と勢力に乏しければ、窃かに植民政府の權官に媚ひ、王位を萬一に覬覦せしに過ぎず。

偶々新任知事アンヂュ、クラークは、植民大臣キンバーレー卿より、馬來半島の某所に英の政務官を駐劄せしむるの可否を審査すべしとの訓令を帶びて、オードの後任を襲へり。是れ阿房頭郎の寧ろ乘すべき好機會なるも、魯鈍其策に乏しく、新任知事亦た南洋事情に暗し。而して此二人の盲目者を握手せしめ、後段一場の奇劇を演せしめたるものは、狡猾なる某英人なりき。彼は阿房頭郎の爲めに、自ら一書を起草し、彼をして之を植民政府に上らしめぬ。其要吡羅の眞主阿郎、謹んで邦家を擧げて英旗の保護となし、一官人の駐在を冀ふにあり。阿房雀躍し、直に之に記名せり。彼は君位を得ば足れり、國家の滅亡如何は思ふ所にあらず。野心滿腔のクラーク、亦た國政干渉の機を得んと欲するの外、小蠻國に於ける王統の問題は關する所にあらず。於是新任知事は三隻の軍艦を率ゐ、西岸パンコル島に到り、ラル紛紜の支那鑛主の爲めに、其爭鬪を仲裁し、後沿岸の馬來酋長等を招集し、彼等に談り告げけるやう、植民府大訟師の審査に依れば、大英國は古來吡羅國と、條約上、新主の即位を監督するの責任ありと。誰か奇怪なる條約の存せしに一驚を喫せざらんや。然れども更に奇怪なるは天性慓悍の稱ある銅色人中、一人の之に反抗するものなかりしことなり。クラーク又毒舌を揮ひ、阿房頭郎を立て、君主と爲すの可否を問ふ。滿堂啞然として言無く、愚かにも彼等は、歐文を以て認めし文書に、自己の姓名を記入せしの何事なりしかを知らざりき。

是れ半島政治史に著名のパンコル條約なる者にして、其要件は遺志明を廢して阿房頭郎を立つると、新主は英政府の駐在官の助言を容れ、宗教風俗を除く一切の行政は其勸告に從ふ可きと、駐在官省の經費は國庫の支辨たるべきと等にして、同時にカリヤン、パンコルの地方は英領に歸せり。

世人往々、本條約締結の當時は、吡羅國政紛亂し、海賊横行し、植民地の貿易を妨害せるを以て、英政府の干渉を惹起せりと信ずるは、蓋し植民政府の報告に基けるものにして、事實の眞相を蔽ふ者な

るは、例へはパンコル條約中、ラル地方の爭鬪を以て、一國の無政府と記し、駐在官設立の强迫を、馬來酋長の請願に因るとせしの類を推して之を知るべく、且海賊横行の説の如きは、全然無根なること、先人既に説あり。(Piracy in the straits of Malacca——Sir B. Maxwell)。要するに當局者は、國政干渉の端を開かん爲め幾多の事實を構成し、且本國政府の協贊を得んとに努めたるものにして、彼等か半島土人に對せし策略は、往々深酷非道の誹を免る能はざりき。

(三) 駐在官政治の眞相

パンコル條約締結後殆と一ヶ年、乃明治七年の末、植民政府は其書記官長バーチを擧げて、吡羅國最初の駐在官たらしめ、彼を同國に派遣したりき。

駐在官とは何そや、其職權は頗る曖昧なりき。若しもキンバーレー卿の目的にして、其職務は單に國主の望に應し、國政を補佐するの使節に過ぎさらしめは、其俸給は英政府之を支給し、其進退は一に國主の意に任せさる可らす。而して本國の政府は、其職權を明示せざりしも、クラークの意見に反對せさりしを見れは、其要領を知ることを得んか。

クラーク知事、之か解釋を爲して曰く、駐在官(レジデント)は政務の顧問官(キカンセラー)也、乃ち爲政の大綱を敎へ、殖産の道を開き、歳入の良法を知らしめ、收稅官の適任を定むるに在りと。何そ其法の簡にして、其名の美なるや。若夫れ此政治にして可なりとせは、半島の森林は化して農園となり、幾多生産的人種を吸集す可く、譬へ不可なりとするも、其官職を廢するに過ぎさらんのみ。而るに何故に失敗を招きしか、曰く駐在官其職權を濫用せしを以て也。

此夏バーチは未た赴任せざるに際し、新蘇丹阿房頭郎は、其國の習慣に從ひ、ペラ河道を上下する支那人の貨物に對し、二萬六千圓の往來稅を徵集するの契約を結ひたりしかは、彼はパンコル條約第一の破壞者として、植民政府の譴責を蒙り、其契約は無効なるのみならす、蘇丹は植民府知事の許可なくんは、全く徵稅の權なきことを宣告されたりき。

是れ豈に政務顧問官として正當の處置ならんや。駐在官赴任前に於ける、王と支那人との契約は違法にあらす。好し歐洲人の眼に映せし往來稅なるものは、財政の良法にあらすとするも、從來國主歳入唯一の租稅として、何人も不平を抱かさりし所なり。然るに政府は之を『强盜の劫掠を免れん爲めの賄賂』(Black—Mail)と爲し、ペラ河畔の稅關を海賊の巢窟と同視せしは、(スンギーウジョン國リンギ河傍の馬來稅關も、同一筆法を用ひて保護政略の止むを得さるを本國に上申せり)。彼か馬來王國の情實に通せさりし故か、將た國家横領の口實を這般に求めんと欲せしにはあらざりしか。

此年十二月駐在官バーチ、地方を巡回してビドルと稱する一村落に到りしが、其酋長(ラジャ)ンガなるもの、其領内よりして鑛物稅を徵する由を聞き、バーチは非道にも彼を村外に放逐し、其家を燒き、新坡

『タイムス』新聞紙をして、攻擊の聲を發せしめたりき。

一月三十一日彼はビドより歸り、將に新政を布かんとし、國主に向つて同國駐在官親任狀に王の記名を請求せしが、阿房頭郎は新政の如何なるものなるかを解せず、常に言葉を左右にし其記名を避けんとしければ、バーチは竟に之を植民政府に上申せり。

知事アンヂユー、クラーク、パンコル條約を解釋して、國主の地位と其權利とを說明して曰く、國主及酋長が、一旦駐在官の勸告に從ふ可きを約せしからは、爲政の權總て駐在官にあり、誰か之を犯すことを得へけんや。若しも國主にして該官の除去せし租稅を復活し、又新稅を課さは、是パンコル條約を破るものなりと。而して知事特に全國に布告し、何人も駐在官の文書を有せすんは、決して一切の租稅を徵集す可らすとせり。

彼か馬來國の弊政を打破するは不可なし。然れとも新政の網目中、歲入の新法を明示せさるに於ては、如何に半開の蠻人と雖とも、彼等の財源を英政府の手に放棄せりとの感を抱かしむるものに非すや。況んや政務顧問官の外套を被りたる駐在官の權勢は、パンコル條約の解釋と共に主權者と化し、吾人をして『兩國民の間に結へる條約は、優勢國常に其解釋の權を恣にす』の感あらしむるをや。如此もの、是れ植民政府が爲政の大綱を敎へ、植民の道を開き、歲入の良法を知らしむと約せし、政治的敎訓の第一課なりし也。

本政治の適用は、曾に吡羅一國にのみ止らす、クラーク又之をセランゴール、スンギーウジョンに施し、等しく其口實を國家紛亂海賊橫行に借り、巧に植民大臣を籠絡したりしかば、カーナボン卿は、斯かる難局に處し其功勞の尠からさるを賞し、其後卿は訓令を發して、可成條約の各綱目を實行せしむべしと命したりけれは、クラーク、バーチ等愈々躍起の運動を爲し、新政の勵行に努めさらんや。其極バーチは阿房頭郎に迫りて、新政拜受の記名言葉を換ゆれは、新政を擧けて駐在官の任意にせよとの文書に記名せさるに於ては、廢位すへきことを以て彼を强迫するに至れり。

然るに植民大臣か條約勵行の訓令を發せし眞意は、國政の顧問官をして主權者たらしめんとせし、クラークの政略に全然同意せしにはあらさりしなり。何となれば、此年(明治八年)五月を以て、駐在官設立者として專賣特許の評あるクラークは、印度政府に榮轉し、彼か失計の迷惑を蒙らさりたる後任知事ジエボイスが報告は、本國植民省をして、『深く國政に干涉し、ペラ國主を煩はす勿れ』と云はしめ、七月廿七日の訓令に、『何所迄も斯くは主權者の權力を振はんとはするな。國事干涉なる限りなき責任を避けんには、如何なる方針を取らんとはするな』等の稍々攻擊的質問を發せしめたれは也。

然れとも今や政界の大勢一變し、大臣の訓令を奉して駐在官の權能を論す可き時に非す。バーチは、阿房頭郎に廢位を强ゐんとせり。最早平和の天日を望む可らす。掌を回せば風たり、雨たり、將亦雷霆たり。ジエボイス海峽植民地に來りて、所謂新政の實行を見けるに、英の官人はラル、ペラ、セラ

ンゴール、スンギーウジョン諸國の主權を掌握し、爲政の機關は均しく運轉を始めければ、ジエポイスか取る可き唯一の政策は、ペラの亂調を整理し、是等の機關に油を注くの外なかりき。

難問題は、如何してペラを經營せんかにあり。第一の厄介物を阿房頭郎となす。駐在官の語るを聞けは、彼はバンコル條約に違反し、其傍側には小人あり婦人あり、彼は阿片を嗜み薄志弱行、到底王者の器にあらされは、先つ彼を廢せさる可らす。其次は如何、全然ペラを英領に併呑するにありとす。若し彼をして深謀遠慮の人たらしめんには、現時の眞情を本國に具申し、本國の方針と將來の利害に鑒み、後善の策を講したりしならん。然れとも自ら小クライブを以て任する彼は、時勢は大膽決行の處置を要すと信し、本國の訓令は顧る所にあらす。思へらく、先任クラークが、遺志明を廢して阿房頭郎を立てしは、彼が阿房頭郎を廢して、新主を立つるの先例と爲すへく、併呑の政略は、バンコル條約を勵行するものにして、本國の贊否は成敗の如何に關するのみと。

九月王位相續第二の失意者、愈爭夫を立て、蘇丹と僞稱し、阿房頭郎は屢々植民政府の勸告に反し、條約を破り、植民大臣の訓令に抗し、或は奴隷を虐待する等の故を以て、英政府は到底其位を保たしめすと宣告せり。

試に吾人をして之を評せしめよ。彼に奴隷ありと云ふか、古の習慣を如何せん。彼の傍側に婦女ありと云ふか、一夫多妻の宗教あるを如何せん。彼が阿片を好むは、之を『ウイスキー』又は『ブランデー』を飲む歐人の眼中に、其たはゝもなきの感あらしむるも、回教禁酒國の王侯にして此麻睡を嗜むは敢て珍しからす。バンコル條約は、宗教風俗に干與せさるを明言せさるや。又彼れを條約の破壞者と云ふか、何故に深く他國の內政に干涉せしか。例令彼は王者の器ならさる匹夫たりとも、之を無能者と爲すは、植民政府前年の輕挑輕信を自白するに異ならす。誰か此無能者を好んで蘇丹とは爲せしぞ。

然り阿房頭郎は、駐在官の鑑定に相違なき愚昧の君主なりけれは、ジエポイスは併呑策の眞相を暴露し、彼若し其國土を英政府に獻せは、彼れは終世の年金を得ん、然らすんは廢人たらんのみと、最後の强迫を試みける時は、彼は英國の厚賄を受け、銅色の美人を蓄へ、怠惰の奴隷を養ひ、鈍腦の阿片を飲み、一世を安逸ならしむれは、遙かに廢人たるに勝れるものとなし、嗚亡國の小人、阿房郎は前年英政府干涉の顚末に記名せし其手を以て、遂に亡國の奧書に記名したりき。嗚呼葡萄牙人の專橫を避け、ペラ國を建てたる馬六甲國人の子孫は、再ひ第二の葡萄牙人の爲に其專橫を受けんとするか、危哉、危哉、吡羅の國勢は岩下の累卵よりも危哉。

(四) パサーサラの變

曩に植民府知事クラークが、バンコル條約の結果として遺志明を廢し阿房頭郎を立しかば、志明は植

民政府の專横を憤り、斯かる不法なる條約は、必すや本國政府の意ならさらんことを信し、クラークが哦羅政治の眞情を英國に通知し正義の判決を望まんと欲し、之を横柳島在留の某狀師に謀り、其經費として一萬二千弗を準備せりと云ふ。若も一萬二千弗を賭して、國家の獨立を買收すへかりせは、餘りの高價にはあらさりき。然れとも不幸にして其事成らす、駐在官の强迫に因り、鎮位の止むなきに至りけるか、其餘力は陰然非英政府黨間に重きを有したり。

彼れか幕下に、パサーサラの酋長マホラジヤ、レラと名くる好漢ありき。靈郎性剛毅、夙に慷慨の志あり、常に近隣の壯丁を集めて語りけるやう、英官バーチ若しも我村内に足を容るれは、焉そ彼を生還せんやと。彼等は新蘇丹即位の後、英國の黑船は屢々沿海に出沒するを聞きて、密に不安の念を抱き、パンコル條約は、新地を割きて植民地に與へ、其域内には著名の鑛山をさへ抱有しけれは、何人も新政を惡ませさるはなく、駐在官バーチ又家を燒き、里長を放逐し、暴政日々に熾なるを見、彼を惡むと虎狼の如くなりき。

同年十一月バーチは植民政府最近の公告、即ち吡羅國は自今英政府直轄の地なりとの布告を爲さんとて各地を順廻し、廢主遺志明の故山パサーサラの村郷に入れり。思らく、遺志明何者、靈郎何者、微々たる回教の土民、誰か大英政府の命令に反抗し能ふ者ぞと。然れとも日頃靈郎の頑硬を聞かさるにあらされは、彼か用意せし三艘の船には砲門を裝置し、身邊には雲衝く計りの大漢印度兵をして護衛せしめたりき。

船は早朝パサーサラに着しけれは、戰鬪を準備しつゝ密かに陸上の光景を望むに、更に異情を見す。靈郎智謀あり、陽に温顏を示して駐在官を迎へ、進んて其前に握手の禮を爲せり。バーチの一行は、其夜靜に船中に眠りけるか、翌日は回教の祝日にして、遠近の兒女相集り、壯丁多くは腰間に秋水を横へたり。バーチは某馬來官人をして、政府の訓令を道路の要所に掲示し、國勢變革の事を知らしむへしと命せり。官人酋長を呼ひ、駐在官の命令を傳へぬ。靈郎瞋目して答へらく、蘇丹アブツラは、曩きに英政府の立てし國君ならすや。我既に國君あり、國君未た我に何事の訓令をも下さす、我之を拜受せさる限りは、何人と雖とも村内に布告を掲くることを許さすと。官人曰く、汝須く之を駐在官に言上すへし。靈郎肯せす。官人去る。靈郎一壯丁をして彼に尾せしめ、且告けゝるやう、彼若し掲示を爲さは極力之を拒む可しと。官人河畔に歸り之をバーチに報せり、バーチ曰く、頓着なく直に之を掲示すへしと。即ち官人虎威を借り、傲然として「吡羅國は自今英政府直轄の地なり」との掲示を爲さんとす。壯丁躍りて之を倒す。官人再ひ之を駐在官に報す。偶々バーチ沐浴せり。窓外に首を仲へて曰く、馬人何かあらん、更に別紙を掲示すへしと再ひ前文の亡國狀を掲けんとす。壯丁又之を倒す。官人怒りて彼を擊撃せんとすれは、匕首鞘を離れて飛ひ『アモツク』（打擊）の聲四方に傳はれは、パサーサラは忽ち修羅場と化せしよ。常磐の國に散りし紅葉は、國運の吉か、凶か、失望の勇氣は、

凡夫をして鬼神の如く猛ならしめぬ。流石の傲慢なるバーチも、此急擊に逃るゝ道なかりしかは、彼の裸體は馬來毒汁を塗りし匕首の串刺子、其肉喫はんと計り怨みたる日頃の無念も、晴れ渡れる月の光を負ふて、彼等は椰子樹蓊鬱たる山家に歸り、椰子實より尙大なりと聞きける砲丸の頭上に落來るは、何れの日なるかを待ち居たり。

果して復讐軍は來れり。然れども彼等は復敗軍たらざるを得ざりき。甲比丹インスの率ゆる軍勢は、六十の英兵、水夫、印度備兵、巡査、馬來人若干にして、靈郎の壯丁は、玉蜀黍の蔭鬱に伏し居けるが、敵兵其前を過ぐるを見、突然一擊を加へしに、英軍は其不意なるに敗れ、印度兵体格大なるも用を爲さず、巡査遠く遁れ、士官は馬來語に通せず、甲比丹斃れ、脆くも彼等は敗北したりき。

靈郎既に駐在官を屠り、今此快戰に全勝を制す。左れば後日英軍大舉して吡羅を陷れし時、彼は植民政府が併呑の政略に、一大變動を來たせしとを知らば、彼は國恩に酬ひし者として、地下に瞑するとを得べし。嗚身を殺して仁を爲す道、國の文野を論せず古今其軌を一にす。靈郎の名は、吡羅の子孫が永く忘る可らざる所のもの也。

(五) 吡羅戰爭と其後の政略

兩度の悲報と回教再興の風説は、植民政府をして殆と惑倒愕絶せしめたりき。傳云ふ半島土人大圖と爲り、歐洲人及耶蘇教徒破滅の亂を企てたり。曰く、吡羅の兩主バサーサラの酋長等植民政府に抗する一萬の兵を擧げんとせり。或は曰く、遺志明は七百の精兵を率ゐ、ペラ河傍に七個の砲臺を築き、ラウの酋長、及支那人等六百の坑夫を從へて應援し、其勢七千人を下らざるべしと。檳榔島長之を新嘉坡に報せしかば、東方の事情に暗き新任知事、豈に之を信認せざらんや。彼は事々敬も本國政府に向て、半島永年の陰謀を發露せるの危機と電報し、カルカッタへは千五百の歩兵、砲兵、工兵若干、電線、彈藥を注文し、香港よりは三百の援兵を招き、ジョホール國主は英に同盟を約し、西貢の佛國總督は軍艦を廻送すべしとし、『フライ』、『シツスル』の英艦は海峽に入り來り、政府は全く戰爭の準備整ひたりしに、爰に戰場の一大欠乏を生じたり。欠乏とは何ぞや、敵なきと是なり。政府が聰きし一萬の敵兵は何所にある。回教再燃の風説は何事なりしか。五十哩の電線は何故に張る可き。軍艦は何物に發砲すべき。馬來森林寂として人聲なかりき。然れば大軍吡羅に入り、バサーサラの村郷を屠りしは、恰も牛刀割鷄然たりしもの、所謂吡羅戰爭の實況なりしも、半嶋總擧の說を傳へし、ジエポイス知事が、本國に向ての戰勝の報告は、此戰爭をして事實よりも過大ならしめ、本國政府を促して、半嶋併呑の必要を知らしめんと努めたるにはあらざりしか。然れとも彼の胸算は痛く齟齬し、其政略は本國輿論の大抗擊を蒙りしころ是非なけれ。さなきだに、前年クラークが土人を欺き、バンコル條約を締結せし時、スタンレー卿は上院は於て、クラークの政略は、無謀の併呑策なりと

の攻擊演說を爲せしを記憶しけるに、今此悲報を耳にし、且ペラ戰爭を聞きし英人は、不安の念を抱き、ロンドンの新聞紙は口調を一にし、絕東に於ける植民地の官吏が、國會の協贊を經すして、濫りに兵艦を動かせしの不當を責め、且本國の責任を重からしむるの不得策なるを罵れり。於是乎、千八百七十五年十一月植民大臣カーナボン卿は、直に電報を以て『國土併呑又は政治上の目的の爲め、軍隊を指揮するを許さす』との訓令を發し、續て卿はジェボイス知事の政略を不可とし、毗羅國人にして、若しも英の駐在官を單に國務の輔佐たらしむるをも好まさるに於ては、其設立を廢せん。併呑は勿論假令蘇丹の名義を用ゆるとも、英人は直接國務に干涉すべからずと嚴命し、卿又國內の攻擊に答へて、『植民省が駐在官府の設立は、單に其試驗にのみ止まれり。今や植民大臣は海峽知事に向て、再度國土合同の不可を諭告し、國人の喜はさる行政の强行を爲さゝらん爲めに、軍隊の派遣を禁したり』と公言せり。是豈に半嶋在留英人の野心を挫きし者ならさらんや。然れとも此政略一變の現今に存する結果は、國土併呑の結果に劣らさりき。否寧ろより有効なりしとを保せさらんや。

試に問ふ、當時の英政府が抱きし半嶋政略の眞意は如何。之を其後廿年の英國乃現英政府が、半嶋保護國を聯邦となし、鋭意其經營を計りつゝある點より推測せは、カーナボン卿の此訓令は、或論者の說の如く、國土併呑の名を避け、隱然其實利を收攬せんとの深意なる政畧の如く感せらるゝも、決して其然らさりしとを知る。思ふに英國の輿論は、未た馬來半嶋占領の問題を重要視せす。故に卿の此訓令は、單に馬來王國を合併するも、猥りに本國の責任を重大ならしむる勿れとの、消極的意見に外ならさりき。又卿が駐在官府の設立は、單に其試驗に過ささるのみと云ひしは、其試驗の如何に殘酷なりしを想像すれは、卿が抱ける半嶋保護策は、最も陰險なりしが如きも、其實本國政府は、駐在官の權力が如何なる點に迄膨脹せしかに氣付しは、晩年の事ならすんはあらす。

斯かる事情に因り一變せし半島政略は、本國の訓令に基き、最も平和なる方針を取り來りしと爰に廿年。其間植民政府は、勉めて國土併呑の名を避け、專ら物質的開發を事とし、道路を開き、鐵道を布き、電線を張り、殖產の道を興し、一小蠻國政府の收入を增加せしめ、國人をして猜忌の念を絕たしめんとに努めたり。又政略一變後の植民政府は、馬來國主等をして各其國務を執行せしむへしとの申辭に、立法の機關として國政會議を設立せり。國主を以て其議長となし、地方の酋長豪族を議員となし、駐在官も亦其列に加はるとせり。然れども思へ、鈍腦の馬來人等、如何そ新國土經營の妙策を樹つるとを得へけんや。彼等の職務は、單に駐在官の發議に贊成署名するの外餘事なき多年の風習は、再ひ其權勢を膨脹せしめ、國務輔佐の任務は、轉して行政監督の權と成り、今や其府は南部半島保護諸國の機軸を收攬しつゝ、租稅徵集、山林拂下、道路修繕、文房具購入、月給六圓の小使任免すら、一々其認可を經さる可らさるのみならす、駐在官又人の子か地上に有する最高の權勢、即ち死生の分るゝ恐る可き宣告を爲し得るに至りしも、本國政府之を咎めす、國人又敢て之を怪まさる所以は、

蓋し近廿年東方多年の趨勢は、無能の植民省をして、熱心なる半島經營者たらしめたると、其間駐在官府の稍々寛大なる治政の下に成就せし國土開發の功蹟は、其國人をして政權の暗々裡に移動するを覺ゑさらしめたるに因らすんはあらす。嗚呼陰密なる社會變遷の人心に及ぼす影響も亦偉なる哉。

(六) 馬來半嶋保護聯邦の組織

其後廿年來、ペラ、セランゴール、ヂグリセミラン及パハン(パハンの保護國となりしは千八百八十八年)の諸國は、前述駐在官府の個々獨立に統御せしものなりけるが、英國政府は去明治廿八年來、馬來半島保護聯邦と云へる名稱の下に諸國を連合し、是等の駐在官を統一する重職即ち駐在總官を置き、此聯邦を植民府に隸屬せしめたり。今其盟約の大綱を舉くれは、

(一)從來半島諸國と英國間に存せし盟約を確定する爲め、各邦の主權者及其領邦を自今英國の保護となし、(二)其領邦を連合して馬來保護聯邦を建設し、其政治は英政府の勸告に從ふ可きを約し、(三)海峽知事に隸する英政府の代表者駐在總官を置き、(四)聯邦國主等は此總官に便宜を與へ俸給を給し、回教の事を除く大小の政治は、總官の勸告に從ひ、(五)各邦に駐劄せし駐在官の權能は、此新條約の爲めに變革せさるを約し、(六)聯邦各國は交互の必要に應し、財務及人夫其他各般の補助を與ふるに合意し、(七)英政府が他政府と戰端を開く場合には、其要求に應し兵力を供給し、最後に『此新條約締結の爲め、各聯邦國主が保有し來りし政權は毫も之を減せす、又從來各邦と英國間に存する關係を變更せす』と。

然るに今此新盟約か特に規定せしものを、前年に於ける政略の歴史と對照し來らは、パンコル條約以後曖昧の裡に國權を恣にせし保護政治は、今や明文を以て記せられ、所謂保護國の君主が其頭上に戴きし事實上の君主、乃駐在官の頭上更に高級の君主を戴き、一々其命令を奉するに忙はしく、又英政府が各邦統一の便益に對して、其國利を犧牲として貧弱國を助けさる可らす、英政府に向ての報酬には、兵力の供給をも辭す可らざる等、純然たる領地行政の事實なるに、是をしも尙、『此條約の爲に、各聯邦國主が保有し來りし政權は、毫も之を刪減せず』と云はゝ、英政府をして多少の刪減を爲さしむるの日は、是れ馬來王國無きの時にあらずや、蘇丹なきの時にあらずや。

左れは本條約は明に、パンコル以來幾度か蹉跌せし保護政略を成功せし者なり。然れとも當年の植民府官吏か、一舉して國土併呑を企てしに比すれは、現時の政策は最も進歩し、遙に有效なるを覺ゆ。必すや廿年來の經驗は植民府をして、馬來人種の不生産的にして、將來半島の經營に賴少なきを知らしめしかば、其存亡の如何は顧慮する所にあらず、國土併呑王統亡滅の汚名を遺さすして、更に陰密なる經濟的大勢力を利用し、盛に南部支那人を誘導し、此新國土の經營を欲する結果は、勢ひ人種的競爭と成り、馬來國人を自滅せしむるものなると、必すしも英政府の希望と否とに論なく、現今半島

の大勢は、吾人をして此斷案を下すに容易ならしむるものあり。（第五章參照）

最後に吾人をして、半島の經營は、東方局面の英國に、如何なる關係利害を及ぼすものなるかを一言せしめよ。海峽植民地の地勢は、東支那海と西印度洋の咽喉に位し、南は馬來群島の海門を扼し、平時に於ては航海貿易の要津たり、造船場たり、戰時に際しては艦隊の根據地たり、石炭貯蓄場たるの好地位を占得すと雖とも、若しも半島の經營を半開土人の手に放棄し、統一的機關の具備せざる以上は、一朝有時の日に、他國の占領を免る可らずとせん乎、例令印度の富源あり、支那海の艦隊を備ふるも、其間の交通は斷せられ、海峽の要衝も亦廢地に歸せざるを得んや。況んや晩年英國を促し、其經營を急ならしむる焦眉事件、暹羅問題の如きあるをや。

暹羅問題如何。其發動者の地位に立つものは實に佛國にして、巨人（ジャイアント）の如き彼が、印度支那大半島蠶食の計畫は年々其歩武を進め、曩に暹羅の軍港チャンタボンを奪ひ、眉公河傍濶大の地を割き、若しも時機の乘す可きあらば、彼はラウの平原を長驅して、暹羅王國の中央首會コーラット附近に南下し、此老病國の主權を横奪せずんば止まず。蓋し東方邦國の危機、此土の如きはあらざる可し。而して暹羅の西隣に、英領ビーマの横はるを知らば、此王土の隆替存亡に政治的、及商業的直接利害を波及するは、英國たらずんばあらず。然るに佛國が前年の併呑と實行せしの時、英政府の政略は外硬內軟の不覺を取りしも、佛國が愈々獅子的運動を恣にするに於ては、英國たるもの豈に之を傍觀するを得んや。況んや佛の併呑策に最も優勢の反抗力あるは、英國を除きて一も無之に於てをや。由是觀之、英政府の取る可き對暹策とは、其存亡に全く死活の關係を有す。

東部印度に於ける英國の地位、果して前述の如しとせば、馬來半島の新連合は、國力平均上英國をして、一歩其勢力を上進せしめたるものなり。昨年六月チャンバレン卿は、新任駐在總官スイッテンハム氏の意見を容れ、半島西岸に三百哩の鐵道を布設することを許可せり。必ずや駐在總官府は、國土開發、統一行政の機關を竣功し、半島勢力の扶植を計る可く、其勢力の膨脹する所、半島北部暹羅屬ケダ、ツリンガヌ、クランタン諸國の連合を見るも當に遠きにあらざるべし。借問す、東方英の策士よ、卿等他日半島保護國をビーマの南端と連接し、眉南河傍分割の夢を結ばざるや否や。

翻て極東政界を一瞥す、其大勢は東方印度の近狀に酷似するものあり。極東に日本人あり、露西亞人あり、支那國あり、朝鮮半島あるは、猶彼地に英吉利人あり、佛蘭西人あり、暹羅國あり、馬來半島あるが如く、露人が支那を視る、夫れ佛人が暹羅に於けるが如く、清、暹共に東洋の二大老病國にして、其運命の相似たるものあり。朝鮮半島の面積地勢は、馬來半島に比して如何、回教人の無氣力なるは、韓人に孰れぞ。古來暹人が馬來國に人種的及歴史的關係を有せしは、彼支那人の朝鮮に於けるに似たるも亦奇ならずや。而して日本は韓の獨立と東洋の平和を名とし、其間雄偉の精神を抱懷するは、英人の半島問題に於ける經歴に比するとを得べく、日露の位置たる、又焉んぞ英佛に異なれりと

せんや。然るに英の保護政畧は、我朝征韓論破裂の結果、西鄕南洲をして故山に歸臥せしめたる頃、其端緒を開きしが、我は三國同盟の影響を蒙り、遂東遼附の止むなきに至りし年、彼は人知れすの間に半島聯邦を完成し、凡眼をして其眞意の果して那邊に存するかを感せざらしむ。而も其手段や常に老狡也。嗚呼東方の首班に嚴立し、東亞の經營を以て自任する國民は、英の絕東印度政略に猛省し、願くば戰勝の光榮をして、流星の一時に燦爛たるが如くなるに了らざらしめよ。

第四章　馬來聯邦國勢一斑

○第一　吡羅（Perak）

『ペラ』とは馬來語の『銀』なり、如何ぞ此地を銀國とは名つけつる。史家マースデン氏曰く、初め此地に來りしもの、錫塊を以て銀と誤認し銀地と呼ひしは、傳へて後代の國號と成れりと。

半島中錫の名産を以て稱せらるゝ吡羅は、半島の西沿岸に横はり、北方に馬來國ケダ、英領ウエルスレー州あり、南方にセランゴールあり、東はパタン、ケランタン、ツリンガヌ、及パハン諸國と境を交へ、西は九十哩の海岸線を有し馬六呷海峽に臨む。面積大約七千九百方哩、人口廿八萬を超ゆ。

國の高山をチンギ、ワンサ、グノン、ラル、グノン、ブヅ、グノン、デンギ、ロビンソン山等とし、西岸を奔る山脈は、英領地の後背よりラル地方に起伏し、他の一脈は東南を馳せてパハンの國界を爲す。

國内水利の便に富み、大小無數の河流は國の内部を縱横せり。其長大なるをペラ河とし、キンタ、バタンパダン、ブルスの三大支流注き、其他バアナム、デンデン、ブルアス、ラル、サブタン、ラウ、カリヤンの諸流あり。之を水配上よりせは、國の重要植民地は、左の四大河域に分つことを得べし。

(一)　北部カリヤン地方
(二)　西部ラウ地方
(三)　中央ペラ地方
(四)　南部バアナム地方

一北部カリヤン地方（Krian）。カリヤン河は、吡羅ケダ兩國間を流れ、西方英領地を經て、海峽に注くの巨流にして、上流七十哩なるセラマ鑛山に通し、パリブンタなる名邑は、本河道の便に由り、檳榔港間滊船の來往あり。明治八年以後、本河とクロウ河の間一帶の密林は漸次に開墾され、今やカリヤン地方は全國第一の農園にして、米甜菜の產出年々多額を加ふ。去明治廿九年間政府の下附せし園地は六千百四十八「エーカー」なりとす。住民はピナン、ウエルスレー州移住の馬來、支那、及印度人にして、米は馬來の手に培養され、砂糖は支那人、印度人等之を製す。

一西部ラル地方（Larut）。カリヤン、ペラ兩河間に介し、海濱十哩以東の地域を云ふ。今を去る四十年前、ピナン移住の支那人か、グノン、イジョー山麓に錫坑を開きしより、次第に繁盛に趣きたり。此地英政府か半島の內治に干涉の發端なりしとは、前章に述へたるか如し。ラルは錫產の豐饒なるに加ふるに、檳榔港を去る四十哩の交易地として、現今半島西部の要區なり。ラル地方の如く、海濱に錫の產出あるは稀なりと云ふ。首府をタイピン（Taiping）とす。近傍錫業の中央にして、人口一万四千、國內諸官省所在の地なり。此地恐く錫坑の最舊なるものならん。明治八年來、再度火災に罹り、現今の市街は同十四年の再設に係る。北にカムンチン錫山あり、東はコーラ、カンサ間二十哩の馬車道あり、西ポート、ウエードなる一小港間に、八哩の鐵道横はり、海を去ると十三哩、海底電線は遙に檳榔島に通す。

一中央ペラ地方。ペラ河は半島大河の一にして、其河名の濶大なる平原を貫流し、キンタ、バタンパダン、ブルスの三大流を合し、殆と全土面積過半の地域を灌漑す。源頭をケダに發し、南方直下し、西流迂迴して馬六甲海に入る。河口稍々水淺きも、一百乃至四百噸の小輪船は、四十哩の上流に遡り、荷船は百廿五哩の內地に貨物を運送し、其上流は岩石犬牙の狀を呈し、水勢急激舟程開けす、河の長さ二百五十哩、兩岸所々に馬來村落を點綴す。然れとも テレアンソン港、コーラカンサを除けは、其他の小邑は記するに足るなく、現時錫產地として繁榮なるゴーペン、コータバル、イツポウは、支流キンタ河畔に在りとす。

國の要港テレ、アンソン（Telok-anson）は、下流地方貿易の要區にして、又ペラ鐵道の出發點なり。海を去ると四十哩、港は河の左岸に在り、丹瓦の家屋は年々增加し、現時商民六千を抱有す。蘇丹住居の地をクヲーラカンサとす。錫產の地にあらさるも、風景佳絕の一村落にして馬來天堂の稱あり。物產を米、椰子、果實、アラビヤ種咖啡、胡椒等とす。其他新開地にして、錫產を以て著名なるものを、イツポウ、ベトガジヤ、ゴーピン、カンポア等とし、共にキンタ河畔にありて、ペラ鐵道線路に横はる。

一南部バーナム地方（Burnam）。バーナム河は半島第一の巨流にして、ペラの長流に若かすと雖も、河底深く、幅員濶大、對岸の樹木を煙霞の裡に望む。河を溯ると廿哩にして、サバあり、七十三哩

にして、テルカリあり、八十五哩にして、チャンカ、バータムあり、其間大艦巨船を通すへく、甲板よりバータムを望めは、三五の孤村馬來部落を爲し、『ドリヤン』果樹茂生す。河流を溯ると遠きに從ひ、河の兩傍は池沼數哩に亘り、往々瘴氣の人身に迫るを覺ゆ。クヲーラ、スリムは、河口百卅里の源頭に位する地方長官所在の地にして、東北スリム、東南バアナム二流の會合する所也。更に卅哩の源頭は、歐人の小スイツルを以て賞する絶景、ウル、スリムあり。近年英人、此地に『リベリヤ』種咖啡を植ゆるものあり。

國政は元と國主蘇丹の權内にありと雖とも、パンコル條約以後、英政府駐在官の專權に任し、其後海峽知事シエポイスが、獨立の君主を輔佐するの名義を以て、國政會議を設け、立法行政の機關と爲せしかど、今や馬來聯邦組織の結果は、此會議の決議も、一に駐在總官の許可を經さるべからさるか故に、他日總官府にして聯邦統一、行政一致の目的を以て、更に各保護國に通する高等機關即ち聯邦會議の類を設立せは、此國政會議は畢竟地方會議の性質を帶ふるに至らん。現今の組織は國主を議長とし、駐在官或は代理官一人、馬來土豪六人、支那人三人を以て其議員と爲せり。

官省はコーラカンザ所在の駐在官廳を始め、首府タイピンには、書記官省、支那人政務、裁判、山林土木、會計、會計檢査、郵政電信、鐵道、測地、衛生、監獄、教育、印刷、印度移民局あり、其制概ね植民府に則る。又マタン、ペラ、南部キンタ、パタンパダン、上ペラ、カリヤン、セラムの各地に地方長官を置き、各地の事務を執掌せしむ。高等官は凡て英人にして、之に隸屬する支那、馬來大小官吏を合せは、殆と六百人を超え、兵員は總計一千人、英の士官之を指揮し、其全數の五分四は、印度兵にして、其他は馬來人とす。

明治廿九年度に於ける政府の財政は左の如し。

一歳入總金額　三、九六〇、八七一弗
一歳出總金額　三、九八九、三七六弗

歳入の重なる者を關税(二百萬弗)、禁止税(七十六萬弗)、鐵道收入金(五十萬弗)、地税(廿八萬弗)等とし、歳出は官省費俸給(七十九萬弗)、鐵道費(八十八萬弗)、土木道路開拓費(百卅萬弗)等なり。關税は亞片酒類に課する輸入税、及鑛物輸出税を重要なるものとし、禁止税とは亞片酒類專賣者、賭博公許者等より徴集する税金を云ふ也。之を過去十年前に於ける同政府の財政に比すれは、出入共に二百萬弗の增額を爲せり。

鐵道は官有にして、既成全線八十哩、豫定線路百三十六哩、第一線はラル地方の十七哩にして、海港ポートウエードより、タイピンを經て、ウル、セパンに通するもの、第二線は、キンタ河傍を走るの長線にして、南はテレアンソンより、タパ、バトアナム、カンポウ、コータバル、バトガジヤ、ラハイツポウを經て、チエモルに通する六十三哩なり。然るに政府は、第一線を延長すると西北五十哩、

カリヤン地方を横斷して、ウエルスレー州に至らんとし、又同線路を東方に延長すること三十六哩、コーラカンサを經、ペラ河を横切り、チエモルに出て、第二線と連絡するに着手し、新に國の南部タパより、南隣國セランゴールに通ずる、五十哩の新線路を開設せんとし、既に其測量を終りぬ。以て駐在官府が半島經營に於ける規模の、如何に大なるかを見るに足らん。

國の面積を、略七千九百四十九方哩とし、之を『エーカー』に換算せは、五百〇八萬七千三百六十『エーカー』餘、内二十萬『エーカー』は、政府の下附せし農業目的地にして、六萬七千『エーカー』を錫產地とす。又此地山林局の報する所に由れは、一千尺以上の山地にして『シンコナ』、アラビヤ種咖啡、茶の培養に適する地百四十五萬『エーカー』、一千尺以下の平野にして、リベリヤ種咖啡、茶、椰子、山美、其他熱帶植物の培養に適する地は、五十八萬『エーカー』なりと。左れは國内沃土の全部は、尚無人の密林を蔽ふ。而して駐在官府は、夙に鑛業の國を開くに容易なるを知れとも、地方の繁榮を永續せしめさらんとを恐れ、專ら農事奬勵の方針を取りつゝあれは、歲入の多額たる鐵道、土木、線路費の如きは、重に農業の發達を目的と爲すにあり。

明治廿九年度に於ける貿易額は、

一輸入總金額　八、七一三、九四〇弗
一輸出總金額　一四、二人九、六八〇弗

輸入には、米、亞片、火酒、豕、歐洲製棉反物、砂糖、豆類、支那烟艸、石油、豕油、家禽、牛、鐵器、鹽魚、『セメント』、支那烟花、鱗寸、麥酒、其他雜貨あり。

輸出には、錫及錫塊(千二百萬弗)、赤砂糖、咖啡、香料、蓆艸、椰子實、『プラチャン』樹脂、籐、檳榔子、胡椒、其他天產物あり。

○第二　雪蘭豪（セランゴール）(Selangor)

半島聯邦の一なる雪蘭豪は、前述ペラの南方に位し、南はスンギーウジョンの北境に接し、東は本土の山嶺綿亘として、パハンと天然の國界を爲せり。面積三千二百方哩、人口十六万餘。

英政府が此國と政治的交通を開きしは、千八百十八年、檳榔嶼政廳の代理官クラクフォートが、時の蘇丹と和親の條約を結ひしに始まる。然るに當時の雪蘭豪は、未た一國の体裁を爲さすして、セランゴール、カラン、ランガ河岸に、人口百餘の部落を營みしに過ぎさりしも、其人民はセレブス島『ブキス』族の後裔にして、リヲ島の移住に依り、民性慓悍、往々船隊を組して馬六呷海峽に出没し、銅色人中最も優勢なりしと傳へらる。

國土近年の開拓に係り、其西部の地人煙疎にして、世人の注意を惹かさりしこと多年。南方に沃野あり、吉隆（カラン）と云ふ、此地嘗てヂギリセミラン國の一部たりし所なり。地勢は概ね平夷にして、南方三十

哩、北方五十哩の間、森林茂生し、一望際限を知らす。彼のペラ國の、山嶽隆起し、奔流青巒を抱ひて海に注くの地勢と、趣きを異にするは、分水界を東方に有するに由る。然れ共、海濱を去りて遠くウル、ランガ、ウル、セランゴールの間、若くは香蘭坡の近傍に至れは、万山突如として天空を摩し、高さは七千尺に達するブキテンギの如きあり。更に東北廿二哩、キンチンビデーの山嶺を超ゆれは、二大山脈相接する所、馬來半島を横切る一條の樵路を通し、一脈は正南香蘭坡の後方を馳せて、カランの水源を爲し、他脈は山勢舒々として、十哩の平原を開き、ランガ其邊を流る。山の高さものランギー山に次ぎて、チンベラス山、カンチン山あり。

明治廿四年の調査にては、全國の人口僅に八万一千五百九十二人、内支那人五万、馬來人二万三千、印度人三千五百、生蠻千二百、爪哇人千人、其他少數なる東洋各色人に過ぎさりしか、其後數年間に於ける、殆と十万に近き支那鑛夫の移住を加ふれは、現時の人口は少くも十六萬を下らざるべし。雪蘭豪は、半島保護國中、最も偉大なる富源を有するものにして、輓近拓植上の進歩は、實に驚く可きものあり。此國、中央政府、國政會議、地方行政の組織等、ペラと体裁を一にし、國主蘇丹は有名無實の君位を占むるに過ぎす。全國を分ちて六區となし、各地一員の歐人長官を置き、地方の馬來酋長は、其監督を受くるものなり。

第一區　香蘭坡（クアラ-ルンポル）（Kuala-Lumpor）

第二區　吉隆（カラン）（Klang）

第三區　上雪蘭豪（ウルセランゴール）（Ulu-Selangor）

第五區　上蘭河（ウルランガ）（Ulu-Langat）

第四區　下雪蘭豪（コーラクセランゴール）（Kuala-Selangor）

第六區　下蘭河（コーラランガ）（Kuala-Langat）

首會を香蘭坡と云ふ。聯邦第一の名區にして、國の中央に位し、吉隆港を去る、鐵路一時間以内に在り。拓地輓近にして、萬象新奇、市の面積は廣濶ならさるも、街道寛廣にして、屋宇清潔なり。市街の一方に聳ゆる駐在官廳は、人口僅に十六萬を有する一小回教國が、大金を投して建設せる者にして、最も煥華を極む。其他銀行、病院、印刷場、學校、新聞社、「クラブ」、旅館、水道、競馬場、博物館、遊園畢く備はり、工肆櫛比し、戸々日を追ふて增加せり。市外は地勢高聳にして、巉巖各所に壁立し風景の佳絶云はん方なし。彼のコアバトなる石灰山の洞窟の如きは、蓋し世界の一大奇觀ならんか。東北の峰嶺は翠屏を列ねたる如く、グノンバントの雲汁は、流れて吉隆河の水源となり、浩々として萬頃の曠野を浸す。氣候は終歲春の如く、土壤肥沃にして、果穀の類能く茂生し、錫の產額は半島第一の名あり、其個に建國の大業を謀るに足る、雄偉の地なる哉。馬來半島は一大國と成れり、海峽政府は、此土を卜して聯邦駐在總官府と定めぬ。思ふに其前途は最も多望ならさるを得んや。重なる國產を錫、リベリヤ咖啡、甘密（カンピー）、胡椒とし、商業は左の巨額に達せり。

一明治廿九年度に於ける輸出入金額

輸出	一二、〇〇六、一〇八弗
輸入	九、一三一、一九五弗

錫の産出は、蘭坡附近の地を其大宗とし、全國採掘地積、二萬八千七百五十六『エーカー』、其産額、三十四萬六千六百五十三担(二萬〇三百九十一噸)、喞筒器を使用するもの百廿九、産額の過半は、平均六十五『パセント』の鑛物を含む。塊片と爲し、之を新坡港に輸送し、再ひ之を精製す。本品は、近年市價の下落せるにも拘はらず、ウルランガ地方の所々に新坑を發見し、益々盛況を呈せり。然れども現今の採掘は、概ね舊式にして、其器械的なるは、クチャイに於ける歐人設立の會社、外『トンチル』を穿つものは、スンギープシ地方僅に一二を見るのみ。其他の採掘は、單に地層の上部にのみ止まれり。以て此地鑛産に富めるの一斑を覗すへし。咖啡は近年に及ひて、歐洲人の培養する所にして、其園地總計四萬七千『エーカー』、内一萬〇八百廿五『エーカー』は既墾地に屬す。又支那人、瓜哇人、馬來人等にして從來の土地所有習慣に依り占有せる農園は、明治廿七年に二萬五千『エーカー』なりしが、今や殆と六萬『エーカー』の廣さに及ひ、咖啡の外、各種熱帶生産を培養せり。過去廿年來の雪蘭豪が、是等殖産上、驚く可き進歩を爲せしは、固より國土豐饒の故とは云へ、亦保護政治の功蹟を沒す可らざる也。即香蘭坡なる錫山の中央部を開拓して、美なる邦土を建設し、此地を中心として大に四方を開き、道路を通し、橋梁を架し、林叢無人の地より金を掘り、又金の生る樹を植ゆるに餽意なり。鐵道は全線七十哩、復線ならざるも内地の聯絡に便なる可く、年々の利益は、積んで後年の擴張を謀るに足るべし。南方の線路は、ポード、スンゲープシの坑山に入り、尙進んてチギリセミラン國の本線と接續せんことを期し、第二線は、西方バトリン、バトテガを經て、吉隆(カラン)に出て、今や十四哩の下流クヲーラカランに達せり。北線は、コアン、ラワン、バンダバル、スランダ、ラサ等の新坑植民地を經て、クヲーラクボに通せり。此地蘭坡市を去る三十八哩、其北方には二條の道路あり、一はアンパンパチャ、スンゲーゴモを經、ペラ國境に到るものと、他はセマンガの山路を經て、吧坑(パハン)國の金坑ラウブ(Raub)に通するものにして、本線路は半島東西の兩部を連接する、最も必要の通路なり。既に政府は百廿五萬弗の費用を投し、本道路を延長し、クヲーラクボより、吧坑國の中央クヲーラリピスに達する、八十哩の車馬道を通するに着手せり。思ふに今後將に五年を出てすして、駐在總官府は必す此間の鐵道をも完成し、天放無主の財源を開き、隣邦各地と交通を便にし、着々聯邦組織の完備を期することならん。借問す、雪蘭豪の將來如何。曰く錫坑平野に盡き、山地の採掘は其收支相償はさるに至らんか、咖啡花亂れて雪の如く、三千方哩の深林は、化して半島第一の農園たらんことを是也。

第二區を吉隆(カラン)とす。地味膏肥にして農業に適し、香蘭坡に次くの咖啡園あり。面積大約一萬五千『エーカー』、既墾地二千三百『エーカー』、栽園の大なるものをローランド、セパン、コルデンホープ及ひ

ビューモン等とす。リベリヤ種は樹性頑强、丘陵平野の分なく、蓁々暢茂し、既に毎『エーカー』、六担以上の收獲あり。園主は歐人の大資本家外、支那、瓜哇の小農各地に興り、昨年政府の競賣せし地價は、意外の好況を示し、且政府は先年當國農業協會の建議を容れ、印度人の自由勞働を計りしより、資本家は更に低廉の勞力を利用するを得るに至れり。其他の熱帶植物には、椰子、胡椒、西穀、甘密あり。拓地の業一進して、灌漑を便ならしめんには、吉隆は一大米田を開くことを得ん。

港を吉隆と云ふ、同名の河を溯る十四哩の所に在り、人口五千、國內唯一の要港にして、新坡、檳城、ペラと流船の來往頻繁なり。河底深くして碇泊に適し、東は鐵路二十二哩にして、香蘭坡に連る。港の繁昌は蘭坡の鑛業に關し、蘭坡の發達は吉隆の便に由る。而して今や政府は此間の鐵道を、海濱の地クヲーラカラン（Kuala-Klang）に延長し、大洋航海の流船をして、寄港せしむるの埠頭を開かんとせり。

第三區を上雪蘭豪地方とす。蘭坡を除けば、此地錫の產出大也。ラワン、スランダの舊坑は、近年錫の下落せるにも拘はらず、好況を呈し、ラサ近傍には、五千人以上の坑夫を使役し、併村は變して東北鐵道線に沿える要區たらんとす。歐人の此地に咖啡を培養しつゝあるもの二名、園地六百四十『エーカー』、伐木の聲丁々たり。スランダ及コーラクポの村落も、近時其外觀を改めたり。クポは鐵道の東北極、又ペラ、パハン兩國道の出發地として國の邊要たり。

第四區下雪蘭豪は、純然たる農業地なり。政府は速に測量を完成し、土地を公賣に附せんとせり。歐人の此地に農園を開かんとするもの五人、面積三千『エーカー』。地勢坦夷にしてバアナム、セランゴール兩河の間に蹈り、無人の密林を被る。思ふに此地開墾の先鞭を著けし者は、必ずや勤勉なる支那の甘密、胡椒農夫ならん。道路海に沿ふと九十哩、別に三十二哩の新道は、ラワンに向はんとせり。

第五區上蘭河の山地は、近年鐵道の布設に由り、地價を上騰し來れり。滊笛一聲、寒山野猿を驚かして、カヂャンの內地に到るを得べし。歐人はンコの近傍に農園を開かんとし、從來運輸不便の爲めに失意せし支那企業家は、此機に乘じ山河を跋渉し、大に新富源を開かんとせり。

第六區下蘭河は、國內多數の馬來人口を抱有する區域にして、地味はクヲーラ、セランゴールに劣らざるも、新開の事業は一歩を讓れり。昨年開墾のリベリヤ種咖啡園千五百『エーカー』あり。胡椒、甘密の產地は、セパン地方を最大なりとす。二品の產額は、一昨年來四分一强の增加なりと云ふ。

蘇丹の住地をジャグラとす。蘭河に臨み、ジャグラ山に對し、勝景の一閑村なり。蘇丹は、當年八十以上の高齡なるも、身心壯健、每歲此地の國政會議に臨むと。國庫富裕にして餘年を樂む者の如し。

王子をラジャムダと云ふ。近隣廣濶なる椰子樹園を開き、馬來人の產業を奬勵することを努めり。

ジャグラは吉隆港を去る十六哩餘、東方の畦道は、開けてセパンに達し、セパンは遙に二十六哩の地レコと聯絡し、沿道の茅屋は丹瓦の農舍と成れり。左れは此間の道路を利用し、生產の業を營まん者

は誰。果して蘭河の桃源に春眠を破りし國人馬來は、鎌鍬を手にして、此國土新開の機運に乘じ、殖産人種の列に加はることを欲せざるか、否々。彼等は怠惰なり、無慾なり。即十圃の收入を增す者は、十圃の贅澤を爲すに過ぎずして、貯蓄の精神に乏しく、自ら富める國土に在りながら、好んで貧しき境遇に甘んぜり。故に駐在官府が建設せんとする鐵道も、鈍腦の馬來酋長が立案せし章程も、恐らく其國人を利するものにあらずして、彼等が前途に横はれる人種競爭の恐る可き結果は、只た「零落」「自滅」ならんのみ。

○第三　ネギリ、セミラン聯邦 (Negri Sembilan)

半島西部の大山脈漸く盡んとするの邊、英領馬六甲の北方に當りて、モア、トリニン兩河の上流に跨る三千方哩の地域を、ネギリ、セミランと稱す。此語九個の國家を意味せり。昔はカラン、スンギー、ウジョン、ゼンブ、ジョホル以下五州を總括し、個々州長を撰擧して、之を『ベンダール』と稱へ、州長等又スリメンツリの豪族(司馬大來メナンカボの酋長)を、其王者と戴きしが、國内屢々擾亂あり、九州統一の業全く廢れ、諸國相反目し來りけるか、去明治廿八年、英國政府は馬來保護聯邦を組織するに及び、

(一) スンギーウジョン (Sungei Ujong)

(二) ゼンブ (Jelebu)

(三) ジョホル (Johol)

スリメンツリ又はウルモア (Surimentri or Ulu muor)

ゼムポール (Jempol)

テラチ (Terachi)

グノンパサ (Gunong Pasir)

イナス (Inas)

ゲメンチェ (Gemencheh)

(四) レンバウ (Rembau)

(五) タンピン (Tampin)

以上の地方を合一して、新にネギリ、セミラン聯邦を作り、再びスリメンツリーの豪族を戴して其盟主と爲し、之を更に大なる馬來聯邦の下に連合せり。然れども此諸國中、既に英國保護の下に駐在官を戴くものスンギー、ウジョン、ジョホルの如きあり。スンギー、ウジョンは、英領馬六甲の西北、リンギー河口よりセベン河に跨る一帶の地にして、東北は綿々たる山嶽を以てゼンブ、レンバウに界し、面積六百方哩、人口二萬五千。地勢平夷にして水澤多く、蕃薯樹、咖啡、椰子、「ランニ

ナ」の培養に適し、錫はアンパンガンの近傍より採掘す。馬來人は山地に住して概ね農事に服し、支那人最も勤勉なり。港を德申坡（ガーデクソン）と云ふ。西方ウエルド島を扣ゑ、波靜かにして、五百噸以下の輪船を容易に碇泊せしむへし。港を去ること廿四哩、鐵路北進して、セランバンなる名邑に入る。此地駐在官廳あり、近傍鑛業四通の要區に當り、北はウエルスレーより、南は馬六呷に至る、半島沿岸の一驛たり。

河流をリンギーと云ふ。古來著名にして、四十哩の交通を便ならしめけるが、近時河口塞り、僅に十二哩の航路に短縮せりとす。物産の重なるものを、錫、リベリヤ咖啡、胡椒、大薯粉、其他天産物等とす。

ゼレプウ國は、スンギーウジヨンと、パハンの間に介する一千方哩の地域にして、地理學的には半島東部に屬するものとす。名流をツリヤンと云ふ、パハン大河の支流にして、國内唯一の河道なり。明治十六年以前に於ける此地内部の擾亂は、漸々國勢を萎微し、人民を離散するに至りしかは、國主は内治の整理を新嘉坡政府に謀り、地方官を聘するに及ひて、財政整理し、殖産の業其緒に就き、民人再ひ來集し、現今は各地錫坑興り、殆と四千以上の坑夫を移住せしむるに至れり。首府をクヲーラカラワンとす。セレバンを去ること廿三哩、車馬の通路國の四境に開け、半島西岸を連絡する一大道路の要衝に在りとす。

國産を錫、大薯粉（タピオカ）、甘密（ガンビヤ）、皮革、「ダンマー」樹脂、籐、樹油、天産物とす。明治廿九年度に於ける聯邦府の財政及貿易額は左の如し。

一　歳入	五五五、三二九弗
一　歳出	五七三、五六九弗
一　輸入	二、一二三、五七二弗
一　輸出	一、二三四、七八七弗

○其四　吧坑國（Pahang）

保護國中最大のパハンは、半島東岸、北緯二度四十分より四度卅五分の間に跨り、東は蒙々たる支那海に面し、海岸線を有すること百三十英里、クマヽン、タングン南河の源頭たる山脈は、ツリンガヌ國の境界と成り、エンドウ河を以て南はジヨホルに接し、西は千山萬嶽を以てゼレプウ、雪蘭豪、吡羅に交り、國の最長なる部分は、南方エンドウ河の上流より、ペラ河に亘る二百哩以上の所なりとす。面積一萬方哩を超え、人口僅に七萬に過ぎす。

國の大河をパハンと云ふ。上流はジエリー、リピスの二大河を合し、南に向て流るゝこと一百哩、更にセマンタン、チエライ、ルイ等の支流を合し、全國を南北に横斷して、東支那海に注く。河に沿ふて

幾多の馬來村落を存すれとも、河傍を除くの地は蠻人「サカイ」の巣窟ならすんは、其大部は荒茫無人の密林ならんのみ。河口に首府北干(Pekan)あり、絹及蓆の産地にして、セヤンタン河傍には、チエノール、テマロウ、ブラウ、タワアの小邑あり。上流パハンには、クヲーラ、リピスを地方の名邑とし、ラウブ、ペンジョム、セレンシン等の金坑新開地あり。

吧坑か國土の疆大なるに拘はらず、新人種の移住少なくして、殖産の業甚た遲々たりしは、交通不便の原因に外ならさる可し。國の財源は海を去ると遥にして、容易に進取す可らす。若しもパハン河道を溯りて、中央首會クヲーラリピスに行くとせんか、河口大なるも水底淺ければ、大船を通す可らす、春潮堤に溢るゝの候を待ち、舟を展ふもクヲーラリピスへは、早くも四十日或は二ケ月を要するあり。道を西隣雪蘭豪に取るとせんには、半島の峻嶺を通過せさるを得す。交通の不便は、其影響の波及する所、彼等國人をして頑冥無智の遊民たらしめ、土酋各地に割據して、互に蠻勇を闘はしむるに了れり。然るに明治二十六年駐在官府は、土民暴舉の事あるに乘し、植民府の軍隊を率ゐて、國の内部を平定し、同時に巨萬の資金を投して、雪蘭豪國北部鐵道線の終點、クヲーラ、クボよりクヲーラ、リピス間、八十哩の新道を開設するに着手し、將に明治三十二年を期して其功を收めんとす。必すや此新道路は、他日半島聯邦政府が、鐵道布設を目的とするものにして、同時に今の首府北干は、其駐在府をクヲーラ、リピスに移すとなるならん。

試思せよ、新道成り、鐵路横はり、リピス駐在府たるの後を。數年を出てすして、現時の人口に倍殖すべきの吧坑國は、竟にセランゴールを凌駕するの新開地たらんと必せり。何となれは、道路及鐵道の布設は、現今海峽市場に三倍せる物價と勞費を均一ならしめ、運輸を安全迅速ならしめ、英政府の保護を多量ならしめ、資本家の歡心を買ふ可らしむるとせは、地質學者の多年唱道し來れる、此地ラウブ(Raub)より、セレンシン(Selengsin)を經て、北方ツリンガヌ(Tringanu)に連ぬる硅石、黄金脈及其間に埋沒せる各地の砂金層は、幾多富の探撿者を吸集するや明白なれは也。

國産を金(三十萬弗)、錫塊(廿六萬弗)『ガル』樹、樹脂、籐、木材、水牛皮、象牙、椰子干肉、其他林産物とす。

左表は此國進歩の一班を示すに足るへし。

歳	入	歳	出	輸入	輸出
明治二十三年	六二、〇七七弗	二九七、七〇二弗		弗	弗
仝　二十四年	七七、三八六	二三八、一七四			
仝　二十五年	五〇、〇四四	二七一、三九三		三四一、六七三	三三一、一九六
仝　二十六年	八三、六八八	二八二、二三五		三六三、八三四	三六七、五五五
仝　二十七年	一〇〇、二二〇	二四九、一二〇		七八七、八五九	六五九、六五三

仝　二十八年	一〇六、七四三	二三一、九一三	九四六、四九七	七七五、三一三
仝　二十九年	一六〇、九四七	四六二、六一九	一、一八〇、一八八	八六五、二八〇

○第五　半獨立國柔佛（ジョホール）（Johore.）

（地理の便宜に依り本章中に此國を編入す）

柔佛は半島の南極部、北緯二度四十分以南、ルーマニヤ岬に延長し、其間東西兩海の小島を抱括す。面積殆と九千方哩、入口二十萬餘。國土三面は海に臨み、北に英領馬六甲ジョホルあり。エンドウ河を境して吧呟（パハン）の南部に接す。

國内の三大河を、モアー、エンダウ、ジョホルとし、バトパハ、セヂリ之に次く。地勢は概して平坦に、して、北方諸國の如き累々たる山嶽を見す。只たチムトン山（三千尺）の一帶、國の首脳にして、ジョホル、チゼリ、バトパハ諸流の源頭たり。又國内の秀嶺を、グノンレダンと稱す。海を拔くこと四千百八十六尺、モアー河其東を流る。國の大部は翳鬱たる深林にして、未た人跡の到らざる地多く、縱に海濱河畔の地に、微々たる馬來村落を散見するのみ。

首府をジョホバル（新柔佛）と云ひ、蘇丹王國の都會なり。新柔佛の名は、蓋し舊都（ショホ、ラマ）に對するの謂にして、舊都は第十六世紀の初頭、葡萄牙人の馬六甲を陷れし時、殘民兵を擧けて敗れ、逃れて此地に集り、國をジョホールと號するに起原せり。同名の河を溯ると數里の内部に在り。新都は新嘉坡を去ること僅に十四哩、市街は柔佛海峽に沿ひて連り、人烟稠密にして、白亞の建築、丘陵と昇降し、王宮あり、軍營あり、砲臺あり、土地閑雅にして、空氣極めて清冷なり。若しも新坡の紅塵を避け、此地に遊はゝ、恰も仙境に入りたるか如く、海峽を距てゝ遙に新坡島を望めは、ブキチマの青巒は、隆然として雲霞の如く聳え、曾て斧聲を聞かざる天荒の樹木は、岸を縫ふて繁茂し、水土相亂るゝの邊、白砂連り、幹骨を現はせる枯木は、稀に之を數ふへく、海峽水暖かにして齋亭し、白帆其間に來往あるあり。此地是れ熱國旅客の散策を試ひ可き地なり。

國政――柔佛は馬來回教國中最も進歩せしものにして、先君蘇丹アブバーカーは夙に賢明の名あり、嘗て日本並に歐洲を巡視し、親しく東西の事情に通したりけれは、奮て開新主義を取り、最も殖産の業を奬勵したりき。固より嵎爾たる一小國に過ぎされは、其軍備の如きは、殆と兒戯に類し、一朝有事の用を爲すに足らされは、植民政府の保護を仰く可きは當然たりと雖、形骸的には獨立國の体裁を存し、政体は立憲君主制にして、凡ての政模を英國に則れり。故に其行政組織の如きも、上來所述の聯邦諸國と殆と一樣なり。

國政會議は、立法行政に關する國家一切の必要なる事件を討議し、又高等裁判所を兼ね、其決議は國

王の裁可を經べきものとす。議員は國内の貴族（ウンコ）、又高等官（ダトウ）より成り、他の保護國の如く外國人を混せず。國庫の収入は地税、免許税、印紙、火酒、亞片、賭博專業税等を其重なる者とし、農産物よりは、其價毎百弗、二分五厘を徴集す。

國民及産業――全國總人口を略二十萬とし、馬來は三萬五千、瓜哇は一萬五千、殘餘の多數は概して支那人なりとす。彼等は順良に馬來王政に從ひ、農業に服せり。『カンピヤ』、及び胡椒の栽培は其專業にして、資本は新嘉坡頭家（タウケー）の投ずる所なり。近年歐洲人の資本家にして、西穀、咖啡、茶、椰子の類を、新都ジョホバル近傍、バトパハ、コンプ、ブライ、バンチ、ペンゲランの各地に試み、何れも好望なりとす。樹脂の採集は、從來國産の一なりしが、近時は殆と採盡し、木材の如きも、著るしく其額を減せりと云ふ。現時の主なる國産は、精良の甘密（カンピヤ）（半島第一）、胡椒、西穀（サゴ）、天産には、木材、籐、『ダンマー』、少量の錫あり。

穆坡（モア）（Muar）

柔佛の西北部にして、バトパハ河以北、馬六呷國界クサン河間に亘る、一帶の沃野をモアと云ふ。將來國中第一の農業地たらずんばあらず。名邑をハンダマハラニとす。地方廳の在る所にして、開港十三年、モア河の南岸に位し、人家稠密なり。市内には水道を通じ、又鐵道の布設ありて、八哩の南バリジャワに達し、バタン地方の産物を運送して、穆坡の商船と聯絡を通せり。

バタンは、バンダマハラニを去りて、南方ブキモールより、バトパハ河の地方を總稱し、東西十哩、南北卅哩餘、溝渠縱横し、檳榔椰子の園一望際涯なし。更に鐵路南進し、バトパハの内部に通ずる日來らば、國産を增進するに至らん。モアと新嘉坡間には、百噸内外の輪船四艘常に往復し、馬六呷港を去ること三十哩、陸路にはクサン河を超え、八哩の車馬道横はるあり。而して内地東部の交通は、一に穆坡河の便に依る。

穆坡河は、半島西部に於ける大河の一にして、源を子ギリセミランに發し、柔佛國の小ナイル河と爲り、幾多の馬來村落を抱ひて西馬六呷海峽に入る。上流水勢緩にして、地沃へ、樹木繁り、所々に新開農園の起らんとするものあり。河口水深からざれども、排水十尺の小滊船は、六十哩を溯りて、ブキ、クボンに達するを得べく、荷船は更に二十哩の上流スガマ地方に、新坡輸入の食料、器具の類を運び、甘密（カンピヤ）、胡椒、咖啡、果實を滿載して、再ひ新坡に返る。此地の商業は概ね支那人に屬し、内地農家の需要に應するを專とし、小數なる印度人は、埠頭に雜貨の類を販賣せり。市街の一方には器械鋸工場ありて、盛に板材を製出せり。近時人口の增殖に從ひ、棘瓦の需要一時に增加しければ、所々に製造場起り、從來の椰子葉家屋は、漸々其面目を改むるに至れり。

産物はバタン地方の檳榔實を第一とし、穆坡河畔の地方よりは、胡椒、甘密（カンピヤ）を初め、西穀（サゴ）、大薯粉（ビンタカ）を出し、馬六呷に界するクサン地方には、少量の米、及胡椒、甘密、大薯粉、咖啡等あり。錫はブキモ

ールの邊に少額を產し、グノンレタン山は、古來金山の名あるも、現今採掘を爲すものなし。左れは柔佛國政府は、保護國の如く、一國の財源を錫產に仰くことを得されは、專ら意を農業の奬勵に注き、一般農民の移住を希望するもの〻如し。故に裡坡河傍荒蕪の原野は、追年開墾に進み、近時歐洲人にして『ラミー』を試培するもの起れり。今一層の注意を米作に與ふれは、ケサン近傍高頃の沃野は、半島無比の良田たることを得ん。

ブキケボンを去る一哩の地、ジャポニカと稱する所に、愛知縣人石原哲之助氏、明治廿九年三十名の農民を率ゐて移住せり。氏の目的は咖啡培養を專とし、傍ら米穀野菜の類を以てせり。米田はドリャンチヨンロン、及上流スガマ近傍に之を試みしに、一昨年來再度の水害を蒙りしも、氏の非常なる熱心に依り、咖啡國は四十「エーカー」以上を開墾し、米作の如きも亦今年は意外の好結果なりしと云ふ。同氏の報告は、卅一年四月發行植民協會報告第六十號に詳かなり。同地方米の概況は、本書附錄植物論の部を參照すべし。

第五章　半島支那人論及半島の將來

支那は商業界に於ける世界の一大生產地たるのみならす、亦た勞働者の一大供給國として著名なり。歐洲の資本家は、支那の勞働者を殆と人類と認めす、寧ろ一種の動物として、其廉價なる賃錢と勞力を利用し、彼等を呼んて無賴苦利射（ブラックイー）と云ふ。宜なり、利益の存する處、其の米國と濠洲に論なく、法律の許さん限りは、何れの僻地と雖も至らざる隈なく、近五十年來、次第に其輸出の增加を見る、實に非常なりと云はざる可らす。彼等は東方亞細亞にありては、印度以東、馬來群島何れの島嶼と雖とも、殆と移住せざるの地なからん。吾人は曩に日清戰爭により、支那人種の眞性實力を了知し、事新らしくも、彼等の狀態を論するの要なきか如きも、我が今特に半島支那人と題し、讀者の一考を煩はす所以は、彼等か本國に於けるよりも、其他の外國に於けるよりも、平和を有し、自由を有し、特權を有し、智識を有し、敎育を有し、一種の風俗習慣を有し、而して又生產上の大勢力を有すれは也。若夫れ海峽植民地をして、純然たる英人自らの植民地ならしめ、彼等か子々孫々の繁昌を計る者ならしめんには、支那人は米國又は南濠洲に於ける如く、下等勞働者の競敵として怨まれ、必すや同樣の取扱を受けたりしならん。然れとも半島の植民地は、英國人種の植民地ならすして、純然たる商業上の共和國、而も英國は其商權を收ひるの政策に止まれは、異人種の移住を拒ます、彼等か自國の政權

に服從する限りは、喜んで彼等に自由と平和を與ふ。

英國既に此自由の招牌を極東印度に掲けて、南洋の遺利を收獲せんとす。夫れ水は高きより低きに流れ、需要は供給を促し來る。而も支那は三千年來の舊國、人口溢るゝ計り、何物か此新開地に向つて其移動を防かんや。支那勞働者の馬來群島にはけ口廣きは、猶日本製「マッチ」の販路廣きか如く、其報酬は實に低廉なり。低廉是れ經濟界の一大勢力。吾人は先つ此の勢力よりして觀察を始めざる可からざる也。

○其一　出稼人

馬來群島に於ける勞働者の需要は、無限にして洪大なり。馬來半島、司馬太來、瓜哇、ボルネヲの到る處、鑛業、農業、即ち金、錫、大理石、米、咖啡、胡椒、甘密、巴蕉樹、烟艸、甜菜の諸業は、永久にして、資本家の自由なる開拓に任し、而して支那人は實に其適當なる勞働者なるのみならず、其他一切の新開地に必要なる事業、即ち鐵道、道路、建築、製造の凡ては、彼等の手を借らずんば、群島に於ける生産上の事業は、永く荒廢に歸せん。今最近五ヶ年間、英領海峽地方に於ける勞働契約者の登錄を見るに、其數平均毎年五萬人を超ゆ。是れ僅に英領植民地に限れる出稼人の一部なる、契約勞働者の數計に過ぎざれは、植民地外の各所に移住せるもの、若くは登錄を經ざる其他移民の老幼男女を打算せは、年々十五萬人に下らす。半島の開けしより今日に至る迄、彼等の子孫は毎年繁殖し、支那人は現時半島總人口の六割以上を占め、群島市民の八分は概して支那人なりとす。商業も彼等の占有物なり。行政の大部も彼等を目的として執行せられ、法庭、警察、監獄、又彼等を以て充滿すれは、政治上の主權こそ英國政府に屬すれとも、海峽植民地の如きは其實、支那人國なりと云ふ可し。

總して移民と稱する者の多數は、廣東、福州にして、潮州、海南、客籍（ハッカ）の三籍之に次き、所謂出稼人なる者には農夫あり、坑夫あり、人力車夫あり、船子あり、石炭擔夫あり、大工あり、左官あり、石工あり、足人あり、「ボーイ」あり、所有社會の勞働者ありと雖も、均しく彼等は四肢のあらん限り、如何なる賤業をも厭はす、苦利射の名、豈に其れ空しからんや。呼んて新客と稱するは、此の勞働を目的として渡來せし新參者の謂にして、彼等は卑賤の文盲漢のみ、新客群を爲して、先つ海峽植民地に集る。而して新嘉坡は、實に其大口入屋と知られたり。

抑も新客（シンケー）如何して渡航し來れる、清國政府は渡外者に旅券を與ふることもせす、寧ろ渡航禁止の國柄にあらすや。然り、清國政府は自由渡航を許さす、彼等は凡て密航者なりとす。然るに南洋事情に通する開港場の出稼周施人、或は密航誘拐者は、出稼人招集なる營業の、多額の報酬を得ることを知る者なれは、竊かに要路の官吏に賂し、公に多數の密航者を募れり。百方利を說きて幾多魯鈍なる男女を誘ふ。其心腹の黑船中に入りし者は、既に高價なる周施料と船賃とを頭割りせられ居るなり。而して

是等新客を率ゆる者を客頭（クイトウ）と云ふ。客頭の不正なるに至りては一種の人身賣買者にして、彼等を數千里外の異郷に賣付け、其困窮と無智とに乘し、多額の金錢を貪るを常とし、清國官府は惡魔の如く之を恐るゝも、政治の腐敗は遂に此惡弊を生せり。去る明治二十五年、海峽植民地知事『ザー』セシール スミス氏が探知せし此種の事件の如きは、埠門より數百の勞働者を誘拐して、亞非利加ザンジハルに密輸を企てし者にして、彼等は一萬弗以上の罰金に處せられたり。誘拐者の弊害、其劒呑や如此も、之を植民政府現時の政略よりせは、此方法を以て、移民の大多數を輸入するを眼前に認るからは、素知らぬ顏して現時の成行に放任する他方には、誘拐者を凌御し、勞働者をして虎狼の齒牙に懸けさらしむる義務を負へり。即ち勞働人保護は、植民政府行政の必要なる其一にして、華民政務司の事務の大半は是なり。移民を乘せたる滊船の新坡埠頭に着せは、檢疫あり、新客取調あり、被誘拐者送還法あり、宿屋取締法あり。新客執業の日來れるとせんか、雇主と勞働者間の必要なる各種の契約は、公簿に登記して、保護官之を監督し、若しも雇主にして過法の取扱を爲せは、法律之を罰し、一切の不平は、自由に之を上訴するを得、病者療者は適意の保護を受けて、本國に送還さるゝ等、着後の方法に至りては略行届けりと雖も、更に上策たるは英、清兩國政府か此種の移住民に關する特別の條約を結ひて、清國政府は初め自由渡航を許し、兩國政府合議の上、移民事業をして純正なる會社組織と爲し、兩政府の認可を經たる一大會社を、香港、厦門、汕頭、新坡、横城の各地に設け、新嘉坡を其本部と定め、役員は政府之を撰定監督し、誘拐者に換ゆるに正當なる『コンミツション、エジエント』を以てし、周旋料を一定せしめ、移民に關する旅宿取締を嚴重ならしめは、從來の惡弊を拂清して兩國の利益を增進し、更に數倍の良民を輸入し得べしとの意見は、屢新坡保護官と清國領事の間に往來せり。若此意見にして實行さるゝに至らは、馬來半島に於ける支那人の繁華は日を期して待つべき也。

以上の事情によりて募集されたる苦利射新客は、公然の密航者なりとせは、多少の教育を有する良民は決して來らじ。支那海外渡航者の大部は、目に一丁字なき無學の赤貧者のみ。彼等の魯鈍にして暗恐なる、事理の何者たるを辨せざる、其の理想の野卑なる、彼等は最も憐む可き社會の人間のみ。乞ふ、其貧乏氣たる風采を見よ。新客の彼土に上陸するや、左も熱帶通なる如く殆と丸裸なり。寒國なれは、重衣の用意もこそ、丸裸にして差支なきは新客に取りて熱國の賜物なる哉。思へ、如何なる下等の我國の出稼人なりとて、海外の渡航に、柳行李の一つ位携へさるものはなきに、彼等の財産は身に纏へる布衣、短裳、竹皮笠、枕、箪、下駄、食椀、箸、垢染みたる包一個、其『ステツキ』とも思しきは、最愛の長烟管にして、其風采の奇異なる、左も我國の乞食然たる人、如何なれは海外出稼を思立しやは、最も見易き道理にして、彼等の初め本國にあるや、其生活の程度は、我國よりも遙かに低く、一介の豪士と云はるゝ地方先生すら、偶々近縣旅行の用意金に、一厘錢の珠數連を腰間に帶ふると、猶我封建の武士か、大小を横へて東海道中に於けるか如く、千里の遠程、諸拂差支なきの國柄

にありては、一圓銀貨など手に觸れさる新客組は、彼等の船賃を支辨せられ、勞働契約成るや否、一時に十圓以上の大金を前借し、少くも一ヶ月五圓の給金に封せらるゝとせは、彼等就んぞ喜ばざらん。や。新客躍りて苦利射の門に入ると云ふ。

新客年を重ぬる三年又は四年、老客（ラウカイ）と稱せさる其間、一月白銀數枚を目的とし、二六時中其汗血を炎天の下に注き、契約の日終へ、負債漸く片付き、初めて自由の身たるに至れは、彼等は何所に行くも勝手なり。妻子を本國に有するものは歸國を企つるあり、或は小金を貯へ、他の職業に就くもあり、或は不相變の素寒貧もあるなるべしと雖も、彼等は本國に於てこそ安直なる生活をも爲し得べけれ、新開地の物價高き地に在りては、如何して此安直なる給金に生活し、滿足し、而して又貯蓄し得へきやとは、其人力車夫たると、人足たるに論なく、凡ての下等社會の支那人問題に起るへき、最初の疑問なりとす。

若夫れ、吾人か此答案を得んと欲せは、暫く支那町見物を要す。事少しく枝葉に渉るの嫌ありと雖も、南洋植民論の將に起らんとする今日、東亞生産界の一大勢力たる支那人の本營、乃下等社會の內幕を視察するに於て、讀者をして厭倦の念を起さしむるに値せば、本書の光榮は之に過ぎず。彼等は何をか食ひ、何をか纏ひ、將た又何處に眠るや、彼等又一錢銅貨を如何に使用するや。

支那町の一大現象は、飲食店の盛なるに在りとす。大街道は兎も角、浦辻に入れば、右に曲るも飲食店あり、左に進むも飲食店あり、行く所飲食店あらざるはなし。飲食店の盛なるは、彼等に買喰好の人間多きを示す。總じて支那人は酒よりも菜を食ひ、隅田の長堤、千鳥足の奇觀など支那全國に絕へて見ることなく、好んで酒を飲むと稱する者すら、戸扉を閉して一醉を催すに過ぎずと云ふ。我は半島に於て、支那人を買喰好の人間と云ふも、强がちに間食的人間の集會と思ふ勿れ。戸々軒を陳ねて販く既製、未製の飲食物は、多數下等社會の必要食料に供せらるゝなり。如何に自己の生命を戸外に繫ぐものゝ多きかを見よ。

鷄鳴曉を報じ、東方の將に白からんとする時、聞ゆるものは、饅紛結（マンコノケ）、太田々々（オタ〳〵）の聲なり。前者は米粉製の唐パン（カラ）、後者は輕便握飯（ニギリ）にして、鰕を載せたるもの、鹽魚を添ゆるもの、砂糖を混せしもの、米飯あり、餅米あり、何れも一個半錢、三個滿腹、以て半天を支ふ。擔下に駄菓子あり、香茶を添ふ。『カステーラ』、麵麭、饅頭、豆平糖あり、胡麻を撒きしあり、豕を入れしあり、含油質あり、糖分質なるあり、稍々永續的消化の食物は、辻の米飯芥汁（ライスカレー）、螺旋煎豆腐汁（チンマルアゲドウフ）（二錢）等とし、朝暉を覆ふて控ゆる者は、氷水店、寒天水店（五厘）、飲み足らざるを患へは、傍なる火吹竹大の甜菜（オトウヤビ）を携へ行く（五厘）。午前十時以後は、『うどん』（二錢以上）屋の時代にして、原料食品と火袋を擔ひ、木魚を鳴しつゝ四顧す。轉じて午後の警察裁判所、高等法院、市役所、或は諸會社の裏口を瞥見せば、一摘み洋食、一錢菓子屋のあらざるはなし。太陽漸く西に傾き、車夫輪火を點ずるに早き頃は、幾群の餓鬼腹

を抱へて走る。一膳飯店、一椀粥店の雜沓名狀すべからず。彼等が道路の食卓に家鴨の如く蹲りて凝視せる食物の何なるかを、五月の青蠅を追拂ひて點見し來れば、天麩羅、豕田樂、煮付け、鹽魚、煮〻、燒鳥、鹽玉子の類、何れも山盛り一錢の粥に好菜ならざるはなく、合せて五錢を上らざる支度を喫了して、棒大の食箸を擲つ。

日全く暮れ、洋燈瓦斯の光街道を輝せば、飲食露店は、茲に全盛を競ふ。夜の食物は昼間のものより、比較的に贅澤なりとす。氷水店、寒天水店は云ふも更なり、咖啡店(二錢五厘)あり、色凍瓊脂菓子店あり、類似羊羹店あり(五厘)、落花生店あり(五厘)、甜菜あり(五厘)、田舍「せんさい」(一錢)あり、駄菓子、水菓子、丸餅、三角糖、汞荳沙、芝蘇糊、杏仁茶、放心飲あり、其他異邦人の容易に窮びべからざる各種の食物店整列して半夜の長きに亘る。而して是等は一定の場所若くは時間に口腹を養ふ、定場定期の飲食店なりと雖も、更に臨時假設とも名く可き食店に到りては、殆と枚擧に遑あらず。法樂芝居郊外に開かれ、山の如き群集を相手に鬻く、個々百餘の小店は、古道具屋にあらず、古着屋にあらず、植木店にあらずして、均しく腹を肥すの店舗たらざるはなし。

約して之を言はゝ、彼等は五錢以上の小使を自由にして、安樂生活差支なしと雖とも、若しも妻子を有し、番頭丁稚を養ひ、或は多人合宿の者なりせば、既製の食品を戸外に仰くは、未製の原料を買込み自ら炊するの、更に經濟的なるに若かざるべし。此種の需要を充す者を「マーケット」と云ふ。

『マーケット』は市街の一方に、城廓の如く聳ゆる大建築にして、牛、豕、山羊、家禽、野菜、干物、鮮魚、麵類等、穀物を除くの外は、原料食品一として備はらざるなく、恰も日本橋京橋の朝市を一纏にしたる便利の食物場にして、朝暮の雜沓名狀す可らす。而して彼等は豕肉半斤、野菜二三種を購ひ來らは、少くも三種の料理となし、五人前は大丈夫ならん。

食物の不潔は暫く論せざれ。食味は廉價なりとて侮る可らす。今少しの醬油を入れ油氣を扣へなは、日本食に類せん。温屯の如きは其種類の豊にして、割合に滋養分あるは、天下比す可きものなからん。又新坡卅年來の名物、大椀五錢の碎粥、卵子を碎き、瑣管、魚を調理せし者の如きは、某南洋行客をして、『吁南洋第一味』を呼はしめたりき。進んて料理の高等なるに至りては、洋食の及はざる處にして、燕窩の會席五十圓、百圓の卓子は珍らしからすと雖とも、凡ての食味に豚肉、豚油を多用する、猶我國の鰹節に於けるか如し。若しも食物を以て國民の品性を論せば、淡泊質を好む日本人は廉潔に、質濃き肉食する歐洲人は剛情に、馬來人、印度人は辛酷の加味品を愛して無神經なりと云はゝ、支那人の豚、夫れ何等の評語を下して可なるや。

食物の概況前述の如しとせば、衣類、住居の大略も想像せらるべく、正月の晴着に白金巾の上衣、目闇縞の短袴にて下等社會は事足り、炎天に徒跣の勞働を厭はざるの輩は檐下に眠るも平氣なるべく、一軒の家屋に五所帶、六所帶、一室の廣間に二十名、三十名合宿の生活は、恰も甲板搭客と相異なる

ことなからん。要する彼等新客（シンケー）は、安物を食ひ、安物を着し、安泊を爲しつゝ、左も大望を抱ける平民的人間の生活に異ならず。

說去り、說來り、一考せよ。是等は僅に外形に現はるゝ下等社會の狀態に過ぎざるも、一歩を進めて彼等が心思を困め、四肢を勞し、可成廉價なる生活を欲する所以を窮めんには、宜く『支那人根性』の奥堂に入らざるべからず。カーライル曰はずや、

『國民史の眞相を知らんと欲せば、必らず先づ其宗敎を知らざる可らず』。彼又自家の宗敎を說きて曰く、『我が宗敎とは人の確實に之を信仰し、確實に之を服膺し、凡ての場合に於ける己が眞宰（ナライ・ミニスター）たり、創作的に一切を判斷するものあるを云ふ』と。左らば問ふ、支那人の宗敎は如何。儒敎の謂乎、佛敎の謂乎。否々、噫否々。

乞ふ吾人をして、所謂支那宗敎の眞意を解せしめよ。人の確實に信仰し、己が『プライム・ミニスター』として、創作的に一切を判斷するものなりとせば、之を人生の出來事に徵せば、人は此理想の爲めに働き、此理想の爲めに死し、社會は此理想の高卑に比例して榮枯盛衰せん。而して吾人は四億萬の衆生中、（少くも群島に於て）此の理想の爲めに、生命を惜まざるものあるや否やを點見し、彼等の信仰を抽象し來らば、『金錢』の二字、實に之を抱括せりと信ず。故に其宗敎は天上天下唯金獨尊敎にして、彼の上帝を說き、眞理を愛し、或は報國獻身或は英雄崇拜の如きは、無用の長物たる可く、其本尊は孔子よりも、關羽よりも、更に大自在力を現世に有する、金弗銀圓の諸尊々にありとす。

人は是れ經濟的動物なるが故に、幾分の眞理を存して拜金宗は全世界に擴り渡るも、支那の如く多數の信徒を有するは少かる可く、彼等の如く熱心なるは稀なるべし。彼等か世界に嫌はるゝも、世界に名物たるも、是れか爲めにして、其下等なるは此宗敎の外に名譽もなく、人情もなく、一身を犧牲となすも、軍艦を失ふも、兵勇を殺すも、竟に國家を滅亡せしむるも、決して頓着せざるべしと雖、何ど必しも利を言はんや、唯仁義あるのみの子孫にして、斯くも金錢の奴隸と墮落せしは、深き理由の存するとして、左らば

今此の出稼人即拜金徒は、新開地に入り、安直の生活を遂げ、殘餘の金錢を貯ふるからは、何人か富貴ならざらんや。然りと答へ易からざるの事實を奈何せん。彼等は拜金宗徒に相違なきも、下等勞働者には下等社會の常弊弱點を有し、其金儲けの方法卑しき割合に、蓄積の精神に乏しく、此點に至りては、勞働者の過半は、貯金なる拜金宗の大試驗に落第者なりとす。新坡（タンジョン）、バカー埠頭の人足にして、一人一日二圓の仕事を爲すものあれとも、彼等の多くは同類打集ひて豕の如く食ひ、高價の亞片を喫し、或は獸慾を充すを事とするのみ。翌日作事不當りにして一錢の金なきも、終日の斷食を意に介せざるは、恰も亞非利加蠻人の胃甕に異ならす。貯金落第の事、豈に之に止らんや。大凡物極端に走れは必す害あり、好書家に近視眼、肺病患者あり、大食家に胃病、大酒家に、『アルコー

ル』中毒ありとせば、金慾旺盛の支那人にも、亦た「金儲中毒」とも名つく可きものあり。

賭博の風は上下を通して盛に行はれ、衆人の集る處、其山巔と水涯の別なく、博場たらざるはなく、紙牌、天九、骰色、番攤、樗蒲等は、彼等が日常行用の賭具にして、其最も普通なるものを、將士象車馬包紅白、闘花會、十二支の類なりとす。而して賭人とは、啻に下等無頼の輩に止らず、巨商、碩賈あり、男子成人あり、婦女、童稚あり、富者あり、貧者あり、近き者も賭す可く、遠き者も賭す可く、蠅の膻に附き、蠅の臭を逐ふが如し。是れ一錢を投じて百金を獲、百金を賭して萬金を獲んとする、支那宗教の迷信にして、實に彼等が財嚢の底に穿てる穴。而して此宗教の寺院即博場は、半島諸國、坑山市街の人多き地に設けられ、其僧侶は、往々狡猾なる勞働者雇主にして、彼等は此惡弊を利用し、勞働者の貯金を奪ひ去り、彼等の自由を禁するの手段とせり。更に其甚しきは、政府の歳入を賭博公司の收入に仰くものあり。海峽政府は法令を嚴にし、此弊風を矯めんと欲するも、亦詮なきなり。一日新聞紙を讀む。

『本坡某家に閨秀あり、日々其傭人を遣はし、會場に赴き博せしめ、所有首飾衣衫を典當し去りて、閨秀心猶厭はず、復其親戚に向て貴重の首飾數件を借得し、背城一戰の擧をなさんとす。唯是其家絶頗る嚴にして、堂上人の知らんことを恐れ、傭人と約するに傘を以て暗號とし、勝則開之、紅旗捷を報する如く、敗則合之、鎗を投じて走るが如くし、閨秀樓上より一望知り易からしむ。是日幸に大當、白銀數百を得たり。而るに傭人狂喜異常、芒々然として歸り、竟に雨傘を開くを忘る。閨秀樓上より之を望み以爲く、再び輸去すと、覺えず嗒焉として房門を閉し、凌虐仙子の戲を爲す。傭人樓上に至れは、既に解救す可らす』。悲哉。

是れ一笑に値せざるも、以て一斑を知るに足らん。賭博を以て金慾中毒なる支那病の一種とすれは、病症に急性ある如く、又『急性金慾中毒』なかる可らす。賭博は是れ小額の金錢を賭して、大金を掌握せんとの慾より起れるも、更に其の變性にして惡む可きは、餘りに金錢を貪るよりして、竟に資本なくして金錢を得んとするの心、人の物を我物たらしめんとするの、天人の容れさる最恐るへき邪心を生す。泥棒根性は實に中華王國を亡ぼす病毒にして、支那人(大多數の下等社會)は油斷のならぬ人種と評せらるゝ悲しき。新坡、人口を有すること二十萬、建築の宏大なるは法庭、警察に若かさる可く、而して百餘の竊盗公判は、日常絶ゆることなく、晩鐘、兩頭の閣窓馬車を以て送らるゝ罪人の多くは、西洋人よりも、馬來人よりも、印度人よりも、其多數は寧ろ支那人なるを知らは、誰か支那根性の腐爛に驚かざらんや。

以上の二大中毒に罹りて、回悟の念なく、全快の見込なき者は、終世の無頼(ルフン)匪徒たらんのみ。匪徒類を以て集り、群を爲し、黨を結び、良民を害し、子女を誘拐し、其猛勢なるは同類千以上を有し、各地に横行して海賊を爲せし等、早世植民政府の厄介物なりしが、今尚危險黨條令は、匪徒を植民地外

に追放するを目的とす。是れを拜金宗の中毒より發せし極惡の支那病と云ふ。

彼等の末路斯の如きも、均しく拜金宗徒にして、割合に良心の分量多きもの、比較的正則の貯蓄心あるものは、日頃の信仰空しからず、『ミダス』の神は彼等に祝福を與ふる其由來は、我れ出稼人生涯の第二期に之を語らん。

○其二　商賈

'Why nothing comes amiss, so money comes withal.'

我既に馬來群島に於ける支那出稼人が、如何なる事情により渡來し、如何なる生活を爲し、其不正なるは、匪徒と墮落することを略述しければ、今や進んで良心の分量多きもの、比較的正則の貯蓄心あるものは、如何に成行くかを考窮せんに、彼等の出世、其第二の生涯とは、彼等が一家の『頭家』と成ること是なり。頭家とは其字の表はす如く、一軒の主人公にして、彼等に農業頭家あり、鑛山頭家あり、受負頭家あり、公司頭家あり、馬來群島は殆と支那人『頭家國』なる可しと雖ども、吾人の觀察を單に商業頭家に止めんに、

人足一躍して商人となると云はゞ或は奇異の感あらん、然れども群島到る處の市街に軒を陳ぬる、大小店の主人公は、其過半之を本國の家業よりせば、彼等は決して純粹の商賈にあらず、現今海峽の商業界の巨商碩賈と稱せられ、或は半島保護諸國の紳士紳商若くは多額納稅者の如き、二十年前彼等は出稼人と共に、一種の勞働に從事せしものならずんは、其父祖は必ずや、苦利射の門を出入したりしを疑はず。彼等は初め傭工なりき、石炭夫なりき、人力車夫なりき、料理人なりき、溫飩賣なりき、駄菓子屋なりき、故に今日海峽附近の淸商は、歐洲人の如く、其資本金を本國より齎らせしものは洵に稀にして、均しく常夏の國に搾りたる汗血に外ならず。彼等は他人種の容易に堪ゆる能はざる非常の耐忍と熱心を以て、勞力を厭はず、時間を惜まず、厘毛を堆積し他日の大商店の基金を起せし、立志傳中の人物也。

半島セランゴールの豪商葉隆盛（ヤプロンシン）は、妻を娶るの際一日千弗の饗應を一ヶ月間繼續し、其婚儀に金製の寢臺を新調しけるか、星坡生仝地漫遊の際、其兄なる人に乞ひ、其家に寄食せる一儒生より、隆盛の父なる人の小傳を得しに、彼の父葉氏は十八才にして新客と爲り馬六呷に上陸し、吉隆（カラン）の商家に傭役となり、後コーランポー錫鑛の開くる際坑夫となり、坑夫長となり、竟に甲比丹の重職に任せられたる、廣東客籍（ケエ）人なりとす。其他現今新嘉坡支那人參事會、及保良局名譽員は、悉く初め賤業者にして、土生支那人と稱し、彼地に勢力ある社會も亦、其父祖は大概苦力人足なりしなり。

然りと雖とも、是れ餘りに迂濶の談ならずや。彼等か如何に拜金宗の苦行難行を遂けたりとて、五ヶ年の貯蓄總額を見積るも、勞働者としての三百圓は容易ならず、好し之れありとするも、千中一の稀

有の例ならずや、而も記者は、渡來者を以て愚鈍なる田舍漢と云ひしに非ずや、如何なる事情は、彼等の人足的腦髓を化して、商賈の人間とは爲し得しか。

蓋し詳細の説明を要せん。言葉を略して之を言はゞ、拜金宗徒の腦髓は、其人足と小商人間、職業の種類に從ひ、金儲の方法に幾等の階級ありとするも、根本的に甚大の懸隔を發見せず。彼等は支那根性の一分子たる、惡く云はゝ泥棒根性若くは才取根性と、旺盛なる蓄積心を通有す。

我水屋を知る。水屋の業最も容易にして、新客（シンケー）に適す。其資本は桶二ツと、棒一ツ、上衣を要せす、褌一ツにして足れり。水を運ふの賃、毎個一錢、上階に運して一錢五厘、一日五軒の得意を有すれは、五尺の身体を飢えしめす。水屋我家に通ふと數月にして竟に來らす。一日彼の埠頭人足に混し、營々力業に服するを見る。問ふ一日收入幾干。少くも三十錢を下らす、多きは五十錢、水屋に勝る萬々なりと。彼今や新客（シンケー）を脱せり、世間をみずには渡られず。

我嘗て老たる「ボーイ」を備へり、其齡五十を超ゆ。彼は新參者なりけれは、一月給金四圓、使備すること半歲、嘗て金錢を消費せしを見す。然るに彼れ去りし時、我等の「コップ」二個を盜めり。其後月餘、彼を街道に見出せし時、彼は寒天水屋たり。（寒天を砂糖水に混し賣る一杯五厘）問ふ如何。君の給金を資本として爾來營業を始めたり。「コップ」は如何。是れ君の賜物にはあらずや。

南洋「ボーイ」の本土を海南島（ハイナム）となす。試に三十錢を與へ、牛肉若干を購求すべしと命せよ。彼等は、多少の斤目を盜むを常例とせるが如く、支那人は幼稚の頃よりして、金錢に對する特別の觀念を發生せし、天生の「コンミツショナナ」なるを了解して、次に

百に足らぬ小金を貯蓄し、辛抱なる勞働者、乃ち亞片と賭博を節し、良心の是目稍多き勞働者か、如何して商業を營むかを尋ぬるに、彼等若し獨力にして資本の不足を覺束なしとせは、他の共同者を見出すは易し。例へは五十圓の貯金あるも、五人相集れは二百五十圓となり、百圓の者は五百圓を得るの理にあらすや。如此して、彼等は一軒の新店を開く可し。

此れ言ひ易くして行ひ難く、資金の大なる株式會社の類ならは兎も角、小店の合同に必ず起る可きは權利の問題にして、五人の資金は五人の主人を生する煩を見すや。

然り、日本人の如き氣風を以てせは、到底終始を完ふする難きも、支那人は然らす、一軒の小店、五人の資本より成るとせは、彼等は五人の番頭、丁稚を雇ひしと同樣にして、組合者中に算筭を心得、其道に通せしものは、推されて頭家となり、体格强健、腕力の剛なる者は、荷上け下し船積を引受くるへく、無能力者、炊人となり、口頭の輕さもの顧客を待て店頭に座し、或は買込賣拂を爲す等、其普通なる方法にして、更に人員の不足あらは、新に番頭を雇ふも可なり。而して彼等は互の財産なるを知るからは、共に勉勵奮發し、却て他人を備ひしよりも、都合好き場合屢々あり。更に感すへきは、炊人と雖とも、同樣の利益配當を受くるに於ては、權利の輕重を介意せす、頭家の命令に從ひ、

不平口論等の頻少なく、割合に圓滑なるは、支那人商業上の特質にして、他邦人の容易に摸倣す可からざる處なり。左れは新坡、檳城、其他の交易地に軒を連ぬる各種の小賈店は、獨立營業者少くして、此種の公司組合たらざるはなし。故に夕暮支那町を散歩して見受る、圓卓の周圍に會食する同年市の壯丁は、大概此種の共同者にして、彼等は悉く傭人ならざるなり。

古來支那人は特別なる商業上の習慣經驗に發達し、其團結力強きは言ふも更也、外國出稼人の如き、其人柄の不良にして、泥棒根性の忘却し易からざるに拘らす、共同一致、新に一軒の店を開くとすれは、(少くも其組合間にありては)意外に私せず、盜まず、違約せず、否相互に信用し、奮發し、商機の秘密を守り、帳簿の如きは、宗教的嚴格を以て取扱ふ等、商業上の德義は孔孟教の道德より一層勢力の偉大なるを視、我は不文律なる拜金宗の信仰の箇條とは、如何なるものなるかを知るに困む。

如此して公司相談は纏り、家屋は借られぬ。彼等は吉祥の屋名を撰み、紅唐紙に『天官賜福』、『千客臨門』の常套語を大書し、店の正面には關公の肖像を掲けて、一軒の新店は成れり。其商業の利益を低く一割と見積るも、彼等は凡ての雜費を儉約し得へけれは、何程の商業も引合はざるはなく、且又多少の商業心あるものたらしめんか、例令其經驗少きも、彼等の得意は此新店の主人公よりも、馬來不通なる多數の移住者を相手とせんに、特別の難狀を見す。下宿、茶店、割烹、雜穀、荒物、獸肉、喫煙、洗衣、下駄、力車、人足受負、田舍買出しを營む可なり。然れとも其新店なるか故に、顧客の範圍は、外見よりも入込みたる各種の事情に制限せられ、窮屈なるものとす。吾人は支那人と云はゝ、一概に同國人と見做すも、彼等の間に存する種族は、之を言語の不同よりするも、同胞相憐の情よりするも、決して同國人種と認め難く、特に新客組にありては、其懸隔甚しとす。而して商業の如き、範圍の寛大なる社會にありても、其階級の存すると、猶下等勞働者に、『ボーイ』は海南人に限られ、理髮出稼者は廣東人に限られ、船頭鐵葉細工人は客籍に多く、人力車夫は福建人に多き等、商業界にも、本國の產物を輸入する大店は、福建人に於て之を見、日本雜貨を販くは、廣東人に多く之を見、馬來群島の生產を取扱ふは、土生支那人の占權にして、廣州人と福州人間に取引少きの類、異種族の間に存する隔離は、小店一層著しとす。故に彼等の商業は、初め其同種族の社會を目的として其需要を充たし、彼等が商業上の經驗と、外國語の研究を重ぬるに從ひ、漸次に此等の範圍を超脫して、其子孫は外國人をも相手として取引を爲すに至るなり。

歐人往々、日本人の工藝美術の精神に富み、高妙なる國產を出すのみならす、又巧に外國品を摸造するを見て、工藝社會の『モンキー』と云へり。吾人は支那人の交易營利の精神盛に、當に自國の產物を販くに止まらす、巧に外國の物產を取扱ふを見、商業社會の『モンキー』と評せざるを得す。一の珍らしき有益品にして、日本人の目に觸るれば、其摸造決して疑なきが如く、一の有利品にして清人の手に觸るれば、彼等は其利益を分割せすんば止ます。支那人は製造の頭腦鈍き代りに、鋭敏なる融通

の手腕を有せり。試に此の東洋生産社會の二人種の特性を示さんか、海峽市場は恰好例證ならん。

海峽植民地、若くは廣義を以て馬來群島の輸入に係る製作品の大部は、日本人之を作り、支那人之を販く也。群島諸國何處の僻地にも、日本品を使用せざる家族なく、其集散の最も大なる新嘉坡の埠頭には、堆積して山を爲し、我が新來の旅客をして喫驚一番せしむ。何故に此の需要廣大にして、前途有望の工藝品を自國人の手にて販賣せざる、販賣せざりしの疑問は、何人の腦裡に浮ぶも、這般は後回しとして、先つ其價格の意外に廉なるに注意せよ。然らば世の所謂商業視察家か、歐洲渡航の途次此地に寄港し、文學者的英語を以て支那商店を冷かすの際、視察家既に馬來不通の足許を見透され居るに氣付かず、一雙の花瓶三十弗の荒相場を聞き、早計にも南洋貿易策を新聞紙に投する勿れ。三十弗の品、之を半額に評下し去り、「應來(オータイ)」と領かれ、却て荒膽を奪はるゝの例なしとせず。今假りに彼等が雜貨營業の小賣相場を、一割乃至二割の利益と見積るも、彼等が大阪、神戸、横濱、長崎の各地に取引せる「エジエント」は、十數年來の經驗を有し、一種其間に不可拔の習慣を養へば、自然に我內地商人の好得意と成り、見切り物、べけ、時候後れ物、需要超過品を買込み、時には現金應對を以て、我か不融通なる製造者に迫り、且又其代理店の大なる者は、其捌口を上海、香港、新坡、横城、瓜哇の各地に有すれば、大取引を爲し得へき等、各種の事情は、往々我商人よりも廉價に仕入るゝと(一)、船運諸雜費に入費の嵩むさると(二)、營業維持費に、食物も贅澤ならず、衣服も華美ならず、住居も清潔ならず、靴も「スレツパ」にして足り、人力車にも乘らずして足り、帽子も被らずして足り、小使も多からずして足れる等(三)、彼等か馬來通たるの便益は、一割以上の營業も引合ふとなる可く、木綿縮火柴の如き需要大なる代りに薄利の商品は、其純利の點僅に取引量の大なると、雜費の節減を競爭するに止り、群島に於ける日本品の販路は、支那人が廣く、深く、永く且つ安く地磐を固めければ、我商人より之を見るに、彼等は競爭者ならずして、先入者の位置を占めけれは、容易に手を出し難く、其遺利の存する處、只未た曾て輸入に係らざる新奇の商品を取扱ふか、若くは群島產物の輸出業を振起する位に過きず。是れとても彼等の「モンキー」的商法と永久競爭の見込覺束なしとせは、馬來群島に於ける我商人の前途を奈何せん。

支那人を商業界の「モンキー」なりとし、其取引の小間々々敏を見るに、例へは拾圓の買物を爲すにも、五六圓臺より評價し、初め口頭泡を飛はして應接數刻、時には二三の頗問を誘ひ來り、或は絶交的口調を放ちて店を去り、行くと數歩再來して雨の止みたる如く、風の靜かなるか如く、溫顏を裝ふて買手一圓を上くれは、賣方七十錢を低くし、往來數度、茲に約定調ふの類は日常にして、百圓の取引も實に容易の業にあらす。短氣なる日本人の如き武士的精神を以て彼等に接せは、其煩に耐えす、遂に根氣勞れの投げ賣を爲さんも、清商の清商たるは、此氣力を多量に有する所以にして、彼等か買入の法大略如此とせば、賣込みの辛抱も想像に餘りある可し。而して畢竟是等は、小商法人の小刀細

工に過ぎざれとも、大取引とて根本的には大差なからん。何となれは商業の秘訣は最も平易にして、安く買ひ高く賣り、眞理其間に存するの外なければ也。而して彼等は此秘訣を實行し能ふ手腕を有するもの也。

之を要するに、支那人は幾多の利器を擁して、東方亞細亞貿易の要衝に臨む。彼等の前途豈に多望ならずとせんや。歐洲人の海峽附近に於ける商業は、海運、銀行、保險、輸出入等小數なる大機關を除けは、其餘の雜業は、僅に同國人を相手とするに過ぎずして、支那人の如く濶大なる萬業の範圍に及ぶ可くもあらじ。若しも支那人にして、歐洲事情に通じ、倫敦、巴里、伯林の各地、『エジェント』を有し、直輸出入の交易を開始せば如何。彼等は實に恐る可き商業界の人種なりと云はざる可からず。彼等は軍國民として無能なることを世界に曝露し、其國人の多數は品性の卑しき、愛國の情なき、世界民人の尊敬を表するに價せざらんも、彼等か平和の戰場に、一歩々々其領地を擴張することを忘るゝ勿れ。

亞細亞半球の商業界に在りては天下擧つて猶太人を推す。次に印度人、支那人は算へられん。我れ三人種の萬國歴史に於て、兩者既に亡國民と成り、後者は其運命の日々に憐む可きを讀む毎に、拜金宗の商業史は、亡國史と相伴ふ者なりとの結論を下すを敢て欲せざるも、馬來群島に於ける支那人は、四國の境遇、之を本國に於けるよりも、彼等に取りて立身の道早く、金儲けの方法多ければ、彼等は恰も佛教信徒が天竺國に遊びし心地し、拜金宗の本山に入りては、其雖有味に堪ゑられず、恍惚失神、遂に歸國の念を忘却し去る者なりと云はざる可らず。彼等は日清戰爭の時に本國を亡滅せしめんとするにも頓着せず、一意營利に忙はしき者なれば、思ふに外國永住の如きは何かあらん。寧ろ生命財産の安泰なる箇所こそ、天與の祝福を完ふすべけれ。人は金坑の溜池に生せし混蟲、國籍の奈何は顧る處あらざるべし。故に彼等永住を欲せり、思ふに居宅を構へ不動産を起さん。既に家あり、豈に妻なきを得んや。彼に妻あり、亦た子なきを得んや。而して是等の子々孫々は、如何なる種類の人間と發達すべきかは、我が最後に論せんと欲する題目なり。

○其三　半島生長の支那人

我は半島に於ける支那人を目し、彼等は本國に於けるよりも、其他の外國に於けるよりも、自由を有し、平和を有し、教育、智識を有し、一種の習慣、風俗を有し、而して又生産上の大勢力を有すと云ひしは、即ち植民地生長の支那人の謂にして、彼等は自から土生華人と稱し、又た俗に之れを『バヽ』と呼ぶ。

『バヽ』なる語、之を實名詞とせば南洋生の支那人と稱し、冠性名詞には『ミストル』に通ず。然るに『ミストル、チャイニース』其人の祖先は、廣東人たりしにせよ、福建人たりしにせよ、人力車夫

たりしにせよ、苦利射人足たりしにせよ、其子孫は英領若くは保護國の地に生れ、英人の教育を受けて生長したる、「アングロ、チャイニース」なることを記憶し、左に彼等か本國人と異なることを述へんに、

「バヽ」支那人の衣食住より生活、思想の狀態は、概ね洋清折衷なりとす。彼等は本國人の如く、倨傲尊大を旨とせざれは、日常行用の物品の如き、利用厚生の道に於て、彼等に滿足を與ふる限りは、其本國産と外國産に論なく、之を消費するを惜ます、寧ろ新奇の競爭者ならん乎。家に入れは、黑檀、朱塗の唐几腰掛は、大理石の卓子（テーブル）、椅子と相伍し、鐵管、寢臺、南京蟲を暖めて横はり、壁面六聯對の支那文字の傍、洋畫掛り、點鐘器鳴り、「ランプ」輝き、「フヲーク」、「スプーン」は飯椀箸と相並み、牛乳も啜る可く、「ビステツキ」も食ふ可く、麥酒も飲む可く、洋藥も服す可く、（阿片は此限にあらす）「シガー」も燻らす可く、齒揚子も使ふ可く、石鹼も磨ぐ可く、香水も塗る可く、「ピヤノ」も彈す可く、玉突も爲す可く、紙牌も弄す可く、賭博も嗜む可く、自轉車にも乘る可く、黑塗馬車をも驅る可きなり。彼等の服裝こそ清國風なれ、其材料は絹、縮緬の外、金巾あり、更紗あり、「セル」あり、羅紗あり、而かも本國人の如く、長袖寬裙の繁なければ、胸の搓紐を「ボタン」に代へ、寬袴を今少し窄からしめなは、洋服と甚大の差を見す。（瓜哇バテビヤの支那人は、洋服を着するもの多し）。又彼等の頭顱に被ひるは、唐頭巾ならすして稈帽子、又は「シャッポ」、足に穿てるは儒雅ならずして西洋靴若くは「スレッパ」、一層其辮髪をも切斷して散髪――と迄、今日の「アングロ、チャイニース」は風俗改良の勇氣なきも、辮髪の短小なるは著るしき事實なるよ。若夫れ廿年或は卅年後、此不經濟の辮髪を廢するの日ありとせんか、我は「バヽ」支那を以て其先鞭者なりと斷言して誤たざらん。何となれば彼等は四億萬の衆生中、別種の社會を形爲して、少くも形骸的文明の先覺者なれば也。

男子に「バヽ」の稱ある如く、土生の女子を「ニューナ」と呼ふ。「ニューナ」本國の女子よりも異樣の風采を裝ふ。彼女の衣服は、本國のものよりも尙西洋風に近き、馬來女子の服裝に擬す。其艶美なる紋更沙の「カバヤ」、「サロン」、胸間に輝く珠玉金飾は、ポルチヲ金剛石の指輪と光を競ひ、紅粉の美、容色の愛す可きも、彼女の老たるは往々回教土人の風に染み、檳榔實を嚙みければ、醜面の人、口を開ゐて笑はゝ、唇齒深紅、鬼女の火を吐けるに等しく、又或者は無作法にも、路上甜菜を喰ひ、一見吾人をして呆然たらしむと雖も、彼女は衛生的に本國の婦女より進歩し、其足は檢束せられす、街道を濶歩するもおかし。

「バヽ」、「ニューナ」相婚の風、死者埋葬の儀は、未た本國に異ならざるも、三十圓の番頭、少くも三百金を投して友人を招き、洋樂を奏し、花嫁を迎ふるの盛宴は、頭家（タウケー）國の盛觀なる可く、人を葬むるの不幸には、泣女を雇ひ、銅鑼を鳴らし、家に歸りて貯髪數旬、其辮髪の飾紐を白くし、生金巾を

着し、『ズツク』の白靴を穿ち、帽の鉢卷を黑くする等、場所相應の風と云ふ可し。

子を產みて男兒を擧くれば、髮の飾糸に赤紐を編み、彼の『バヽ』たるを知らしむ。長して六七歲に至れは、之を學校に送る。讀む處何の書ぞ、學ぶ處何等の文字ぞ。『ローヤル』讀本馬來單語篇の、千字文三字經よりも調法さるゝ地方に在りては、其俗業科目も畧知る可く、兒童か日常の挨拶にも、支那人的ならずして、西洋人的なり。彼等は多少の支那語を解せざるにはあらざるも、朝晨師弟（ナロー・ナシエー）と云はんより、『タベトアン』の馬來語を平易なりと心得、『グー、モーニング、サア』を以て更に高尙なりと信せり。學ふこと十年或は十二年の後、普通の學科を脩了すれば、官費留學生の試驗に及第するを無上の光榮と爲す。（每年英國臣籍の子弟を試驗するあり、『クインス、スコラーシップ』は其合格者を登用す）。彼等は巧に英語を語り、其筆跡の妙は倫敦の學生に劣らざるも、科學の思想に乏しく、靑年有爲の氣象を存せざるは、思ふに英人敎育の方針其因たり果たるあり。寧ろ本國人の如く橫平ならず、外人に接して如才なく交際し、政府の書記として、通辯人として、貿易社會銀行の番頭として、最も調法なるを牛島『バヽ』靑年の長所と爲す。

然るに彼等か歐洲通なる丈け、本國の事情に疎きは免れざるの勢也。植民地生長の支那人にして、漢文を讀み漢字を綴るは洵に稀有にして、中等の敎育を受けしものすら、自己の姓名を漢字に書し能はざる數多し。彼等は嘗て支那帝國を見しことなければ、其政治、道德、文學、社會的狀態の奈何を推測するに由なく、只傍人の語るを聽けは、其本國は野蠻國に等しく、今尙斷頭令存し、匪徒橫行し、畫一の政令なく、民人參政權なく、郵便局なく、倶樂部なく、新聞紙なく、偶々彼等か祖先の國土に足を容れんと欲する時は、在淸英國領事の保護を仰かさる可らざる等、毫も祖國敬慕の念を惹起すの材料なく、又其國人の渡來するを視るに、彼等は凡て卑賤の勞働新客にして、其一言一行不活潑に、無粹に、無敎育に、不潔にして、到底『バヽ』支那人の味方たる可らす。反之、彼の阿片を嗜み、指爪を長くし、若くは足指を帶束せる紳士淑女より、『バヽ』支那人を視れは、何事も輕卒に、贅澤に、無學に、不道德に、生意氣にして、彼等は中華國人の資格なきものとせん。又歐洲人に向つては、例令『バヽ』支那人は、英語に巧にして、從順なる英女皇陛下の臣民たる國籍に在りなから、頭顱豕尾を有する限り、手鼻を拭ふ醜態を脫せさる限り、蓄妾の弊害を除かさる限り、其品性の何となく野卑なる限りは、未た『ゼンツルマン』の稱號を下す可らすとせは、其境遇は支那人種にして支那人ならす、英國の臣民にして英國人たらざる、一種の別天地に生息す。然れとも金は勢力也、何者か其右に出んや。其祖先の『頭家國』に遺せし賜物は、彼等をして人足頭ならしめ、農園主ならしめ、鑛山主ならしめ、株劵主ならしめ、御用商人ならしめ、賭博、亞片、酒精公司の占業者ならしめ、海峽貿易權の過半を占得せしめたりき。歐洲人の馬來國に於ける、外見は華美なり。而も個人的富の勢力は微弱にして、印度高利鬼の窮迫を免るゝは殆と稀なるに反し、『バヽ』支那の豪華は、彼等か實力の存す

る結果にして、敢て王侯の如き生活を營ひも怪びに足らす。彼の豕尾人種の黒塗兩頭馬車を驅り、街道に揚々乎たるの奇觀は、天下廣しと雖とも、馬來國を外にして何所に其比類を求めんや。

而るに此「バヽ」支那人は、半島總計の支那人種に比すれは尙少數にして、海峽附近總に數萬人に過ぎさるも、馬來群島を通して、司馬太來、瓜哇、ボルネヲ等の諸所に、殆と同樣の發達を爲しつゝあれは、馬來群島偉大なる新人種の名稱を下す可く、彼等は大多數の新來支那人中に超然として、最も智識あり、經驗ある者として、此新來者を支配す可きの勢力を有し、又此の土生支那人の父母たり、祖父母たるものは、年々大多數を以て移住するとせは、今後十ク年の人口は、當に現今に數倍するとなるへく、此をしも半島恐るへき勢力と云はすんは、亦何をか恐る可きものあらんや。故に支那人統御策とは、植民政府內治の重要問題にして、其答案は半島將來の大勢を卜す可きなり。

○其四　英政府の半島支那人策並に馬來半島の將來

英政府の抱ける半島對外經營の目的及其經營の手段は、政略史國勢一斑の章に之を略述せり。而るに經營者其人に至りては、實に支那人を除きて他に之を求む可からさること、植民地進歩の歴史と、保護國開發の近狀は、之を證明して餘あらん。乞ふ吾人をして半島馬來人種の運命を卜せしめよ。昨年吡羅國文部省は、廿年來同國に於ける馬來學童の就業表を揭け、左の如しとせり。

(1)	小學教員	五九人	(11)	勞働者	一〇三人
(2)	書記	五七	(12)	船員	五七
(3)	兵士	六一	(13)	商人（行商）	一四六
(4)	傭人	八	(14)	貴族	二
(5)	米作人	一、七二四	(15)	雜業（番頭、鑛山夫）	二、一七七
(6)	園丁	三四六	(16)	英學を爲すもの	五〇
(7)	馬丁	七五	(17)	死亡	一三八
(8)	船頭	一五	(18)	轉住	九八〇
(9)	巡査	四三	(19)	不明（多くは無職業ならん）	一、〇〇〇
(10)	漁夫	一四二			

保護國中最も進歩せし吡羅青年の事業如斯とせは、其餘のセラン、ゴール、チギリセミラン、パハン、ジョホール諸國の教育の効驗も之を想像するに足る可く、之を彼の土生支那人の進歩に比す可らざるは勿論、其無教育なる大多數の同人種は、到底支那人と生産社會に競爭す可くもあらす。彼等の職業とては、漁夫、巡査、官省の小使、御者、園丁、水夫、行商、農夫の類なり。魚を捕ふるの漁夫多くは釣して網せす、糸を垂るゝと渭水の太公望の如く、終日四五尾を獲、之を市に鬻く。巡査、小使、

園丁、何故に六七圓の月給に滿足する。寧ろ其熱國通なる体格を利用し、人力車夫又は苦利射と成りて、埠頭街道に支那人と競爭を試みざる。曰く權勢重からざれは也。歐洲人に使役さるゝの御者馬丁よ、何故に獨立して牛車を驅ること、吉寧人の如くならざる。曰く意氣の揚々乎たるに若かざるものあれば也。商人としての馬來人種は、譏に行商の類を見るに過ぎず。彼等は馬來特產の輸出取引を爲すに適當なる位置にありながら、未だ海峽市場に一人の商館を構へ、印度人、歐洲人と軒を並ふるものなきは、其無能なるよりも、寧ろ怠惰なるに因らずんはあらず。農夫は胡椒、「カンビヤ」、蕃薯樹の如きものよりも、可成力行を要せずして、收獲の速かなるを撰みて栽培し、收益の多寡は、與り思考するものに非ず。其所得を賣却し去りて、一家の飢餓を支ふるの餘裕あらしめんには、メツカ、メヂナ巡禮の旅費を貯ふるを無上の光榮と信する者の如し。（聞く政府は巡禮を禁するの法律を發布せんとすと）彼等は虛榮、迷信、醉生、夢死の民にして、人生の快樂は、音樂、謠歌、戀愛に耽るにありと心得、其大多數は、勞力せずして飽食せんとする「ゼンツルマン」なりとす。一日の幸福は一生の幸福、今日の苦勞は今日にして足れり、誰か亦明日の閻世に「パン」なきを患へんや。若しも一日の勞働にして三日の食を支ふるに足れは、殘餘の二日は祝日也。衣服を購ふの要ありと云ふか、强て華美なるを望まずんは、一枚の腰卷（サロン）にして、年中上衣も要せざるべく、石鹼を用ゐて洗濯を爲さゝれは、此一枚の「サロン」も三年を支ふ可し。嗚呼、天豐溫暖の國に生を享けたる民族は、幸か、不幸か、茫々たる其前途を推測し來らは、我は此天放自然の境遇を脫せざる、無邪氣の人種馬來人に向つて、悲む可き宣告を下さゝる可らず。

馬來人種をして永世安樂ならしむるの策、好家人種の移住を杜絕し、半島拓植の業を廢するに在るのみ。是れ到底行ふ可からざるものとせは、海峽植民地は勿論、柔佛（ジョホル）、祿坡（セア）、德申坡（ペーナンクソン）、吉隆（カクン）、香蘭坡（コーランポ）、直落安申（ナレアンソン）、逸放（イツポウ）、浪子（ラウ）の市民として、彼等は棟瓦石造の家賃と生作費に堪えず、漸々蠻人「サカイ」の舊跡を追ふて、內地に隱遁せさらんと欲するも豈又得へけんや。馬來人の前途、果して前條の如しとせは、新聯邦か計畫し、蘇丹「ラジャ」の鈍腦を煩悶せしむる各種の文明的事業は、其國人を利するものにあらずして、保護政治の方針は畢竟、

(一)　支那人の移住を奬勵し半島の富源を開くべきと。

(二)　彼等を同化して自國の人民たらしむべきと。

是れ群羊の中に虎狼を養ふものにして、馬來人の爲めに悲む可きものなりと雖も、生產的自然の勢力は又奈何ともすべからす。若し英人にして此目的を成就せんには、熱天下の要鎭に美なる邦土を建設せん。第一策を成就するの道、行政機關の具備、物質文明の輸入に屬し、第二策は、之を永遠なる敎化の功に俟たさる可らず。前策は半は成功の途に上り、後策は猶ほ暗黑の裡に橫はれり。英人如何して支那人を統御せんとするか。過去の治世は政府をして、幾多の經驗を重ねしめたり。

初め海峡植民地の起れる其目的は、軍略政治よりも、寧ろ貿易殖産にして、其國土は掠奪にあらず、其國人は征服民たらざりければ、幸にして内亂の禍を免れたりしも、英人の誇れる

"England could still safely adopt at home that liberal Policy of leaving her door open to those who desires to enter and those who desires to leave, which has so meterially contributed to her greatness in the past."

即ち自由、開放、來者不拒、去者不追の招牌は、植民地をして雜然たる支那人の樂土と化成し、實力の歸する處、動もすれは主客轉倒の妙戯を演せんとせり。

英人熟ら、瓜哇に於ける蘭政府の政略を視るに、土人は武斷政治の下に壓制し、支那人は其豪族を擧けて彼等に位階、官職を授け、巧に多數社會を操縱しければ、馬來土人の煩少かりし海峡政府は、關人の例に習ひ「甲比丹支那」なる顯職を設け、支那人統御の法を講したりしも、遂に永續せざりしは、蓋し開國の新なる海峡植民地の如き、瓜哇と趣きを異にし、大陸の南方部若くは群島各地より新來の支那人種は、互に籍閥の舊風に染み、幾多の小團体を組織して反目間斷なければ、豪族政治の有効を期し難く、例令有効ならしむるにもせよ、異邦人をして異邦人を統御せしむる甲比丹政治の將來は、植民府永遠の得策ならざるを洞察せしにあらざらんや。（此法令尚半島保護國に存せり）。於是乎、政府は直接統治の必要を感し、其機關として華民保護署なる官衙を設け、支那通の俊才ピクリング氏を擧けて、最初の保護官たらしめ、支那人政務の業其緒に就くことを得たり。

保護の文字は、其常務の專ら移民男女の登錄、保護を司るより附名せしものなれとも、政府と人民間に於ける署の位置は、恰も支那領事館の如く、在留清人に關する大小の事件、一として署の干預せざるはなし。故に護署、又華民政務司の別號あり。而して此政務司か民情不通の爲めに、多年苦みたる植民府に與へし重なる利益は、法令の普及、陰謀の發覺、裁判の公平、民情の上達を補助するの機關たりし事にして、(一)法令の普及は、立法部決議の地方章程、諸官衙の規例、官報の大要を支那譯とし、假令英文を解せざるも植民府の法令公布に通するを得せしむ。(二)陰謀發覺の目的には、會黨條令を嚴にし、移民保護を布き、古來南部支那人の習慣たる各種の結社會黨を審査し、其無害なるすら之を登錄し、植民地の治安を妨害するものは、直に解散を命し、其主魁を本國に檻送し、保護令は新來勞働者を人身賣買より保庇する等、又市内警察權をして稍々有勢ならしめたり。(三)法庭に於ける保護官の意見は、支那人事件に最も確實の證據たる外、彼れに一種の裁判權あり。(四)民情の上達を目的としては、護署中參事局を設け、在坡の福建、潮州、廣東、客籍、海南、各籍の名望家を議員に指名し、其會議は政府の諮問に應し、又支那人の輿論を代表す。

海峡政府と支那人とを連絡せしむる假設の機關は此の如し。政府益々精勵、支那通の官吏を養生し、此等機關の亂調を修理し、其既に整頓せる者には油を注き、其運轉を圓滑ならしむるを得ば、彼は支

那人の勢力を利用し、半島未開の富源を開拓すへしとして、次に支那人同化策如何。半島政府、若し夫れ此生産的偉人の勢力を、永久自家の政權に畏服せしめんとの意あらは、彼等を脈迄も政治的無能の動物とし、其頭腦を英國崇拜者たらしめざる可らす。然るに植民政府か一歩支那の民情に進むは、支那人をして一歩歐洲人に接近せしむるもの。英人は東洋經營の必要なる材料を馬來半島に得る代りに、東邦頑冥不靈の國人(其一部)は、馬來半島に來りて、初めて世界文明の研究を爲すものなり。思料せよ、四億餘萬の衆生中、夙に文化の大氣を呼吸するもの少からさるとも、之を一の團體とせは、我は海峽附近の如く進歩せし支那人社會あるとを知らす。乞ふ之を支那人參事局の例に徴せよ。

華人參事局規條

第一條　此局名爲華人參事局、

第二條　局內紳士以十八名爲額、概由督憲(英政府知事)派充、計福建籍者六名、潮府籍者五名、廣府籍者二名、客籍者二名、海南籍者二名、並華民政務司正堂一員、(正堂は保護官(プロテクター)なり)

第三條　該局之主席一缺、每年由衆局紳於中、公舉一以承斯職、然亦要督憲批准、方可任事、至初年之主席則以現任華民政務司正堂漸充、

第四條　督憲不拘何時、均可將局內之紳士辭出、另行揀補、

第五條　局內衆紳、每月集議一次、謂之常會、

第六條　凡過常會之期、主席必預先發字、告知現住埠內各紳、言明某日某時爲某々事聚議等因、

第七條　每遇紳士五名會齊便可有權辨事、

第八條　各局紳有事欲交局議論者、須早告知主席、最少亦以四日爲限、方可集衆群議、然當會議之際則不拘何事在座者均可論及、無庸預期通知惟不得立「理所了苟(リンソユーレロン)」(英語直譯にて決議の意)並舉行投票之法、蓋此二款必要主席允許、或三日以前、已向埠內衆紳通知所議之事方可施行也、

第九條　於常會之外、衆局紳若再欲聚議者、不拘何時均可邀集三人、僉請主席集衆會議、謂之特請之會、惟所議何事則務必於會議三日之前、向埠內衆紳通知、

第十條　主席倘遇有意外之事、不拘何時均可傳集、要內衆紳告以欲議何事、即行開議、是謂之格外之會、

第十一條　局內所議之事、一切均要錄登部內、並要主席簽押爲據、所有「理所了苟」以及投票、或從或違之詳細情形、亦要抄稿、送呈督憲查閲、凡在前次議定之事、必於下次會議之際舉行投票之法從衆批允、一經批允之後、即須抄稿每紳各送一張、惟稿內祇許言投票者幾人、而不許將姓名列明、

第十二條　在座議事諸紳、每人許投一票、若係從違各半、則主席可以再投一票、以定去取、

第十三條　投票不得命人代行、

第十四條　局紳間有於常會之期、不能到局者須向局衆請假、報明何以不到之故、錄記部內、倘有接連三次無故不到而亦不請假者、則作辭任而論由、主席申詳督憲、另委別人接充、

第十五條　該局可以議論以下各款事宜、並可立『理所了荀』與及投票以決從違、

第一款　凡係關涉閩埠華人大局之事、如國家所設之章程規例禮法等々、

第二款　或係祗涉及某府或某縣華人之事、

第三款　或係推廣華人學敎之事、

第四款　或係設法撫恤貧病華人之事、

第五款　或係埠內華人因爭論不決、到局投訴兩造均愿聽該局秉公判斷者、則該局可立『理所了荀』准其代理即派局紳三名、訪明其事、該紳等查悉之後、須詳細票覆施行、

第六款　或係埠內華人有寃抑之事、求局代其申訴於國家者、亦可議論施行、

是れ微々たる參事局に過ぎすと雖とも、固より馬來森丹の有名無實なる國政會議と同日の論に非す。在坡支那人等各籍の代議士を有し、國家所設の章程、規則、禮法等を非論するの權利ありとせは、海峽植民地は、彼等四億萬の同胞か、未た夢想だもせざりし多數政治、自治制度、若くは立憲政体を敎ゆるの幼稚園にあらすや。誰か生產界の猛虎を目して、政治界の猫狂とは爲すぞ。

英國崇拜黨の標本を土生支那人とし、彼等か政治的感念と、英國心醉の熱度を驗するに、日清戰爭は其好機會なりき。牙山破れ、平壤陷り、北洋艦隊全滅し、『ルーター』電報は、頻に連敗を報せし時、彼等は故國の存亡を傍觀しなから、破廉恥にも、自己の英國人にして支那人ならさるを口外せり。其醜劣も亦甚しからすや。勿論彼等か英領の地に生れ、英國唯尊の敎育を受けし丈け、祖國敬慕の念に乏しきは怪むに足らざるも、彼等か金剛石佳節に、未曾有の盛會を開きて女皇千秋を唱へ、又彼等の或者は、土生支那人の義勇軍隊を編まんとの計畫を聞きて、英國政府は、早計にも支那人同化策成れりと信ずる勿れ。何となれは、彼等は英國の崇拜者に相違なきも、決して其忠臣にはあらざる可く、彼の支那人と稱して不利なる場合に、其辮髮を顧慮に卷き、帽の下に匿くすの人は、英人と稱し、て不利なるの用意に其辮髮を蓄ふ。左れは支那人ならす、英國人ならざる『アングロチャイニース』、彼等は團結して、獨立の邦家を建設すべきものなるか、吾人之を知らず。英人永く其政權と維持し得べきか、吾人之を知らす。半島果して馬來人墳墓の地なるか、吾人之を知らす。但之を知るは、新坡カンニング丘上に鎭座せる、『イスカンダー』の神靈なる可しと雖も、政權を掌握するものは、人種的勢力に乏しく、人種的勢力を有するものは、政權の慾なき馬來半島、其大部は尙は天荒無人の原野に遺棄す。豈に兩人種の特性を兼有する東洋主班の國民か、快腕を試むるの地域にあらすとせんや。結論に際し、自問自答一章を添ふ。

第六章　自問及自答

（問）馬來半島策如何。

（答）可成多數の同胞を海峽附近に移住せしめ、彼等に自活の道を與ふるにあり。

（問）新に農業を興すべきか、將又商業を振起するを努むべきか。

（答）圍碁の道を以て答へんか。海峽市場に於ける日本商業の振興を計るは、恰も人の地中に『目』を作るか如く、勢死活を爭はさる可らず。余は寧ろ農業の『地取り』主義にして、先手なるには若かざるを信ずるものなり。

（問）何故に農業を興すべしと爲すか。

（答）

（一）馬來半島は本邦と交通の便利なること。

（二）氣候平穩にして邦人の移住に適すへき地なること。

（三）開拓すへき地所の濶大なること。

（四）半島諸國、土地所有の容易にして國稅諸掛の繁多ならざること。

（五）生活營業費の廉なるは敢て本邦と大差なきこと。

（六）有利植物の多種にして其收獲は本邦産よりも概ね多額なること。

（七）半島諸政府は農業の發達を以て經營の主眼となすものなること。

（八）諸國政府及人民は挙つて日本人の移住を希望すること。

（九）農民として本邦人の技倆は、支那、吉寧、爪哇、馬來諸人種よりも數歩優等なること。

（十）移民地域の半獨立國若くは保護國なること。

以上の事實は、所謂半島策を實行するの最良手段を與ふるものにして、以て馬來貿易振起の一助を謀る可く、東洋の要鎮に我實力を培養するの法を講す可き也。東邦第一の農業國民にして、是等の便益を利用するの計畫を爲さゝるは、天與の遺利を放棄するものにあらずや。

（問）然らは半島移民の方針を如何すべきか。

（答）未た模範移民の業成立せざる今日にありては、漫然五百或は千名の勞働者を移住し、一握千金を得へしと信する勿れ。又他國の資本家に勞力を供給し、其報酬を得るの目的たらしむる勿れ。初め本邦の企業家、資金を投するか、相集りて移民會社の如き者を組織し、農家轉住の道を開始せざる可らす。其法、現時歐洲人の作業に倣ひ、支那新客（シンケイ）、印度タミル、若くは爪哇人の如き、低廉の勞費を利用し、肥沃の森林を開拓せしむるの際、本邦老練の農家をして、墾地、播種其他一切の監督者たらしめ、農園成るの後、漸々多數の農民を輸入し、規約を設け、園地を割きて、彼等の所有に歸し、其收獲より、前資金を年賦償却せしむるに在り。若し然らずして、企業家

附錄

半島有利植物論

馬來半島の農産たる、咖啡、胡椒、米、其他熱帶生植物は、幾許の資本を投して、幾許の收益を獲べきものなるや。新坡貿易重要輸出品たる、甘密（ガンビヤ）、大薯粉（タピヤカ）、『ガタパチャ』、『ダンマー』、其他各種林產物とは如何なる者にして、其効用は如何。本附錄は即ち之を説明せんとするに在り。

科を分ちて、(一)飲食物及香料、(二)鑵謨樹脂及揮發油、(三)染料、(四)植物生纖維、(五)木材、(六)其他とし、附するに見聞の小誌を以てし、詳かならざるは、單に其名稱を掲くに止む。

(一)飲食物及香料

咖啡　又は『カヒー』咖丕　『コーヒ』（馬來語）（Coffee）

新坡市場の咖啡に二種あり、一を『アラビヤ』種咖啡とし、他を『リベリヤ』種咖啡と云ふ。共に元亞非利加の北緯十度より、十五度の間に野生せし植物なりとす。ブールス氏アビシニヤ旅行記に、『コーヒー』はエジプトの產なることを錄し、『カツフイー』なる言語は、地名カツフア(Kaffa)より起ると爲す。馬來人の本品を『コヒ』と呼ぶは、歐語の訛傳なりとす。『アラビヤ』種と稱するものは、千四百五

は最初一時に、多數の勞働者を引率して、林地開拓の業を執るとせんか、恐く本業着手の前、多額の金錢を浪費し、初期收獲の時に至る迄、座食の困難を見ん。不幸にして初期の收獲は天災人事、意外の變に遭遇するあらは、更に難狀を重ねん。勢ひ熱國不適の体格に不當の勞働を强ひ、或は衛生の道を失し、疾病、死亡、人心を阻喪せしむるに至らん。事此に至らば、假令資金の欠乏を告げざるも、容易に收支を償はざるを奈何せん。

（問）何所を邦人移住地に定むへきか。

（答）農產物の種類に從ひ一定されざるも、馬六呷南境クサン河畔、モア河傍、舊ジョホル、コーラカラン、コーランポ附近、バアナム地方、カリヤン地方、稍々交通の不便を忍ばゝ、高原開拓の業を興すに於て、チギリセミラン、パヘン國、中央クヲラ、リピス、其他の馬來森林は、悉く我が有たるを得べし。

（問）次に如何なる植物を栽培すへきか。

（答）椰子可なり、甘蔗可なり、珈琲可なり、胡椒可なり、護謨可なり、「ラミー」可なり、米可なり、藍可なり、要は熱帶永期の植物を本業とし、短期收獲物を副栽培物たらしむるに在り。乞ふ本書附錄半島有利植物論を讀め。

（問）半島農業不振の原因如何。

（答）（一）內地交通の不便なること、（二）人口稀薄なること、（半島總人口は東京府下の人口に及はす）（三）外人移住の日尙淺きこと、（四）馬來土人の怠惰なりしと等即ち是也。

由是觀之、馬來半島は、我が同胞か東洋の要鎭に新故鄕を作るの地域を有し、自今其策の實行に着手するも、決して晩きにあらざるを斷言して可なり。是れ本書か植物論、地理の如き、不味の文字を連ね、半開國の現勢を略述することを努めたる所以なり。而も其所述や、明晰を欠き、誤謬を免れさるものあらん。讀者之を諒せよ。

馬來半島事情　終

附錄

半島有利植物論

馬來半島の農產たる、咖啡、胡椒、米、其他熱帶生植物は、幾許の資本を投して、幾許の收益を獲べきものなるや。新坡貿易重要輸出品たる、甘密（ガンビヤ）、大薯粉（タピオカ）、「ガタペチヤ」、「ダンマー」、其他各種林產物とは如何なる者にして、其効用は如何。本附錄は即ち之を說明せんとするに在り。

科を分ちて、(一)飲食物及香料、(二)護謨樹脂及揮發油、(三)染料、(四)植物生纖維、(五)木材、(六)其他とし、附するに見聞の小誌を以てし、詳かならざるは、單に其名稱を揭くに止む。

(一)飲食物及香料

咖啡 又は「カヒー」咖丕 「コーピ」（馬來語） (Coffee)

新坡市場の咖啡に二種あり、一を「アラビヤ」種咖啡とし、他を「リベリヤ」種咖啡と云ふ。共に元亞非利加の北緯十度より、十五度の間に野生せし植物なりとす。ブールス氏アビシニヤ旅行記に、「コーヒー」はエジプトの產なることを錄し、「カツフィー」なる言語は、地名カツフア(Kafa)より起ると爲す。馬來人の本品を「コピ」と呼ぶは、歐語の訛傳なりとす。「アラビヤ」種と稱するものは、千四百五

十年の頃、アビシニヤ地方より、紅海を超ねてアラビヤに入り、千六百五十年の頃より、歐洲人の飲料に供せらる。後四十年を經て、蘭人之を爪哇に輸入し、漸次爪哇、司馬太來、ベリ、セレブスの各地に繁殖せり。坊間、咎里咖丕、巨港咖丕等名あり。產地に從ひ、多少の品質を異にすれども、香味は第二種『リベリヤ』に勝り、其價も亦廉ならず。近年歐人の半島に培養する『アラビヤ』種は、僅にベラ國の試培に止り、半島の產出する咖啡の全部は、第二種『リベリヤ』なりとす。明治二十九年に於ける、海峽輸出の咖啡は、總金額三百二十万弗、其中半島の產出せしもの、僅に五十万圓、未た總計の六分一に過ぎざれとも、『リベリヤ』種樹性頑强、能く半島各地の候土に適し、培養の法、亦第一者に比して容易なれは、其價格の近年殆と半額に下落せしに拘らず、園地愈々盛大となりて、此の『リベリヤ』種咖啡は、馬來半島に新領地を擴張し、將に咖啡市場の一小配權を得んとするもの、如し。

（開墾）　試に一百『エーカー』の地積を開墾せんか。其地を可成河道、陸路、鐵道、又は村落附近の交通便にして肥沃なる森林にトし、其地域の中央に園主又は監督者の住宅、幷に傭役小屋を建て、一百『エーカー』の面積を十分して、道路を縱橫に通し、之に沿ふて雨路を開き、每『エーカー』六弗以上十五弗の契約勞働受負を使役して、森林を斧征し、樹木の大、刀鋸の堪えざるものは之を存す。二三ケ月を經て、伐木悉く枯れ、新綠未た萌芽せざるに先ち、枯枝を大木の幹邊に集め、軟風に乘して猛火を四方に放つ。燒き盡されし地面に存するの灰分は、雨露之に和して肥料と成り、雷落せる如き大木は園の一方に枯存して、墾地の新舊を知るへく、拓地全く了れは、契約人去り、每五『エーカー』一人乃至一人半、永期傭役之に代はり、常に鎌鋤を手にし、雜草を除去するを事とす。（胡椒甘密大豆等の園地を開墾する凡て此法を用ゆ）

（培養）　幼樹畦を拓地の一方に設け肥料を施し、屋根を被ること我國の瓜茄子を培養するに等しく、種子を其養園に蒔き、土を被ふと一寸、二ケ月にして發芽し、六ケ月の後之を永久の本園に移す。其順序の要、（一）幼樹の發育好さを撰むと。（二）幼樹の根土を存し、（器械を用ゐて幼根と拔去るあり）其外部を椰子葉の類にて包むと。（三）移植の穴積は方一尺深二尺以上、然らずんは直根を屈するの恐あり。（四）被土の厚薄は幼樹の時と等くす。（五）移植後椰子葉を以て蔭影とす。（六）每『エーカー』平均六百株を植付る等、其他發育に必要なる草刈、排水、肥料、植換へ、枝伐り、驅蟲、皆法あり。下種の日より滿三ケ年の後、初めて結實し、樹の高六尺以上に達す。即ち小刀を以て幹頂を截り、更に生長せしめざるを可とす。咖啡の花は小にして白く、其果實は無數枝梢の周圍に點接し、其實外見我國の『おもと』に生ずる實子に酷似し、生熟すれは紅色を帶ひて美なり。

（收穫）　樹命は卅年乃至四十年、收穫の時季は每歲二度、五月より七月、十一月より一月の頃とす。然れとも咖啡は他の果樹と異り、年中間斷なく結實し、一樹にして同時に蕾を結ひ花を開き或は實を生するあり。傭役に休日なく、每朝苦力麻囊を頸にし、其生熟せるものを撰みて之を摘み、直に之を

壓搾器械場に運ひ、咖啡の果皮を剝脫したる後、其種子の飲料となるべきものを清水に浸し、日乾して初めて市場に出つ。（熟果千斤より種子百斤を得）其商品の良否、顧客の評價は、固より咖啡其樹性に賴るへきも、未熟の果實を混せしものは、其品等を均一ならしめず。浸水日乾の適度を失へば、其光澤風味を失する等、收獲以後に要する熟練注意は、尙培養の易からざるに讓らす。ロンドンにては、咖啡精製會社あり、熟果の乾製せしものを買集す。然れ共是アラビヤ種に多く、半島附近の本品は、果實の儘にて輸出せしを聞かず。大農は園地の一隅に右器械場を設け、支那人、馬來人等、五十「エーカー」以下を耕作する小農は、熟果を石油の空鑵に盛り、之を精製者に販賣するを常とす。

（收支）下種後四ヶ年にして、毎「エーカー」（我廿四反四歩）平均六百株の樹より、種子一担（ピコル）の收獲あり。（一担は我十六貫目以上）五年にして三担、六年にして五担に增加す。若も耕作地を一百「エーカー」とし、咖啡を二十五圓の相場と見積れば、滿四年にして二千五百圓、五年にして七千五百圓、六年にして一万二千五百圓の收入を得べし。然れども是概算に止るのみ。最良園の如きは六年にして七担以上、七年にして十担の收獲あるあり。殊に其經費の如きは、大農と小農、開拓の難易、交通の便其他各種の事情に從ひ、一定の豫算を爲し難きも、經驗ある半島咖啡栽培者の一人なるホッテンバーグ氏は、百「エーカー」耕作の資金を略三万圓とし、六年間の支出、乃開墾、建築、器械、監督、肥料、傭役、其他を毎「エーカー」平均八十圓とせば、咖啡の相場に多少の變動を見る共、五ヶ年にして前資本金に對する、四割乃至五割の純益を得べしと斷せり。

胡椒

『ラダ』（馬來語）（Pepper）

植物學上の胡椒、乃ち「ペッパーニグラム」なる蔓草多年生の植物は、元と印度の產にして、太古其國人、之を司馬太來の東岸に移種せしものなること、言語上に明なりと云ふ。胡椒の名は、古來群島貿易史上に、丁香、肉豆蔻と並みて、歐洲人の競爭品として高し。產地は現今半島、司馬太來、瓜哇、ボルネヲ、蘭領諸島にして、歐洲に在ては、鹽を除くの加味品として、胡椒の如く多用さるゝものは稀なりとす。明治廿九年度に於ける、植民地の輸出總額は、四百八十万弗、內百四十万弗は半島南部の產出に係り、ジョホール國を推して第一とす。是れ甘密に次ぐの最高產額たらずんばあらす。

（培養及收獲）小畦を設け苗樹を培養する、恰も咖啡の如くし、其中に胡椒の蔓を適當の長に截切せしものを挿入し、數ヶ月の後、莖の新根を生するを待ちて、之を本園に移す。苗樹大凡毎「エーカー」一千株、各々四五尺を距てゝ之を植へ、傍邊高一間の木材を幼莖に沿ふて樹立し、之に寄らしむ。熱及水氣は、其生長に最も欠く可らす。地質は高燥にして、小石多き處に適せり。莖は一ヶ年乃至一ヶ年半を經て木材に攀援し、其長五尺に達す。乃支柱の更に長大にして堅牢、雨露の久しきに耐ゆるものを以て之に代へ、莖の大部分を、支柱の根底に屈廻して、土を其上に被ふ。其目的は本植物の地下莖を屈强ならしめ、又上莖の長大を期するものにして、此法普通支那人間に行はれ、最も有效とす。

胡椒已に三年を經れは、其莖は支柱を纏繞して、其頂上に蔓延し、綠葉繁茂して幹骨形はれす、其邊幾多の穗狀果粒を點接す。加味品は之を干製し、粉末にせしものに屬す。收穫の時季は、本果の熟する前にあり。もし其好期を失すれは、辛酷なりと云ふ。又本品の市場に黑白の別あるは、製法の等しからざる所以にして、白胡椒とは、果實の外皮を剝脫せしものを乾製し、黑胡椒とは、之を存せしものを云ふ。乃ち支那人の「白椒乾」、「烏椒」と區別するもの是也。然るに古代の歐人は、兩者を全く別種の植物と信し、烏椒よりも、寧ろ白椒の培養を勉むへしとの訓令を、群島各地に下せし笑話あり。

良苑一ケ年間の收獲は、一株より五斤、一「エーカー」千株として、其收獲は平均三十五担を下らす。之を粗製胡椒(前文烏椒と稱するもの)一ピコル十圓の相場とすれは、一ケ年毎「エーカー」の收入、少くも三百五十圓にして、百「エーカー」の耕作を爲さは、毎年三萬五千圓の收入あり。

然れとも、之を以て俄に咖啡の收入と比較し、是非の評價を爲す可らす。何となれは胡椒は咖啡に比し、其培養、一層の耕作肥料を要し、殊に拓地後兩三年間は、毎「エーカー」二名の人夫を使役して、幼樹培養に幾多の雜費を要し、其經費の多額なるは論を俟たす。況んや、其收獲の時期に際し、兩者各相場の變動甚しきに於てをや。

長胡椒 (Piper longum)

瓜哇、印度地方多く本品を培養す。上述胡椒に比して、稍長なるを以て此名あり。收獲は生熟前之を摘集し、主用は興奮、驅風、補精の藥劑とす。

蔓澄茄 「ラダバレコー」(馬來語) (Piper Cubeba)

胡椒科の樓木に生する熟果にして、元と瓜哇に產し、群島各地に培植し、近年歐人又之を半島ジョホール國に試ひる者あり。其培養は胡椒に比して遙に簡單にて、種子を寄木の根邊に蒔き、發芽の後長く之に寄るに任す。馬來語の「ラダバレコー」(尾ある胡椒)は、其形狀より附名せしなるべし。果實は球圓形を爲し、基底の小梗は長し。其味は辛辣、芳香性にして稍々苦し。瓜哇人は之を加味品とし、印度人は藥用とす。本品の近年歐洲に輸出さるゝは、凡て藥用にして、主効は痳痺、慢性膀胱炎等なりとす。

大薯粉 「ウビカユ」(馬來語) 「タピヲカ」 (Tapioca)

「ウビ」とは芋、「カユ」は樹也。馬來人の「芋の木」なるものは、「マニホット」屬(Manihot)の植物にして、支那人は、本植物を薯蕷樹と名く。其根塊は食ふ可く、之より生する澱粉は、下條「サグ」粉と等しく、食用たるの外、糊及菓子製造用として、多量に歐洲の市場に輸出す。所謂「タピヲカ」是也。同屬の植物にして、「タピヲカ」を製するもの數種あり。種中又幾多の變種に分る。彼の南米に生するもの丶如きは、塊根に毒汁を含むと云ふ。半島の產は學名「マニホット、ユーチリシマ」(M. Utilissima)なりとす。

植民地の輸出額は、明治廿九年三百八十万弗。本塲は英領馬六呷にして、『甲大薯粉』（マラカタピオカ）名あり。其耕作製造事業は、殆と支那人の專有に屬し、園の大なる者は五千少くも二千『エーカー』、常に二千に近き傭役を要ふ。「ウビ」の培養は甚た容易にして、其生長亦速なり。初め適當の林藪を開きて、其地を耕し、畦を作りて之に其莖を挿入す。一ク年を經れは、地下莖は塊根となり、其溜さ灰色を帶ひたる樹皮の各部には、『けいとう』、『あかざ』の莖皮に類する凹痕を點し、木の細長なると七八尺、葉の形狀は、恰も我國の麻に似たりとす。初期の收獲は第二年目、塊根肥大にして一尺に長さものあり。多量の澱粉質を含蓄し、幼塊を簇生す。其より第二、第三回の收獲を以て止む。

收獲の量は、平均毎回一『エーカー』の『ウビ』より、五十担（ピコル）の澱粉を製出すへく、其價少くも一百圓、（澱粉毎担二弗乃至三弗と見積り）之を四年三回の收期とせは、其產額合計三百弗となり、園地一千『エーカー』を有せは、三十万弗以上なるべし。

（製造）は其產額の莫大なるに準し、大仕掛たらすんは、到底收支を償はす。是れ小農の行はれさる所以にして、製造塲は、概して人烟を絕ちし、蕃薯樹園の中央にあり。蒸溜器械を裝置して『ウビ』の澱粉を取り、之を干製す。其間の手數、最も複雜を極む。若し其經費、家屋、器具、機關、農夫、監督及職工の給料に、開墾、栽培、地價、地稅、輸出稅、及金利を打算し、收益を得んと欲するは、老手たらすんは能はす。加之耕作五年後の園地は、『ウビ』の塊根土中の滋味を吸集し去り、肥沃の土壤も再ひ用を爲さす。同時に其廣大なる製造建築も、新園に之を移さゝるを得さる不利益は、珈琲、胡椒の永期安定なるに若かざるなり。英領馬六呷が、半島農業國の先進たるに拘らず、近年大不景氣を來せしは、全く『ウビ』栽培の適度を失せし結果にして、當局者は其收獲の回數に制限を設け、地質の荒廢を防ぐに心付きしも、業已に遲し。彼の眼前の利慾に切にして、地方の興廢に些少の痛痒をだも感せざる支那人は、頻りに新園を開拓しつゝ、尙收益の不如意を嘆するの輩のみ。

椰子（カラパ）（馬來語）（Cocoanut Palm）

椰子に百種の効あり。土人は其幼莖を喰ひ、（味は竹の子に似たり）其根を嚙み、其果肉を嘗め、其乳汁を啜り、「カレー」を煮、菓子を作り、砂糖を製し、酒を釀し、又油を搾る。油は食用たるの外、燈火を點すべく、藥用と爲すを得べし。且又未熟なる果實の內部に含蓄する乳液は、甚に甘味の飲料たるのみならず、石匠之を以て白亞を溶解し、製劑家は最精「ヒマシ」油を製するに用ゐ、液を容るゝ堅殼は、稀に珍奇の椰子珠を生じ、殼は又「しやもと」、「水飲み」に風流なる可く、或は之を燒き、其灰分を『チューナム』と混すれば、屋壁を塗るの黑色染料を得べく、殼の外部を包む皮肉は、之を橫斷すれば萬年『たはし』となり、殼を組成する纖緯は、刷毛、網具、枕、ふとん綿の代用を爲すべく、其葉は屋を葺き、（半島にては「ニパ」葉を用ゆ）其灰は多量の『ポタシューム』を化成し、其葉莖は薪となり、其莖衣は西廊人粗布を織り、紙を製し、莖衣の內部に附着する綿樣の物は、血『どめ』、『もぐさ』

の用を爲す等、一樹にして効用の廣き、椰子の如きは稀なるべしと雖も、商品としての椰子は、其果肉の脂肪質にありとす。乃ち新嘉坡輸出品の一なる、

椰子干肉　『コピュラ』(Copula)

とは、熟果の外皮を去り、其堅殼を碎き、殼の内部に凝固せる、白色の果肉を取りて日干せしものなり。大陸の工藝國は、本品を輸入し、其脂肪を搾りて、石鹸蠟燭を製造するの原料に供すと。是れ近年椰子培養の、最も有利なる所以にして、熟果四十個より、椰子油二升五合を製し、一本の樹より毎年五舛を得ると。市場苔里椰子干肉名あり。平均毎担價六圓五十錢。

椰子の培養は最も容易にして、海濱地の石灰分を含ひの地質に適す。八年にして花を開き、齢百年を超ゑ、良樹は毎年、人頭大の果實百個以上を生ず。若しも生果一個を食用として、一錢に販賣するも、一樹一圓の収入あり。馬來社會に、椰子千本の不動産を有するものは、王侯の交を結ぶべく、『汝の樹に親切なれ、樹も亦汝に親切ならん』の語、人を欺かずと云ふべし。

(椰子と同科)の植物にして、地方經濟的に培養さるゝもの、(一)『ザク』樹、(二)『カポン』樹、(三)『ロンタール』樹、(四)檳榔樹あり。其野生なるものに、(五)『ニポン』樹、(六)『ニパ』樹、(七)藤の一屬あり。

『サグ』粉　又『セーゴ』西穀　碩莪　(Sago.)

『サグ』又は『セーゴ』と稱する澱粉は、棕梠科中の、『メトロキシロン』(Metroxylon)屬の植物より多く之を産す。歐人の本植物を概して『セーゴペーム』と稱するは、馬來語『サグ』より起る。然れども『サグ』なる言葉は、樹名にあらずして、其澱粉を呼ひ、馬來人は本植物を『ロンビヤ』と稱す。

同屬の植物にして、『サグ』粉を産するもの六種。中にも學名(一)『メトロキシロン、サグス』、(二)『メトロキシロン、ロンフィー』、之を多産し、共に馬來群島、太平洋諸島の各地に殖り、水澤を撰みて茂生す。木幹高二十尺、葉莖七尺を超え、其葉椰子に似て粗大、樹幹を回りて叢林を爲す。莖に刺を生するものと然らざるとあり。馬人は後者を『プロンパン、サグ』(女性の『サグ』)と云ふ。粉は其幹又莖中に含蓄する、多量の乳液を壓搾し、之を清水に沈澱せしものにて、其製法は地方に從て等しからざるも、古來南洋米なき國の土人は、其粗製の法を解し、之を常食とせり。

新嘉坡、明治廿九年度に於ける『サグ』粉、粒、(支那人の『タピヲカ』を製するに等し)の輸出は、其總額二百五十萬弗、産地はボルネヲ國サラワ、蘭領群島を大宗とす。半島にはジョホール、馬六甲に天産し、近年ペトパハ、ポラウ地方に、多少の收獲を見る。

食料としての『サグ』は、其需要及販路、未た米、小麥、其他の穀類に若かざるや遠きも、凶年の豫備品としては、其價の廉なると同時に、糊、『チョコレツ』、『ビスク』、菓子等の製造に、歐人之を多費し、其貿易は確固たり。且其收獲の非常なるは實に驚く可きものあり。

『サグ』を培養するは、水邊の底地に幼樹を植ゑ、收獲の時期は、他の熱帶生植物に比して遙かに遲き

も、耕作の勞なく、肥料を給せず、數年を經ば、樹四方に繁茂し、新株を發芽して忽ち密林を爲す。十三ヶ年後、初めて刀を加ふ可し。假りに一『エーカー』の河畔に、三百株の植付を爲すとせば、初期十三年目の收獲は三百本、此價三百弗。(粗製の澱粉を百斤一弗と低く見積り一樹より百斤を得るの割)年々幹の老大なるを撰み之を斧伐し、良苑三十ヶ年間に於ける、一『エーカー』總收獲少くも三万樹、此價金三萬弗、(平均毎年一千圓)是れ餘りに莫大の金額に上るの感あるも、其初期の收獲は十三年目なることを記臆し、左の諸說を參考せよ。

フヲレストは、モロツカ島產の一樹よりして、三百卅三『ポンド』の澱粉を得るとし、ロンフイヤス氏は、六百『ポンド』、乃至八百『ポンド』、司馬太來の良產は、九百五十『ポンド』を得、其下等なるものすら、尙四百七十五『ポンド』を下らずとし、『エンサイクロピヂヤ、ヲフ、インヂヤ』の記者は、『サグ』樹三本にして、小麥二『エーカー』以上の滋養分を含有し、六本にして『じやがたらいも』六『エーカー』に過ぎ、『サグ』樹二『エーカー』の澱粉は、小麥百六十三『エーカー』に相適すと論せり。

米　『パリ』(馬來語)　(Rice)

半島米の產地は、吧坑(パハン)國上流パハン河畔、吡羅國カリヤン、英領馬六呷、柔佛(ジョホール)クサン地方等の小地域にして、未た國內の需要を充すに足らず。是れ(一)土壤未た天荒に遺棄し、新來移民は競て、咖啡、胡椒、其他莫大の收穫物を培養するに專心し、(二)半島は暹羅、ベーヤ兩國の東洋二大米作地を扣へ、運

輸の便は、食料を他國に仰く容易なるに因らん乎。左に經驗ある石原哲之助氏が、ジョホール國モアの地方米作の一斑を、余に與へたるものを拔萃す。

(米の培養及收穫の日本との比較)當國に於る米作は、土質概して粘硬なるか故に、陸田米作よりも、水田米作を適當とす。然れ共當國には未た人工水利業の設あらされは、水田米作の觀る可きなし。今後水田米作に長したるものを輸入し、人工水利の業を起さは、全國を擧けて水田と爲すには、必適の地質と云ふ可し。總て平坦の地は粘土質にして、浸水充分なるときは、土地腐熟の深さ二尺以上に及ふものあり。故に幾十年を經るも、本邦の如く肥料を施すの必要なく、又數回の草採りをなすの必要なく、且つ稻苗移植後の耕作に至りても、一度位ひ大草のみを採り除けば十分なり。然れとも、雜艸の寒氣に逢はされは、一度生したる草は枯るゝとなく、成長速なるか故に、翌年植付前に於て、必ず之を苅除し、田打をなさゝる可らず。米種に於ては、本邦產は早晩共に適せす。其質細弱にして、且つ早熟の爲めに地に適せす。然るに當地方產の稻種は、稻の丈け長く、太くして、其質頑强なり。而して最も晩熟にして、播種後四五十日目に本田に移植し、後百六十日乃至百八十日を經て成熟し苅採するを得。本邦に於ては、早稻は播種後四五十日目に移植し、後八十日乃至百日位にして成熟苅採す。晩熟種と雖とも、移植後百二十日乃至百四十日を經過すれは苅採すへし。又陸田の米作は、成るべく山地を可とす。平坦の地は土質概して粘硬なるか故に、降雨尠き時は枯損し易く、又收獲も寡

し。反之、山地は多く砂質壌土にて、降雨尠きも、土中に濕分を含有し、乾燥の時期に際して、枯損を免る故に、土人は努めて山林を伐り開き、之を燒拂ひし後、耕鋤をなさず、倒木樹根の間に、棒を突て穴中に播種し、耕耘を施さずして多量の收獲を得。而して之を本邦の米作に比すれは、陸水共、培養上簡易なるか故に、二倍以上の廣き土地を耕守するを得て、（本邦にては、水田のみ耕守するも一人にして二『エーカー』に過ぎす。當國に在りては、水陸田共、四『エーカー』を耕守するは容易なら ん）幾十年を經るも、肥料の必要なくして、多量の收獲をなすの便あり。

（收獲の比較）　養水十分にして泥土腐熟せし水田は、一『エーカー』にて玄米十三石を得。本邦に於ては、最上の米田と雖も、一『エーカー』に付收獲する處玄米十石の上に出てす。若又普通の田地に於ては、如何なる肥料を施すも、其價廿圓以上の量を施さゝれば、玄米十石を得るは難かるべし。又陸田の米作は、山林を伐りたる新開地なれは、一『エーカー』十石乃至十二石の玄米を得るは容易なり。本邦最上の陸田は、十石の玄米を得んには、相當の肥料を施し、而も耕耘の勞容易ならざるべし。

（新田開拓の方法）　二種あり、一を林地、他を草野開拓とす。草生の原野にありては、土地の高低を實査したる後、用水路を堀割全地面に區畫を立て、畦畔を設け、養水を引用して、全地を浸すと五六ケ月に及はゝ全土は草根と共に腐熟し、泥土の深さ七八吋より一呎に至るを待ち、耕鋤を始むべし。其作業の方法に人耕と牛耕あり。人耕にては一『エーカー』に付き十五人乃至二十人の耕夫を要し、牛耕は水牛一頭に付人夫一人を以て、一『エーカー』を耕鋤するには三日を要す。此作業終るの后、尙養水に浸すこと二三ケ月にして、草根盡く腐朽し、泥土の腐熟十分なるを待て、第二回の耕鋤を施し、苗を移植して可なり。此耕鋤は一『エーカー』に付十二人夫、乃至十五人夫にて足り、牛耕は水牛一頭、牛夫一人にて二日を費すのみ。若し夫れ林地の開拓に在りては、樹木を伐り、大樹の枝と小木とを細斷して、根と幹は自然の腐朽に任し、小木及枝葉のみ三週以内に、風力烈しき日を待て、之を燒拂ふべし。此作業は森林の粗密に因り、難易一定せざるも、大均一『エーカー』に要する人夫は、三十人乃至五十人なりとす。而して用水路に堀割水を引用して、全土を浸すと前記の如くなるも、耕鋤の作業をなさす、全土の腐熟せし頃、倒木樹根の間に苗を移植するものなり。總て林地の開拓は、本邦の如く、伐木の幹根を除去せんとするは得策ならす。而も熱帶地のとなれは、六七年を出ですして自然に腐敗し、林地の開拓は却て粗易に、除草の煩なく、且多量の有機物を含有するか故に、植付得らるへき地面は狹少なるも、稻は非常の豊熟にして、收獲從て大なりとす。然れとも水田の米作は、水利の便からは草野の開拓に若かす。陸田米作の爲め山林地を開拓するは、前記水田の森林地を開拓すると同樣なるも、引用水路、且畦畔等を設くるの必要なくして、一ケ年二作の便あり。

要之、當國の米作は、水陸共、斯業に長したる本邦人に取りては、前途有望の業にして、就中水田の如きは、水利業を起さば、全國之に適する地は、擧て本邦人の掌中に歸すること疑なからん。』

其他

本條飲食物中に於ける植物にして、半島の候土に適するものは、茶、烟草、甜菜、粟、薄荷、「こんにやく」玉の樹、各種の果實樹、「チョコレツ」、野菜各色あり。甜菜及「チョコレツ」は、瓜哇を大宗とし、未だ半島に盛ならず。茶は試培に屬し、烟艸は司馬太來デレを名產とし、未だ半島に興らざれとも、前途好望なるは疑なく、粟は本邦產を移種して可なるべく、薄荷も妙ならん乎。「コンニャク」玉は、余が吧坑旅行中、屢々本邦產の二倍大なる野生物を見たり。販路を盛ならしむれば、半島は一大生產地なりとす。果實は、「ドリヤン」、「マンゲツ」、人之を賞し、其收獲の大なるは、椰子培養に劣らずと云ふ。甘焦の如きも可ならん。土人は甘焦より酒精を製するの法を知らず。

(二)護謨樹膠及揮發油

「ガタパチャ」　倔答百兒加　(Gutta-Percha)

本名は「グツタポルチャ」なり。馬來群島特有の高貴なる護謨にして、半島、司馬太來、ボルネヲ各地に多產する山欖科 (Sapotacea) に屬する「グタ、タバン、メラ」(學名 Dichopsis Gutta) と馬來語の稱する、樹木の液汁を乾涸したるものなり。普通此種の樹脂を「グタ」と云ふは、馬來語「グタ」乃護謨の義

にして、「ガタ」は訛傳なり。本品を產する「グタ、タバン、メラ」樹は、百尺より二百尺に長し、直經四五尺の喬木にして、樹幹直立し、葉の裏面には美なる褐色を帶し、五月花咲き、六月實を結び、花形小にして白く、其瓣、其蕚、各六個あり。實は油分を含蓄す。

(採集法) 古來馬來人の間に行はれたりしものは、前述同科植物を截斷し、或は各部に、三角形△の如き穴痕を穿つときは、白乳の液を流出すべし。而して液は半時間の後、水氣を發散し、之を水中に煎れば、紅色を帶ひ、後赤褐色の固躰と成る。以上の方法に依れば、一百年の老木にして、百尺餘の長幹より、平均二ポント五オンスの「グタ」を得。然れども塊片の帶色は、樹性に從ひ一樣ならざれば、其單簡なる

(試驗)は、「グタ」を裹たる液の、深紅褐色を呈するを眞正なるものとし、又其の

(元素)は、炭素　8,750　水素　12,20　より成り、

其質撓屈すべきも、彈力に乏しく、熱湯中に其塊片を軟柔ならしめ、硫化炭素、及「テレフヰン」油に溶解し、各種の製作用に供すべし。又醫學用には、齒科、外科器械、繃帶氷囊を製するに用ゆ。

(グタの種類) 「グタ」の上庄は上述「ダタ、タバン、メラ」樹より採集せしものを第一とし、之に次ぎて左の各種あり。

(2) 「グタ、タバン、ストラ」(馬來語) (Dichopsis Sp.)　學名

(8)『グタ、タバン、ポテ』（馬來語）　(Dichopsis Sp.)　學名

(4)『グタ、タバン、チエイヤ』（仝上）　(Dichopsis Pustulata)　學名

(5)『グタ、タバン、シンポウ』（仝上）　(Dichopsis maingayi)　學名

其他『ガタ』と通常稱する者は下品にして、多くは前品の混合物を云ふ。瓜哇博物館『ドクトル』ベーク曰く、『グタ』屬の植物は七種、其種族は九十二種の多さあり、然れとも其大部は、極めて少量の樹脂を含蓄すと。

古來馬來人は、『ガタ』の用法を解し、本品を湯中に煮其柔軟なるを待ち、『せんべい』の如く伸張し、之を以て茶碗及『つるべ』の類、其他各種の用器を製したりしか、群島貿易の一大輸出品たりしは、千八百四十四年、東印度會社の外科醫モントゴメリーが新坡に於て、其見本をカルカツタ病院に送りしを始めとす。而して近年『グタ』採集法の一大改良は、此嘉樹を猥りに伐倒さずして、其枝葉より同品を製造するにあり。『インベリヤル、インスチヽユート』雜誌は、『グタ』の乾葉より精良の樹脂を得、其量は伐木の結果に十數倍の增加を見るべしと說き、良樹保安の良法たることを賞して、モンス、エフヲーラン氏の名を紹介せり。氏は最初『グタ』樹の葉を、試にベリに送り、好結果を得しか爲め、一昨年來、クチン地方に乾葉場を設けたり。思ふに『グタ、バルチヤ』全盛の時代は、應に遠きにあらざるべし。

明治廿八年度　輸入二百七十五萬弗――關領ボルネヲより百萬弗、司馬太來より八十萬弗。
　　輸出三百三十四萬弗――英國へ二百卅萬弗、獨逸へ卅六萬弗。

支那名稱及相場　紅乳（一號）百九十五弗（每百斤乃一担（ピコル））。
　　仝（二號）百六十五弗。
　　仝（三號）百卅五弗。

『インヂヤラバー』『ガタ、スヽ』（馬來語）（Castchouc.）

『インヂヤラバー』と稱する、彈力性の樹脂を產する植物は、前述『グタ、タバン』と異り、世界の各地に產し、其大宗は米國『パララバー』を推す。馬來半島に在りては、殆一百年前、ピナン府外科醫ホリソン氏の發見にして、多く之を『フイカス、エラスチカ』の植物より採集し、又『ウヰロー、ベリヤ』科の蔓生植物より高品を產す。

本品を『ガタ、スヽ』と稱するは、『乳の譬喩』たる意にして、本植物の樹皮中層に含蓄する、液汁管より流出する樹液の、白色を帶ひ牛乳に似たるに因る。液の採集は、前述『ガタ』の如く、暫時にして凝固し、時日を經るに從ひ、其外部は黑色に變す。故に之を貯ふるには、常に水氣を帶はしむるに注意す。類似の植物にして本護謨を產するもの、左の各種あり。

(1)『グタ、シンガリツプ』又は『グタ、スンデ』（馬來語）　重にボルネヲ島より產する護謨は

本種ならん。別名「マヌンガ、プラウ」學名(Willughbelia Burbidgei)。

(2)「シンガリプ、イタム」(馬來語)　前者の稍々黑色を帶びたるものを云ふ。學名(W. Martabenica)。

(3)「マヌンガヌ、プヨ」(馬來語)　俗にポルチヲ護謨と稱するものにして、最も高品とす。學名(Leuconotis Eugenifolius)。

(4)「グタ、ランボン」(馬來語)　最も普通なる者にして、學名(Ficus Elastica)。

(5)「グタ、ジエロトン」　多く夾雜品に用ゆ。下品なり。

本品の採集は、前述「グタ、タバン」の如く、既に南部地方に在りては、亂伐の極近年其產額を減じ、各地の政府は、保林法を設けたり。ペラ國には南米の Hevea-Braziliensis 及 Mambot Glazovu 等を移種し、五ヶ年にして五十尺に達する樹あり。又其他の馬來人は、「グタ、ランボン」を、三四百「エーカー」培養し、各地に護謨採集の業起れり。然れ共其貿易は、未だ「グタ、タバン」の如く盛ならず。價格每担三四十圓乃至七八十圓なり。支那人は本品を軟乳、白乳一号、白乳二号、白筆乳等と名く。

「ダンマー」護謨　玷媽　一名(東洋玷媽)　(Dammer)

南洋の商品に、護謨「コーパル」と稱號するは誤なり。眞の「コーパル、ゴム」は、唯り亞非利加の產に屬し、新嘉坡市場の所謂「コーパル」とは、「ダンマー」是れなり。「ダンマー」とは、蓋し馬來語の樹膠たる義にして、其類四種あり。然れども市場の商品は左の二種に限る。

第一種は東印度「ダンマー」にして、南洋群島に產する「アンボン」松(Damara Orientalis)なり。樹根往々膠粘の液を流出し、數日を經て凝固す。

第二種は「ダンマー、バト」とす。「樹膠の石」たる義にして、樹膠の凝固せるもの。堅く其質石に似たるを以て此名あり。本品を產する樹は、半島に多產する「ダンマー、ラウ」、「ダンマー、マタクチン」、「ダンマー、メランテ」其他各種あり。

本品は共に新坡重要輸出品の一にして、(明治廿八年百〇九萬弗)　玷媽塊の帶色及び品位は、樹性に從ひ一樣ならず、淡紅、黃、白、黑、褐色あり。塊の破碎面は、玻璃樣の光澤を帶び、松脂に類せる一種の香氣を放ち、其質至つて脆し。普通の商品は細粒にして、一々之を色別し、稍々大なる者は、外部の汚物を削り精選せしものにして、支那人之を創淸玷媽と名く。

玷媽勝仍削淸(百斤)　廿三弗半　玷媽鮀靜舊港(百斤)　廿一弗

價格は下品百斤五六圓より、上品四十圓の等級あり。

輸入　セレブス島より　(五十三万弗)　ポルチヲ(英領)より　(八万弗)

輸出　英國へ　(卅六万弗)　米國へ　(卅六万弗)

主用は、洋漆、擬製こはく、ヶ各種の高貴品原料、其下品は燒香用と爲す。

安息香　『カムニャン』（馬來語）　一名護謨『ベンジャミン』（Styraceae）

本品は植物學上、齊墩果科に屬し、馬來語の『カムニャン』と稱する、喬木の樹脂を云ふ。此樹に又た「カマナン」、「カミナン」、『カマヤン』、「マナン」、「ミナン」等の方言あり。產地は暹羅、馬來半島北部、司馬太來國バタック地方、ボルネヲ、ブルネー地方にして、又之を各地に移植すべく、種子を蒔きしより七年にして、樹脂の採集を始むべしと。

其法、前文の樹木を截傷し、漸々樹脂の乾涸せるを待ち之を削集す。樹脂の精良なるは截傷後三年間の時期にして、芳香最も清快なり。其塊片は淡黃色を帶ひ、破碎面は白乳色なり。然れとも後年に至れは、赤褐色を成すと。又每年一樹の收獲は、平均三『ポンド』內外なりとす。

本品の上庄は、暹羅產を推し、之に次ぎて司馬太來安息香、カルカッタ安息香等あり。

主用は燒香料として、印度人多く之を輸入し、製劑には、化粧性洗滌水、皮膚病、薰蒸散、其他に之を用ゆ。

紫梗　又は紫鉚　『ランバラン』（馬來語）　「スチックラック」（英）　（Stick Lac.）

右は昆蟲「ラック」（Coccus Lacca）と稱する、小動物の分泌せし樹脂性の聚胞躰にして、此昆蟲か寄植する樹木は、印度地方に五十種以上ありと云ふ。紫梗の普通商品たるものは、其形隨圓にして干葡萄の如く、其質堅固、半透明にして深紅色を帶ひ、破碎面に結晶狀を呈す。品質は印度、ベーヤ、暹羅佛領交趾支那の產を賞し、半島、司馬太來は劣等なりとす。平均百斤價、暹羅大港廿一弗。

主用は、印度人は精工物を製するに用ゐ、歐洲への輸出は、酒精製造、洋漆、「セメント」、封蠟の製造用原料を目的とす。

麒麟血　又は血竭　『ジエレナン』（馬來語）　（Dragons Blood.）

古來、麒麟血と稱し來りし深紅の顏料は、各種の植物の樹膠にして、坊間の賣品には『ダシマー』を滿べたるもの多し。眞の麒麟血とは、馬來語「ロダン・ジエレナン」、學名（Calamus Draco）なる藤の一種にして、其熟果に附着する、粒狀物より製出せし者を第一とす。其法、果實を小籠中に碎き、之を、日乾し、或は湯に煮、柔軟ならしめたるものを團子とし、之を椰子葉に包む。

半島にありては、ペラ地方に產すれとも、司馬太來の東北部、シャンビーの產を可とす。同地の採集者は、「クブ」と稱する蕃人にして、馬來人は本品を彼等の手より物々交換すと云ふ。本植物は、林藪に野生するもの丶外、未た栽培せしを聞かず。

効用は「バニシュ」製造用、及製藥用彩色とし、土人は深紅の染料を得。

馬來樟腦　『カポバロス』（馬來語）　（Malay Camphor.）

樟腦を產する植物は、左の三種にして、其品質價格に大差あり。

第一　臺灣樟腦　（Chinamomum Camphor）

第二　ボルネヲ樟腦　(Dryobalanops Aromatica)

第三　馬來樟腦　(Blumea Balsamifera)　Ngai Camphor

第一者は、我國及支那の產にして、第二者は、ボルネヲ及び司馬太來の一部に特產し、品質精良、價格最も貴し。古來支那人は、廣東、海南島の地方に精製し、藥用に供したるものなり。又其發育の度第一者よりも遲くして、其腦脂は、樹幹の全部に存せず、住々固體又液体となりて、老樹の窩中にありと云ふ。本條論する馬來樟腦は、其價格の前述二者の間に位する、『カポバロス』是也。

『カポバロス』とは、馬來語の樟腦なる義にして、一說に曰く、『バロス』は司馬太來の西岸に、『バロス』と名くる地方あり、其地同樣の植物を產す、故に此言語起ると。而して本品は、高十尺餘に長する一年草にして、半島の荒野に天產する雜草なり。幹は毛茸を被り、其軟葉は鋸形を爲し、橙黃色の小頭花を開く。而して發育及び培養は、普通の雜草の如く、最も健全容易にして、乾燥の地に適し、英領ヂンチング地方には、各所に叢生すと云ふ。余は何故に機敏なる支那人が、斯の如き有利なる植物を培養せざる乎を怪む。新嘉坡植物園長は、本草の莖葉を蒸溜し、綠色の腦油を得たりとて、大に『バロス』培養の必要を論せり。思ふに本植物は、後日半島農業家の注意を惹くに至らん。

白樹油　『カユポテ』(馬來語)　又加耶布的油　(Cajeptt oil.)

本品は植物學上、『メラリユカ、カジエプト』と稱する植物の葉を蒸溜し得たる、中性稀薄の揮發油なり。通稱『カジプト』とは、馬來語カユ(樹)ポテ(白)の訛傳にして、『カユポテ』とは、本植物の樹皮白色を帶ふるより之を名く。產地はボルネヲ、セレブスを第一とし、ポーロ島の產は其名高し。葉は芳香佳快にして、其形長尖なる恰も我國の川柳の葉に類し、油は淡黃色を帶び、樟腦の如き寶透の香氣を有す。効用は刺戟、驅風、『リユーマチス』劑、土人往々之を皮膚に塗る。

其他

樹膠及び揮發油の原料は、『ミニヤ、クーイン』(前述ダンマーの液脂なるものにして、『バルサム』性を帶ひたる『バニシユ』及皮膚病劑)なり。或は丁子、肉豆蔻(ニクヅク)、『シトロネル』草、『スライ』草、『パチヨウリ』、『ニラム』、『カナンガ』、『イラン、イラン』等、共に香水、香油、又石鹼製造用に供すべし。

(三)染料

半島所產の植物及貿易品中、染料として重なるものは、

一彩色柔皮用に、甘密(ガンビール)、『カツチ』阿仙藥、檳榔膏、栲樹皮各種あり。

一藍靛に二種あり。

一黃色に、『アツカー、クニツ』、藤黃、姜黃、『モンクードウ』其他あり。

一赤色に、血蝎、紫梗、蘇木、紅花、『ホジヤ』、『イナイ』等あり。

古來馬來人種、特に瓜哇人の如きは、染物の枝に長し、其彩色の華麗にして、永久不變なるを以て名あり。現今群島各地に行はるゝ染具は、其種最も多しと雖とも、其効用の廣からざると、產額の大ならざるよりして、市場に出でざるもの大部を占む。前述染料植物中、甘密（ガンビール）は其產額第一位にして、栲樹皮の供給は限りなく、就中蓙蓐の培養は、前途最有望なりとす。

甘密（馬來語）Gambir（Uncaria Gambir, Roxb.）學名

馬來半島農產輸出金額の主位を占むるものを甘密とす。主用は、柔皮、染糸、及藥劑等なり。製革用として、其必要なるは槲皮に次ぎ、「スマ」（南歐洲に產する植物）に劣らす。本品の柔皮に與ふる光澤は、其他の鞣素を含有する染料の、決して及はざるものなりと云ふ。又褐色染具としても、廣く之を用ゐ、絹糸事業に缺く可からざるものなり。

產地は馬來半島、リヲ、リンガ、バンカの諸島にして、歐洲の市場に出つる本品は、概して新坡港の輸出に係る。明治廿八年の輸出額は、八百三十九万弗、內英國へ二百八十万弗、米國へ百七十万弗、獨、佛、蘭、印度、支那之に次く。

本品を坊間『ガンビヤ』と稱すは誤れり。『ガンビヤ』にあらすして、『ガンビール』なり。又之を檳榔膏と譯するも正しからず。古來東印度地方の產にして、支那を經、本邦に輸入せし、阿仙藥と稱するものに數種あり。『ガンビール』阿仙藥、『カツチ』阿仙藥、檳榔阿仙藥等あり。又生產地の地名に從ひ、『ベグ』阿仙藥、『コロンボ』阿仙藥等あり。共に多少の染具、及藥劑に供するも、其品質大差あり。今本條の甘密（ガンビール）は、植物學上、茜草科の亞科、規那科の『ウンカリヤ、ガンビール』なる蔓生灌木にして、馬六呷海峽沿岸の地方に特產し、其野生なるは蔓の如く喬木に寄り、園生なる者は八尺より十尺に生長し、一見灌木に異ならす。幹の直經二『インチ』乃至三『インチ』、其平滑にして細長なる枝は、四方形を爲し、其薄き樹皮は、淡紅褐色を帶ゞ。而して染料は、本植物の葉及幼枝を煎稠し、之を干製したるものなり。

（培養）最も容易なり。地質は乾燥なる砂地を好み、五百尺以下の山林を開拓する、咖啡の如くし、種子を養樹園に蒔き、二ケ月を經て發芽し、九ケ月の後一尺に長し、之を永久なる園地に移す。初年は椰子葉を以て陰影とし、之を保育す。樹命は概して十三ケ年より廿年を支ふるも、平均十五六ケ年間を以て、收獲の期とす。其間肥料を用ゐす、雨水の停滯を防くに注意せは、樹性頑强、發育最も迅かにして、栽培後二ケ年を經は、其葉を摘集するに適す。

（製法）摘取りし儘の鮮葉及ひ幼枝を釜中に煮ること三四時、傍ら苦力二人、間斷なく「テンピニス」樹の熊手を以て之を搔き回し、釜中の液は初め黃色と成り、植物の單寧性悉く液中に混和し、後暗褐色を帶ふるを待て之を引上げ、液を別器に移し、之を干涸するにあり。製造場は園の大小に從ひ釜の多少を備ふ。若し數十『エーカー』の小植園に於ては、時期に從ひ苦力釜を擔ひ、適當の地を撰み之を